3
Луна, Лайка и Носферату
月とライカと吸血姫
ノスフェラトゥ
牧野圭祐
ill. かれい
GAGAGA

小学館ｅＢｏｏｋｓ

月とライカと吸血姫　3

牧野圭祐
イラスト　かれい

3
月とライカと吸血姫
ノスフェラトゥ
Луна, Лайка и Носферату
牧野圭祐
ill. かれい

Contents

〈前奏〉 Prelude …… 10

〈第一章〉 宇宙飛行士の弟と吸血姫の室長 … 18

〈第二章〉 『アーナック・ワン』 …… 88

〈第三章〉 天体観測 …… 119

〈第四章〉 ハリケーンの夜に …… 202

〈第五章〉 太陽と月の葬送 …… 266

〈後奏〉 Postlude …… 330

Луна, Лайка и Носферату

●Cover & Logo design／Junya Arai + Bay Bridge Studio

バート・ファイフィールド
「……オペレーション部門から派遣された
バート・ファイフィールドです」
「あそこがバートさんの席です。
私はやることがあるので、
あとは隣の席のミアに教えてもらってください」
カイエ・スカーレット
ミア・トリアドール
隣席のミアと呼ばれた
新血種族は、顔も上げずに
作業に没頭している。
資料を夢中で読んでいる
ミアには声をかけにくいが、
バートは心を奮い立たせる。

「――月なんて、大嫌い」
聞き間違い、
いや冗談かと思った。
しかし、カイエは
硬い表情で続ける。
彼女の決意を
固めた瞳に射貫かれ、
パートはただ、耳を傾ける。

目次

前奏　Ｐｒｅｌｕｄｅ
第一章　宇宙飛行士の弟と吸血姫の室長
第二章　『アーナック・ワン』
第三章　天体観測
第四章　ハリケーンの夜に
第五章　太陽と月の葬送
後奏　Ｐｏｓｔｌｕｄｅ
あとがき

ガガガ10周年電子特典　カバーイラスト

月とライカと吸血姫（ノスフェラトゥ）3

牧野圭祐
ill.かれい

人物紹介 Луна, Лайка и Носферату

■ バート・ファイフィールド …… 24歳。オペレーション部門職員。Dルーム担当。

■ カイエ・スカーレット …… 24歳。新血種族の才媛。Dルーム室長。

■ ジェニファー・セラーズ …… 29歳。ANSA本部の広報部員。

■ アーロン・ファイフィールド …… 30歳。バートの兄。連合王国初の宇宙飛行士。中佐。

■ ブライアン・デイモン …… 45歳。オペレーション部門長。

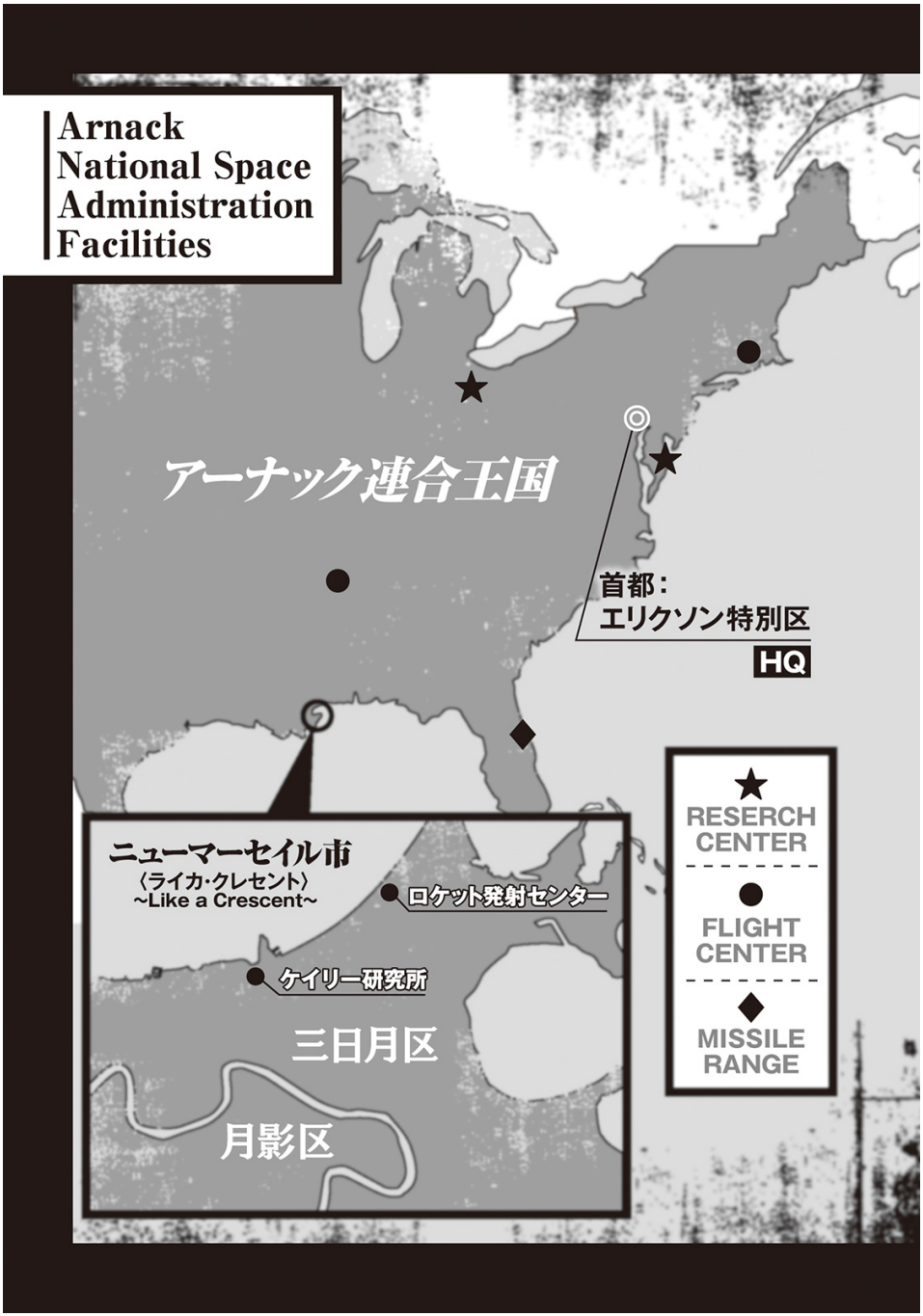
■ ミア・トリアドール …… 23歳。新血種族の女性。Dルーム室員。

■ スティーヴ・ハワード …… 七人の飛行士のひとり。軌道飛行のパイロット。中佐

■ リベルテ・スカーレット …… カイエの母。故人。

■ ドミニク・スカーレット …… カイエの父。港湾工場員。

「この物語はフィクションです。登場する人物・団体・名称等は架空であり、実在のものとは関係ありません」


Arnack
National Space
Administration
Facilities
アーナック連合王国
首都：
エリクソン特別区
HQ
RESERCH
CENTER
FLIGHT
CENTER
MISSILE
RANGE
ニューマーセイル市
〈ライカ・クレセント〉
~Like a Crescent~
ロケット発射センター
ケイリー研究所
三日月区
月影区

前奏　Ｐｒｅｌｕｄｅ

青の瞳　Ｂｌｕｅ　ｅｙｅｓ

神々しい満月が闇やみに浸食され、血の色に染まってゆく。

ふだんは月の光に隠れている暗い星々が姿を現して、仄ほのかに瞬またたく。

畏い怖ふを感じるほど美しい皆かい既き月げつ蝕しよくを、少年は天体望遠鏡で観測していた。

完全に血に染まった月が、少年の瞳ひとみを赤銅色に染める。

少年は魅入られ、息を呑のみ、心を奪われる。鼓動と脈動に呼応するように、血染めの月ブラツド・ムーンは刻々と表情を変える。

やがて、月と闇の境界線は欠け始め、血の色は薄れていく。

そして、ついに月は銀色の光を取り返し、少年の瞳は青に戻る。

神秘のときが終わると同時に、少年はゴホゴホと咳せき込む。生まれつき虚弱体質で、大病を患わずらっているわけではないが、体調を崩して寝込むことが多かった。

本当なら、丘の上から皆既月蝕を見たかった。しかし外は蒸し暑い。アーナック連合王国北部の夏は南部に比べれば一〇度以上涼しいとはいえ、微熱がある少年の身体からだには堪こたえる。だからやむなく、自室の窓から観測していた。最新型の空調機器で冷やされた部屋はとても快適だった。

少年は自分の背丈ほどもある望遠鏡を頑張って片づけると、ふかふかのベッドに寝転がり、枕元にあるペーパーバックを手に取る。タイトルは『フライ・ミー・トゥ・ザ・ムーン』。宇宙に興味を持つきっかけになったベストセラーのＳＦ小説だ。難しい単語が多かったが、夢中になって辞書で調べた。すでに暗唱できるほど繰り返し読んでいるが、何

度でも読み返してしまう。
　外で走り回ることがあまりできない少年にとって、本は友人であり、先生だ。
　昨今流は行やっている小説には、「一六世紀半ばに旧大陸から漂着した『吸血鬼始祖オリジナルズ』が生きていた」というホラーやミステリーも多かったが、少年は好きではない。残酷な内容が苦手で、なにより、怖い。恐怖でドキドキするよりは、科学でドキドキしたかった。
　少年の夢は、宇宙船の開発に携たずさわることだ。同世代の少年たちがスポーツ選手を英雄視し、心身ともに壮健な兄が軍人を志す一方で、少年にとってはロケット科学者のヴィル・クラウス博士が憧あこがれだった。
　クラウス博士が監修する科学特番がテレビで放映されれば、一言一句逃さぬようにかじりつく。宇宙科学を特集する雑誌を毎週心待ちにしている。
　ＳＦで語られるような宇宙基地や惑星間旅行は、現実の世界では影も形もない。
　しかし大人になる頃には実現しているのではないかと、信じてやまなかった。
　少年はメガネをかけ直し、本を開く。
　プロローグの文字を追うだけで、目の前に星空と大宇宙が広がる。
　自分の設計した宇宙船が、いつかは月面に到達することを夢見る。
　布ふ団とんを被かぶり、暗くら闇やみのなかで瞼まぶたを閉じると、少年は月旅行に旅立った。

朱の瞳　Ｖｅｒｍｉｌｉｏｎ　ｅｙｅｓ

埃ほこりのように小さな羽虫が舞う、薄暗いランプの下。

銀色の髪をした少女が古びた木箱を台にして、月下美人の花で髪飾りを作っている。ワイヤーとテープで茎を補強し、髪に挿さす部分を作る。しかし、なかなか上う手まくできず、茎がぐちゃぐちゃになってしまう。

「んぐぅ……私、月のお姫様なのに……」

月の女王様である母が帰ってくる前にひとりで作り上げ、驚かせようと目もく論ろんだものの、難しい。目を閉じれば、母といっしょに作っていた光景が鮮明に浮かび上がるのだが、記憶に手先がついていかない。

テープが花びらにくっつき、絡まり、形が崩れていく。

「なんで、こんな……」

自分の不器用さに苛いら立だちつつ、必死に修正を試みる。南部特有の息が詰まる蒸し暑さと、粘り着く湿気にまとわりつかれながら汗を流して頑張るが、花びらがポロポロと落ちる。

「もうっ、やだ……！」

投げ出して、髪をもしゃもしゃ掻かいた。

その髪のあいだから、尖とがった耳が覗のぞく。

少女は人間ではない。吸血鬼始祖オリジナルズと人間の血が入った種族──新血種族ダンピールだった。

無残な姿になった月下美人を見てうなだれていると、薄汚いカーテンに覆おおわれた窓にコツコツ、バサバサと何かが当たる。

きっとコウモリだろう。

皆かい既き月げつ蝕しよくの夜はコウモリもいつもより興奮しているみたいだと、少女は不思議に思う。

髪飾りを作り直したくて、代わりの花を採りに行きたいが、今夜はひとりで外に出るなと両親に強く言いつけられている。

　少女の家庭は共働きで、父も母も今夜は仕事に出ていた。父は港湾での力仕事、母は人間居住区の清掃員だ。新血種族の給料は人間の最低賃金未満なので、少女を良い学校に通わせたければ、昼も夜も働くしかなかった。
　いつもなら、そろそろ帰る時間なのだが、今日は帰って来ない。
「遅いなぁ……」
　先にお風呂に入ってしまおうかと、ワイヤーとテープを片づける。
　すると、けたたましい音を立てて玄関のドアが開く。
　帰ってきた。
　いそいそと玄関に向かうと、血相を変えた父が少女に叫ぶ。
「カイエ！」
　嫌な予感に、少女の小さな心臓がドクンと脈打つ。
「母さんが……銃で……」
　膝ひざから崩れ落ちる父を、少女はただ、見つめることしかできなかった。

　やがて大人になった少女は、夜空を見上げるたびに、心のうちで呪文のように呟つぶやく。

　月なんて、大嫌い。

東歴一九六一年四月二一日。

ツィルニトラ共和国連邦が『史上初の有人宇宙飛行』に成功。さらに、前年の二一月には『吸血鬼による宇宙飛行』を成功させていたと明かす。

このニュースは『レプス&ルミネスク・ショック』として世界に衝撃を与え、アーナック連合王国は致命的なダメージを受けた。さらにゲルギエフの演説で「差別が蔓延する前時代的な未開国」と非難され、超大国の威信は失われつつあった。

巻き返しを図りたい連合王国だが、宇宙開発競争の場外で失態を演じた。

四月一八日。隣国の革命政権打倒を試みた軍事作戦が失敗に終わり、威信はさらに失墜。

五月五日。一矢報いるように『七人の飛行士』のひとりであるアーロン・ファイフィールドが『連合王国初の宇宙飛行』に成功。

偉業は偉業だが、この飛行は弧を描いて宇宙空間を通過しただけの『弾道飛行』に過ぎず、レフ・レプスの『一〇八分間かけて大気圏外を一周した軌道飛行』に比べると見劣りするものであった。

劣勢の連合王国には、攻め続ける以外、道は残されていない。

五月二五日。技術も予算も見通しが立っていないにもかかわらず、議会は無謀な宣言をする。

「我々は、六〇年代が終わるまでに月面へ人類を着陸させ、帰還させることを目標とする」

賛否両論の中、プロジェクトは強硬策で進行する。

七月二日。連合王国は二度目の弾道飛行を成功させたが、共和国が軌道飛行を成功させている以上、もはや無意味だった。そこで、この先は弾道飛行を打ち切り、『プロジェクト・ヘルメス』の最終目標である『有人軌道飛行』に注力すると決定。

しかし、国民の支持を得られていたわけではない。

連戦連敗に不満を募らせ「宇宙開発は税金の無駄」と批判する者も多く、また、ゲルギエフの演説に焚きつけられた新血種族（ダンピール）は『純血の英雄』イリナ・ルミネスクに希望を見て、民族差別を正当化する悪辣な州法に憤怒を募らせる。

国内には問題が山積みで、国外では冷戦が激しさを増す一方だった。

危機的な状況にある、八月。

共和国が不気味な沈黙を続ける中、

連合王国政府と国立宇宙局は、背水の陣を敷こうとしていた。

第一章　宇宙飛行士の弟と吸血姫の室長

青の瞳　Ｂｌｕｅ　ｅｙｅｓ

　階段の上から、新血種族の女性がスカートをはためかせて飛びかかってきた。
「!?」
　予想だにしなかった事態に、バート・ファイフィールドの思考回路は一時停止する。
　襲われる、と咄とつ嗟さに身構えようとしたが──
「キャアッ……！」
　いや、違う。
　彼女は落下しているのだ。
　彼女の方こそ、転落を予期していなかったような表情だ。まん丸に見開かれた目に朱しゆ色の瞳ひとみが揺れて、銀の髪は流れるように舞う。
　このままでは激突する。
　逃げるなり受け止めるなりすべきなのだが、バートは人一倍、反射神経が鈍かった。
「あ……」
　と思ったときには、彼女との距離はわずか五センチ。
　グシャッ。
　覆おおい被かぶさられるように仰あお向むけに押し倒されて、バートは後頭部をリノリウムの床に打ち付けた。
「痛ッ──」
　かけていたメガネが吹き飛び、脳が激しく揺さぶられ、視界がブラックアウトする。

（……ええと……僕は……）
　記憶が飛んだ。
（……ここは研究所の地下……『吸血鬼の巣』に入れず、一度地上に戻ろうとして……）
　……潰つぶされた。
　それで、今、ひとつ確かなのは。
　二四年間の人生でもっとも、新血種族の女性と──いや、それどころか女性自体と密着しているということだ。
　視界がぼやけてはっきり見えないが、仰向けに倒れた上に折り重なるように、彼女がうつぶせで倒れている。だが、たいして重くない。
　スラックスの生き地じ越しに、彼女の足腰の骨を感じられる。細身で華きや奢しやだ。
　腹には、何か柔らかいものが当たっている。
「くうぅ……痛ったァ……」
　か細いうめき声とともに、右の鎖骨にのっていた彼女の頭がわずかに動く。繊せん細さいで柔らかな銀髪がさらさらと流れ、月下美人の花のような優雅で甘い香りがふわりと舞った。
「はぁ……死ぬかと思った……」
　彼女は安あん堵どの吐息を漏もらし、ゆっくりと顔を上げる。
　長いまつげに縁取られた目、赤水晶のような瞳ひとみは、じんわりと涙で潤うるんでいる。
　新雪のように白い頬ほお。小さな鼻の頭に指先をあてて、痛そうに撫なでる。
　と視線がぶつかった。
「あっ!?　す、すみません！」
　慌あわてふためく彼女の薄桃色の唇から、鋭するどい牙きばが覗のぞく。

あ、牙だ……とバートは思う。まだ頭がぐらぐらしていて、まともに頭が働かない。しかし、髪から香る甘い匂においや、宵よい闇やみの涼風のように心ここ地ちよい声は、なぜか知っている気がする。

「だ、大丈夫ですか!?」

彼女がバートから転がり降りると。

メリッ。

金属がひしゃげる嫌な音がした。

「ん？　何か踏んじゃった」

そう言った彼女は床を見ると「アッ」と短く悲鳴を上げ、それを拾う。

「これ……メガネ……」

つまんでいるのは、バートのメガネだ。

弦つるがぐにゃりと曲がっている。

「僕の……」

「ごめんなさい！」

彼女は床に座り込み、弦をぐねぐね曲げ、直そうとしている。

仰あお向むけのまま、バートは嘆く。

どうして、こうなった。

―今日は、素晴らしい一日になるはずだったのに。

アーナック連合王国南部、サウスミジービ州にある港湾都市、ニューマーセイル市。巨大な汽水湖ソルトレイクと、国内最長の大河に挟はさまれた地形は三日月型で、別名『ライカLike a□クレセントcrescent』と呼ばれる。

州最大の人口を誇るこの都市には、三つの特色がある。

まず、宇宙開発都市。

湖岸および湾岸地区には、国立宇宙局ＡＮＳＡの研究所とロケット打ち上げ基地がある。

次に、ジャズ生誕の地。

音楽が盛んで、飲食店街や広場では一日中ジャズが演奏されている。

そして、亜熱帯の酷暑。

今日も太陽は情熱的にめらめらと燃えさかり、八月に入ってから気温は連日、朝から摂氏三五度を超えている。

車のボンネットで卵が焼けるような灼しやく熱ねつの中、バートは小型バイクを走らせ、職場の研究所へ急ぐ。

風を切っても、むせるような熱気の層が肌を覆おおって、爽そう快かい感は皆無だ。

道路のアスファルトは柔らかく融とけ、濁にごったチョコレート色の泥を運ぶミジービ川は淀よどんだ湿気をまき散らす。

「ふぅ、三日月の街なんだから、太陽は遠慮してくれ……」

北部の涼しい気候で育ったバートにとって、南部の夏は地じ獄ごくだ。家を出た数分後には、蒸し器で蒸されたようにシャツもスラックスも汗でベタつき、毎日げんなりした気分で出勤していた。

だが今日は気分が高揚している。

なぜなら、素晴らしい日々の始まりだからだ。

路面電車の停留所にいる人々に、バートは心の中でひそかに自慢する。

ここにいるバート・ファイフィールドは、なんと『プロジェクト・ヘルメス』のオペレーション部門に配属されたぜ、と。

ＡＮＳＡでは数多くの宇宙開発計画が同時進行しているが、その中心は、やはり有人宇宙飛行だった。世間の注目を集めるのはもちろん宇宙飛行士だが、この壮大な計画には地上にも重要な仕事がたくさんあり、

なかでも、オペレーション部門はプロジェクトの要かなめといっても過言ではない。飛行計画の作成や各種調達、技術的な監視や管制塔からの指示など、バートにとっては幼い頃からの夢が叶った形だ。

辞令を受けたときは天に舞い上がる気持ちだったが、はしゃぐと同期生から呆あきれられそうで、かといって、飲みに誘える親友や恋人もおらず、冷静を装い、実家の両親に報告した程度だった。

「ふふっ……」

つい、笑みがこぼれてしまう。

『プロジェクト・ヘルメス』はバートの実兄であるアーロンが『七人の飛行士ヘルメスセブン』の一番手として宇宙を飛び、連合王国初の宇宙飛行士となった計画だ。バートはその技術チームに志願していたのだが、まさかすぐに叶うとは思ってもいなかった。何せ、この春に空軍での兵役を終え、四月からＡＮＳＡに採用されたばかりの新人職員なのだ。大学で航空宇宙工学を修めたとはいえ、何の実績もない新人が主要部門に配属されたことは光栄の極みだ。

気合いの入ったバートはシャツを新調、ネクタイを新調。オフィス用のコーヒーカップまでも新調。今日が入社日だと言わんばかりである。

桃色の百日紅サルスベリが鮮やかに咲き乱れる林道を北へ抜け、核シェルターへの誘導標識を通過する。商業地区へ入ると、【人間専用】【新血種族お断り】という民族分離の州法を遵守する看板が目立ち始める。これらはバートが生まれ育った北部にはなかった差別的な棲み分けで、初めて見たときはギョッとしたものだ。

新血種族に対する差別は、都市生活全般に及んでいる。

酷暑対策で街のあちこちに水飲み場があるが、人間の飲料水が『機械で冷却された水』である一方、新血種族は水道から出る『生温かい水』を飲むしかない。もしルールを破れば、州法による罰ばつがある。

ライカ・クレセントには、宇宙開発という未来と、民族差別という過去が混在している。

緑と水の溢あふれる市民公園を横に見ながら進むと、海と見間違うほどの、東西の直径が六〇キロもある汽水湖ソルトレイクが姿を現す。

その湖畔に、バートの勤務先であるケイリー研究所がある。戦前に設立された歴史ある航空研究機関で、国内にいくつもあるＡＮＳＡの施設のなかでも最古だ。

ケイリー研究所には国内トップクラスの頭脳が集まっているが、一般市民からすれば「謎なぞの実験をしている場所」らしく、『変人の天国ナード・ヘヴン』と呼ばれている。嬉しくない愛称だが、バートは勤務してみて「一理ある」と感じていた。ＳＦのネタになりそうな突飛な理論を多くの科学者が熱く語っているのだ。

バート自身は、変人かと問われれば、「科学と技術を結びつける工学者の自分は、現実を見ており、決して変人ではない」と思うことにしている。

研究所の広大な敷地には研究開発棟以外にも多くの施設が建ち並び、飛行機を何台も収容できる格納庫や、国内随一の風洞実験装置もある。

ここには七七〇名の人間職員、そして三〇名の新血種族の職員が勤務している。宇宙飛行士や著名な科学者がマスメディアに取り上げられる一方で、一般職員が表に出ることは皆無に等しい。前者を輝かしい月や一等星とするならば、後者は闇やみに紛れている名もなき星ほし屑くずだ。

そんな星屑の一ひと欠片かけらであるバートの職場は東区にある。西区では新血種族の職員が勤務しているが、東西で駐車場も食堂も別なので、所内では新血種族に会ったことがない。

むしろ、会わないですむのなら、会いたくない。

連合王国において、ほんの一〇〇年前まで人間の奴隷だった新血種族が、人間を快こころよく思っているわけがないのだ。

国内では人間と新血種族のあいだで小競り合いが起きているが、バートはなるべく厄介ごとには関わらないように生きてきた。命がけで闘う人権活動家を見ると、すごいなぁと他人ごとのように感心してしまう。バートにとっては、安全な道こそが最良の道である。トラブルに巻き込まれず、宇宙についてのみ考えて日々を過ごしたい。

所内で最も高い建物である本棟。その九階にオペレーション部門はあった。

「ここだ……」

バートはガラス張りのオフィスに静かに近づき、横目で様子を窺うかがう。

内装は役所風。勤務開始前のコーヒータイムのようで、皆くつろぎ、雑談している。二〇名近い男性と、ふたりの女性がいるが、新血種族は見当たらなかった。

入り口脇の壁に磁石で付けられたネームプレートを確認すると、確かに『バート・ファイフィールド』の名があった。

夢ではない。

緊張で頬ほおが痙けい攣れんする。人見知りするため、新しい場所は苦手だった。

自らを奮い立たせるために、魔法の言葉をポソッとつぶやく。

──さあ、行くぞ……！

共和国の宇宙飛行士レフ・レプスが打ち上げのときに叫んだ言葉だ。バートのお気に入りだが、もし同僚に言ったら「敵国に迎合してどうする？」と怒られそうなので、この魔法は秘密にしている。

「失礼します……」
　音を立てないようにドアを開けて、するりと入る。
　存在感のないバートには、誰も気づかない。
　どうしようかと室内を見回す。
　並んでいるテーブルには、飛行計画や数式の書かれた資料、家族写真、筆記具などが雑多に置かれ、壁には世界地図や軌道が描かれたグラフが貼られている。
　ひときわ目を引くのは、天井まで届く巨大な黒板だ。数式や図形が書き殴なぐられており、最上部には力強い筆致で『ビート・ザ・ブラックドラゴン共和国を打ち倒せ』とある。
「……えーと、僕の席はどこだ……」
　バートが入り口に突っ立っていると、近くにいた職員に訝いぶかしげな目を向けられる。職員はバートが首から提げている職員証を見て
「おっ！」と声を上げた。
「君がアーロン・ファイフィールドの弟か！」
「は、はい……！」
「おい、英雄の弟が来たぞ！」
　職員たちがざわめき、バートに群がる。アーロンは女王から名誉勲章を授けられるなど、誰もが知っている国民的英雄だった。もちろん、バートにとっては自慢の兄なのだが、複雑な思いもあった。
「君の兄を尊敬している！」「彼こそミスター・アーナックだ！」「彼の弟として誇らしいだろう！」
　誰もバートとは呼ばない。
　優秀な家族というのは、ときに残酷な存在にもなる。
　アーロンは生まれつきのナイスガイで、他人に頼らず信念を貫く『独立独行の男セルフメイド・マン』──愛国心溢あふれる理想的なアーナック人であり、弟のバートはいつも比較されていた。

さらにいえば、優秀なのは兄だけではない。

ファイフィールド家は名門の軍人一族で、祖父も父も将校だった。アーナックの歴史とともに連綿と続く立派な家系のなか、身体からだが弱く引っ込み思案のバートは肩身が狭かった。幼少期から教育費を惜しみなくつぎ込まれたお陰で、必須科目の成績だけは良好だったが、勉強以外の取り柄など、手先の器用さくらいだ。空軍在籍時も座学や整備作業では評価されたが、訓練では仲間に遅れてヘトヘトになり、「声が小さい！」といつも怒鳴られていた。

「弟君。アーロンさんのサイン、もらえないかな？」

「は、はい、頼んでみます……」

バートが共和国の宇宙飛行士であるレフの言葉を魔法にしているのは、兄に対する少しばかりの反発心があるのかもしれない。

──アーロン、アーロン、アーロン！

無限に湧わき出る兄への祝福で気が滅め入いっていると、オフィスのドアが開き、威厳溢れるオーラを放つ長身の男性が入ってきた。

瞬間、場の空気がピリッとするのをバートは肌で感じる。

ブライアン・デイモン部門長。アーロンの打ち上げのときに管制室から指示を飛ばしたフライトディレクターであり、星ほし屑くずではなく一等星だ。バートの目標とする技術者のひとりで、科学雑誌でインタビュー記事を読んだことがある。

デイモン部門長は戦時中からこの研究所に勤務しているが、もともとは戦闘機開発が主目的だったため、宇宙開発については、科学的な憧れよりも共和国への競争心が強いようだった。

朝の挨あい拶さつもなく、デイモン部門長が手を叩たたいて煽あおる。

「黒竜を打ち倒すぞ！」

皆は「イエッサー」と席に向かう。一方、勝手が分からず戸と惑まど

うバートに、デイモン部門長がゆっくり歩み寄る。
　バートは自己紹介せねばと、姿勢を正す。
「今日から配属となった、バート・ファイフィールドです」
　デイモン部門長は、厳格そうな唇を開く。
「君の席はここにはない。Dルーム―デジタルコンピューター・ルームにある」
「え？」
　理解が追いつかず硬直するバートに、デイモン部門長は温情の欠片かけらもない声で告つげる。
「チームの担当者として、君を派遣する」
「……僕が……コ、コンピューターですか？」
　何かの間違いではないかと思った。コンピューターに関する知識はゼロだ。その動揺する心を読んだのか、デイモン部門長はバートの肩を掴つかむ。
「安心しろ。コンピューターが理解不能なのは、みんな同じだ」
　デイモン部門長の言うとおり、国民の九九％はコンピューターなど見たこともない。
　コンピューターはこの世に登場して僅わずか一〇年足らずの未知の機械であり、法外に高額な値段を付けられ、さらに『ソフトウェア』という不可視の技術を組み合わされていて、一般にはまったく普及していない。
　正しく使いこなせば、手動で一〇〇〇回必要な作業が五〇回に短縮されるという驚異的な処理能力はあるが、「故障が多く、操作が難しく、使い勝手が悪い」というのが職員間の共通認識で、『予算を食う巨象ホワイト・エレフアント』だと疎うとまれている。
　バートが焦ったのは、コンピューターの担当という点以外に、もうひとつあった。

Dルーム自体も、人間から敬遠されているのだ。

研究所最西端の地下にあるその部屋は、通称『吸血鬼の巣』。新血種族の女性職員のみで構成されている異端の地だ。物好きな人間なら「女の園だ！」と喜ぶかもしれないが、バートはただ不安だった。

どう考えても、居場所がない。

いきなり、巣に落とされるなんて。

しかし、なぜ僕が……。

と、脳内にクエスチョンマークを巡らせていると、眉み間けんに皺しわを寄せたデイモン部門長に強い口調で言われる。

「『なぜ自分が？』という疑問は、今ここで捨てろ。私もやむなく、君が適任だと納得することにした」

やむなく、と言うあたりに、強烈なトップダウンであることが窺うかがえる。何も言えなくなったバートは職員の憐あわれみの視線を感じながら、デイモン部門長といっしょにオフィスの外へ出た。

「Dルームへ行ってもらう理由だが……これは、あらかじめ伝えておこう」

今さら理由など、どうでもよかった。バートは力なく「はい」と頷うなずく。

「君が今後、とある重要なプロジェクトに選抜される可能性があるからだ」

「え？」

思わずデイモン部門長の顔を見ると、口もとが苦々しく歪ゆがんでいる。その表情に不吉さを感じつつも問う。

「その……重要なプロジェクトは、何ですか？」
「最終検討中だ。ゴーサインが出たら伝える。今は新血種族の連中と巨象に慣れておけ」
　一方的に会話を切り上げたデイモン部門長は、バートのネームプレートを外すと、押しつけるように手渡す。
「君が宇宙飛行士の弟だろうと、人間だろうと新血種族だろうと、川底の泥ナマズだろうと、私には関係ない。私は君に期待はしない」
「はい……」
「君の未来は成果と実績で決まる。以上だ」
　デイモン部門長は踵きびすを返し、室内へ戻る。
　ガチャリと閉ざされたドアの前で、バートは大きく息を吐き、頭と心を整理する。
　兄と比較されるより泥ナマズのほうが気は楽だが……いったい『重要なプロジェクト』とは、何だろうか。
　しばらく考え、一部の有識者のあいだでは「月着陸には、コンピューターが必要不可欠」と言われていることを思い出し、心臓が跳ねた。
「……ひょっとして、ハイペリオンだったりして……」
　編成計画が始まったばかりの月面着陸チーム『ハイペリオン』。
　もともとは有人軌道飛行計画の後継―有人宇宙飛行計画として組織されていた『プロジェクト・ハイペリオン』は、太陽神ハイペリオンの名が示すとおり、月へ行く予定などなかった。だが、共和国との競争の煽あおりを受けて、目的が宇宙飛行から月面着陸に変更された。
　また、「新血種族に慣れろ」というのも、優秀な新血種族を登用するという民族融和政策の一環ではないだろうか。
「うーん……」
　だが、始まってもいないミッションについて考えてもしょうがない。
「……とにかく、Ｄルームへ行こう……」

太陽に灼やかれながら敷地を一〇分ばかり歩くと、工場棟の建ち並ぶ西区に着く。

バートが西区へ来るのは四月の入所時に見学して以来で、案内板を見なければ道が分からない。周囲では、髪がボサボサの技師たちが工具片手に白衣とサンダルで行き交っている。シャツにネクタイという格好のバートは場違いで、まるで本部からの視察員のようだ。

あたりを見回しても新血種族はいないが、もし出会ったら会釈くらいしようと自分に言い聞かせる。

バートは一般的な国民に比べて、新血種族に対する差別意識は薄い。幼少時から名門一族としての教養と品格を叩たたき込まれたことが一因だ。

たとえば小学生のとき、学校では習わない吸血鬼ノスフエラトウの歴史を家庭教師から聞いた。「なぜ人間は新血種族を奴隷扱いしたの？可か哀わい想そうじゃないの？」という疑問を持ったバートに、家庭教師は「人間は、悪魔を演じた結果、悪魔になったんだよ」と言った。「姿形が人間に似ている新血種族に過酷な労働を押しつけるために、皆が皆、良心を押し潰つぶし、自分の子どもたちに『新血種族は家畜』と教え込んだ。それが代々続いた結果が、今の状況だ」と。酷ひどい話だと思ったが、家庭教師の諦あきらめきった顔を見ると、「そうなんだ……」と頷うなずくしかなかった。それでもバートは、自分は悪魔にはならないと心に決めた。

この四月に、ひょんなことから銀髪のブルーエンジェルさんに服を汚されたときも、慰謝料を請求しなかった。もし仮に、自分が人間至上主義者の悪魔だったら、彼女は今ごろ酷い目に遭っていたはずだ。

新血種族とすれ違うこともないまま、バートは西の果てにある技術棟

に着き、Ｄルームのある地下階に降りた。
　窓がないため廊下は薄暗く、空気が重く淀よどんでいる。
　どこかから靴音が響いてくるが、姿は見えない。
　いよいよ『吸血鬼の巣』が近づき、心臓が高鳴る。初対面の人間としゃべることさえ苦手なのに、『吸血鬼の巣』に単独で乗り込み、新血種族の──しかも女性に囲まれる。
　想像するだけで心が折れるが、行かねばならない。
「よし……」
　さあ、行くぞ……
　さあ、行くぞ……
　さあ、行……
「！」
　廊下の先を、尖せん耳じと赤瞳の若い女性たちがスーッと通っていった。
　彼女たちはバートの存在に気づかなかったようだが、バートの心は砕け、足が止まる。
　無理だ。つらい。
　一度地上に戻って、気分を変えよう。
　踵きびすを返し、うつむきながら階段を一歩上がる。
　と、階段上の踊り場に気配を感じる。
「ん？」
　見上げて、心臓が凍りつく。
　階段の上から、新血種族の女性が飛びかかってきた──

「ふぅー……」
　目め眩まいから回復したバートは身体からだを起こし、長い息を吐い

た。
　カバンからコーヒーカップが転がり出ていたが、傷ひとつなく無事だった。踏み潰つぶされたメガネの弦つるを触ると少し歪ゆがんでいたが、買い換えるほどでもない。
　新血種族の女性は頭を深く下げ、ひどく申し訳なさそうに謝る。
「本当にごめんなさい！　考えごとをしていたら、階段を踏み外してしまって……怪け我がはしてませんか……病院へ行かれるなら治療費も……」
「いえ、僕は大丈夫ですから……メガネも、レンズは割れてませんし……」
　自分の被害状況よりも、目の前にいる新血種族が気になった。メガネをかけていないので細部がぼけて見えるが、記憶が確かならば、彼女は――
　しからばと、メガネをかける。そのとたん、彼女の方が驚きの声を上げた。
「あっ！　あなたは！」
　やはりそうだ。間違いない。
　以前、小型衛星を打ち込んできたブルーエンジェルさんだ。
　あれは、レフが宇宙飛行に成功した直後のことだ。

　研究所近くにある丘陵で、バートが昼飯のハンバーガーを食べていたとき。
　空からミサイル状の小型衛星が飛んできて、傍かたわらに置いてあった食べ物に直撃し、飛び散った食材でシャツが汚れた。
　そのとき走ってきたのが、彼女だった。
「ごめんなさいっ……クリーニング代、弁償します……」
「いや、安物だから、大丈夫です」

バートが断ろうとしても、彼女は「弁償します」と言って聞かず、必要以上のお金を置くと『ブルーエンジェル』と名づけられた小型衛星を抱えて、足早に去った。会話はそれだけで名前も連絡先も聞かなかったので、バートは彼女をブルーエンジェルさんと呼んでいた。ブルーエンジェルは、ＳＦ小説『フライ・ミー・トゥ・ザ・ムーン』に登場する宇宙船だ。バートと同年代で宇宙に興味がある者ならば間違いなく読んでいる一冊なので、「彼女も研究所の職員かもしれない」と思っていたのだが、新血種族の勤務区域とは遠く離れていたこともあり、再会することはなかった。

それが、まさか再び、命の危機を感じさせられるとは。

「君も、職員だったんですね」
バートが問うと、ブルーエンジェルさんは「はい」と柔らかく微ほほ笑えみ、首から提げている職員証をバートに見せる。
「申し遅れました。カイエ・スカーレットです」
彼女の職員証を確認したバートは「ひゃ!?」と変な声が出た。役職に『Ｄルーム・室長』と記載されている。
「室長なんですか……？」
「はい、そうです」
ごく自然に彼女は頷うなずいたが、バートの驚きを察したのか、胸の前で手をひらひらと振って否定する。
「そんな立派なものじゃないですよ。部署じゃなくて、ただの部屋なので」
とはいえ、立派なものだ。ＡＮＳＡの職員は二〇代の若者が多いが、同年代で管理職クラスはめったにいない。ましてや女性の管理職など、バートは知らなかった。

彼女はよほど優秀なのかと思いつつも、「小型衛星の墜落」と「階段からの転落」という駄だ目めな印象が強いので、室長が務まっているのだろうかと疑ってしまう。

ひょっとしたら、年上の人間ほどコンピューターを嫌う傾向があるので、若い彼女が押しつけられたのかもしれない。

と、カイエを見ると視線がぶつかった。バートが焦って目を逸そらすと、彼女は困ったように小首を傾かしげる。

「あの……お名前を伺うかがってもいいですか……？」

「あっ、すいません！」

訊きくだけ訊いて名乗っていなかった。裏返っていた職員証をあたふたと直し、Dルームに派遣されたことを告つげる。

するとカイエは目を細めて、にこやかに微ほほ笑えむ。

「あなたがバートさんでしたか！　よろしくお願いします！」

四月に彼女と話したときもバートは感じたが、彼女は人間に対して壁がない。慣れれば普通に話せそうな気がしている。今はまだ全然慣れていないので、牙きばが見えるだけでもドキドキするのだが。

「ところでバートさんは、どうして上の階に戻ろうとしてたんですか？」

「え？」

逃げようとして、とは言えない。

「……道に迷っちゃって。ここでよかった……のかな……？」

「合ってますよ。ちょうどよかったです。いっしょに行きましょう」

幸か不幸か、室長同伴での出勤になってしまった。

カイエに促され、バートはゆっくりと歩き出す。

彼女と話せたお陰で、緊張や不安はかなり薄れていた。

しかし、疑問がある。

なぜ、新血種族だけがコンピューターを使えるのだろうか？

バートは決して、新血種族の能力が人間よりも劣ると見ているわけではない。

歴史的に考えて、おかしいのだ。

今や、新血種族は戸籍のある者だけでも六〇〇万人が暮らしているが、一六世紀にアーナック大陸に漂着したときは、たった一〇〇名だった。

吸血鬼始祖オリジナルズは近くの集落で暮らす月信仰の先住民族と結ばれ、つぎつぎと子を産んだ。吸血鬼の外見が伝承に現れる月の精霊と瓜うり二つで、崇あがめられるように受け入れられたのだ。その『牙、赤せき眼がん、尖せん耳じ』という特徴は完全顕性遺伝で、一滴でも血が混じっていれば、子に発現した。

こうして吸血鬼たちは安住の地を見つけたかに思えたが、幸福はすぐに終わる。

以前から大陸で植民地化を進めていた人間たちと、新たに移住してきた人間たちが火器を手に開拓を進めた結果、新血種族と先住民族は捕らえられ、一七世紀には奴隷と成り果てた。

新血種族は、その特異な外見を『神に背そむいた者』という奴隷の象徴にされ、「太陽信仰に改宗して労働すれば神に救われる」という教えを植えつけられ、労働力として数を増やされた。その後、奴隷の扱いを巡る内戦を経て、一九世紀半ばに『奴隷解放宣言』が発布された。こうして、長らく奴隷だった新血種族は、人間の支配からは解放された──

はずだった。

宣言はされたが、国の社会構造は変わらないので、最下層の地位からは抜け出せず、子どもの頃から肉体労働に従事せねばならない。ゆえに、教育環境は整っておらず、貧困のために学費も出せない。恵まれた新血種族のなかには、新血種族でも入学可能な大学で学ぶ者もいたが、

その数は一パーセント未満。さらにいえば、ＡＮＳＡに採用された新血種族がいくら優秀だったとしても、集団でコンピューターを学ぶ環境など存在しないはずだった。

　それがどうして、Ｄルームを占拠するに至ったのか。
　まるで進化における突然変異だ。
　廊下を歩きながらバートはカイエにそのことを訊たずねてみる。
　するとカイエは足を止めて、どこか申し訳なさそうに答える。
「やっぱり、私たちが使えるなんて……気になりますよね？」
「はい。オペレーション部門の誰も、使えないみたいでしたし……」
　バートはうつむき気味に、後頭部をさすりながら返事を待つ。床で打った後頭部が痛いわけではない。女性としゃべるとき、無意識に頭を掻かいて視線を逸そらしてしまう癖があった。何度か話したことのある人間の女性ならまだしも、相手は新血種族だ。朱あかい瞳ひとみを直視できるわけがない。
「えーと……」とカイエは人差し指を顎あごに当てて小考すると、
「ちょっとラウンジで話しましょう。私、今休憩中ですし、バートさんの頭もまだ痛そうですから」と言った。

　案内されたラウンジは、地下の奥にある倉庫だった。
　所狭しとガラクタが積まれ、窓はなく、裸電球がぶら下がっている。木箱がテーブルやイスの代わりになっていて、ラウンジという言葉からは遠く離れた殺風景な空間だ。
　正規のラウンジを使っていいはずだが、やはり見えない分離看板があるのだろうか。
　去る五月、この研究所内においては、分離は撤廃された。
　ゲルギエフの人種差別批判を重く受け止めた政府により、民族融和を

推し進める改革が行われたのだ。この研究所にもトイレなどの使用を制限する州法の看板があったが、政府機関の名の下にすべて撤去された。しかし、かつて【人間専用】だった施設を使う新血種族はおらず、逆もまた然しかり。

「あの、地上階のラウンジ、利用してもいいんじゃないんですか？」

　いちおう訊ねてみたところ、カイエは申し訳なさそうに答える。

「ここの方が、居い心ごこ地ちがいいので……」

　しまった。理由は言わずもがなだろう。もっとよく考えてから訊きくべきだったと、バートは己の浅はかさに嫌気が差す。

　しかしカイエはとくに気分を害した様子もなく、バートに座るように促す。

「埃ほこりっぽくてすみません。コーヒーは人間と同じものですから、嫌でなければ、ご自由にどうぞ」

　彼女が指したコーヒーコーナーらしき棚には、電気ポットと角砂糖が置いてある。

「じゃあ……せっかくなので、いただきます」

　あまり気は進まなかったが、バートは勧められると断れないので、オフィス用に新調したカップにコーヒーを注そそぐ。煮詰めたように真っ黒で苦そうだ。

　バートがコーヒーを手に隅の木箱に腰掛けると、カイエはその正面にちょこんと座る。

　緊張するからもっと離れてくれてもいいですよ、とバートは思ったが、口には出せず、ズズッとコーヒーをすする。

　苦い。正直マズい。家庭教師から「新血種族は人間に比べると味覚がほとんどない」と聞いた記憶があるので、カフェインさえ摂とれれば味はどうでもいいのかもしれない。

　砂糖を入れようかと目をやると、カイエは角砂糖を取って、パクッと

食べる。
「っ!?」
　コーヒーを吹きそうになった。
　カイエはアッと苦笑する。
「びっくりさせちゃいました？　さっき考えごとをしすぎたので、仕事の再開前に補給をと思いまして……」
「あ、うん……」
　人間ではありえない行動に不意をつかれたが、彼女があまりにも自然に食べるので、新血種族のあいだでは普通なのかもしれないと思うことにした。
「それで、バートさん。どうして私たちがコンピューターを使えるのかですけど……新血種族がいつからこの組織で働いてるか知ってますか？」
「いや、知らないです。とくに気にしたこともなかったから……」
「そうですよね」
　歴史博物館のスタッフが案内するような口調でカイエは続ける。
「ではまず、まだ私やバートさんが子どもの頃……ＡＮＳＡが前身の『航空諮し問もん委員会』で、航空機やロケットの開発が軍事目的だった時代の話です」
　彼女の落ち着きのある声に、バートは耳をかたむける。
「航空技術の発展に伴って計算することが大量に発生し、研究者はその処理に悩まされていました。その計算業務を、アナログ計算機を使ってサポートしたのが『計算手』です。男より安く雇えるという理由で、人間女性を大量動員して、人海戦術で解かせていたようです」
　カイエは淡々と説明を続ける。
「最初は人間女性のみで処理できていましたが、計算が複雑化したところに世界大戦が勃発して人員不足となり、そこで、当時は禁じ手だった

『新血種族を臨時採用する』という案が浮上したんです。人間職員からは不満が噴出しましたが、結局、戦争の早期決着のためには雇わざるをえず、『給与を女性職員の三分の一以下にする』という落としどころで決しました」

　己の種族が虐しいたげられていた歴史を語るカイエは、やや目線を落とす。

「当初の予定では、新血種族たちは期間限定の雇用でしたが、政府が差別撤廃の方針を打ち出したために、終戦後も常に一定数は研究所で働くようになりました。つまり……職場から排除されなかっただけで、歓迎はされてないです。総合的に判断して、都合がよかっただけでしょうね……」

　カイエの声が、少し憂いを帯おびた。

　気の利いた言葉をかけようとバートが逡しゆん巡じゆんしているうちに、彼女は再び淡々と、次の話題に移る。

「デジタルコンピューターが登場するのは、戦争終結から五年経った頃です。軍用、産業用、科学計算用などの用途に合わせ、さまざまな施設へ導入され始めました。さらに数年後、数式をコンピューター用に変換する『高水準言語』が開発されました。それは―」

「あっ、あの、高水準言語って？」

　何か話さねばと思っていたバートは、ようやく口を挟はさめた。

「えーと、簡単に言えば、数あるコンピューター言語のうち、私たちが使う言葉に近いものです。科学技術計算用には『ＦＯＲＸフオークス』という言語を使うんですが、たとえば……」

　カイエはポケットからペンとメモを取り出すと、さらさらと書きつける。

```
PROGRAM HELLO
```

DO 10, I＝1,10
PRINT *,'Hello Burt'
10 CONTITUE

「こういうコードをプログラムするんです」
いまいち分からず、バートは質問する。
「高水準があるなら、低水準はあるんですか……？　低水準のほうが簡単とか……」
カイエは残念そうに首を横に振る。
「いえ、低水準言語は機械語なので、熟練者にしか扱えません。たとえばこういうもの」

TZE PXD 0754　RTT 0760

もはや暗号だ。
「……確かに、ＦＯＲＸフオークスのほうが、知ってる単語はありますね……」
「断然習得しやすいですよ。そもそも、ＦＯＲＸが作り出された理由って『プログラミングをするとき、人間に近い言語を使って楽をしたかったから』ですもの」
これまでは天空にいた神が、地上へ降りてきたような話かもしれないが、謎なぞは謎だ。
バートの困惑を読み取ったのか、カイエは優しく微ほほ笑えむ。
「安心してください。バートさんに作業を全部投げたりはしません。習得しつつ、簡単なお手伝いをしてくださると伺うかがってます」
「はい……」
いずれにせよ手て強ごわい相手になりそうだ。外国語を覚えるよりも

苦労するだろう。
「でもカイエさんは、いったい、どこで習ったんですか？」
「私、北部の大学で計算機科学を学んでいたんですけど、そのときＡＣＥのデジタルコンピューターと出会いました」
　アーナックＡｒｎａｃｋ□コンピューティングＣｏｍｐｕｔｉｎｇ□エレクトロニクスＥｌｅｃｔｒｏｎｉｃｓ社。軍にも機器を納入している世界有数の大企業だ。
　ふとバートは、彼女は資本家の娘ではないかと想像する。新血種族の中には―その数はきわめて少ないが―新血種族相手の商売で富を築いた資産家たちがいた。理工系の大学ならば、基本的に学費は高額だ。
　カイエはふたつめの角砂糖を口に入れ、話を続ける。
「大学近くの研究機関で、コンピューターを使う業務に携たずさわれたんです。そのとき直感しました。今後、アナログ計算機は淘とう汰たされて、コンピューターが科学の中心になるって。それで私は、研究に参加していたＡＣＥ社の研究員に頼み込んで教本を借りて、インターンで学ばせてもらいました」
「受け入れてもらえたんですか？」
　新血種族を拒絶する企業が多いので、意外だった。
「あちらも革新的な技術を広めたいという想いが強く、歓迎してくれました。ＡＣＥ社は『科学はすべての者に平等』という理念を掲げていたので、すごく居い心ごこ地ちが良かったです」
　逆に受け取れば、分離差別の残ざん滓しが漂うこの研究所は居づらいということだ。
　まあ、このラウンジを見れば納得だが。
　ここまで話を聞いて、彼女が新血種族にしては人間に壁を作らない件は合点がいった。おそらく社会で多くの人間に接してきたからだろう。
　しかし。

　木箱に座って角砂糖を舐なめている彼女が最先端の技術を習得しているなど、誰が想像するだろうか。職員の多くは知らないはずだ。
「カイエさんがこの研究所に入ったのは、いつなんですか？」
　バートの質問に、カイエは砂糖をカリカリと囓かじりながら答える。
「昨年末、ＡＣＥ社のコンピューターが導入されたときです。当時はまだ『Ｄルーム』という名前はなく、『解析計算部門』の作業部屋の扱いで、スタッフは私ひとりでした。ＡＮＳＡは新しいものが好きだから、予算もないのに、とりあえず採用してみたんでしょうね。新血種族の小娘がオマケでついてきたから」
「オマケ？」
「ええ。人間の社員だったら、相応の等級と給与が必要でしょう？　でも私なら、最低級で、豚の血を与えておけばいいんだから」
「え？　血……？」
「あんまりですよね？　だから、チーズもよこしなさいって言ってやりました」
　と、怒りを滲にじませていたカイエは表情をほころばせ、肩をすくめる。
「ふふっ、冗談ですよ」
「あ……あはは」
　真に迫っていたので、バートは一瞬呆あつ気けにとられた。
　だが、彼女も冗談を言うタイプなのだと分かり、少し親近感を抱く。
　カイエは真ま面じ目めな顔に戻り、話を続ける。
「それで……この研究所に来て、計算手として働いている新血種族のみんなと出会ったんです。彼女たちは優秀でしたが、持っていた知識はアナログ計算機の操作方法だけでした。そこで、私はお節介とは思いつつも、彼女たちにＦＯＲＸフオークスとデータ処理について教えることにしました。彼女たちは最初、『予算を食う巨象ホワイト・エレフアン

ト』を訝いぶかしがりましたが、説得したんです。『今のままでは失業するよ』って。もし、職員にコンピューター教育が施されるとすれば、当然、人間が優先されますから」

　その後、Ｄルームの設立が決定されたとき、知識がある者は新血種族しかいなかったため、自動的に割り当てられた。

　つまり、新血種族がＤルームにいるのは、カイエに先見の明があったからだ。

「……ん？」

　彼女が昨年からいたならば、アーロンの宇宙飛行に関わっているのではないか？

　それについて確認すると、カイエは柔らかな笑みを浮かべる。

「ええ、飛行に関する計算をしました。でも『弾道飛行』は単純な放物線なので、コンピューターなんて使わなくても簡単です」

「簡単？」

「はい。宇宙船の発射角から再進入点まで、地球の回転を考慮するだけで……あ、でも、最初に人間の科学者が考えていたことは間違っていたので、訂正が必要でしたけど……」

　Ｄルームに科学者が持ち込んだ数式を見て、彼女は過ちに気づいたと言う。

「それはつまり……カイエさんがいなかったら、打ち上げは失敗していた？」

「たぶん」

　さらりと言ってのけた。若くして室長になるだけあって、その才は計り知れない。

「階段から転落してきたカイエさんとは、別人みたいですね」

　バートが感心すると、カイエは恥ずかしそうに目を伏せる。

「あっ、あれは……軌道飛行について考えていたら、没頭してしまっ

て。新しい数式を発明しなければならないので……」
　軌道の計算には、ロケットの質量や速度、地球の重力のほか、完全な球形ではない地球の形状や、地球の回転速度など、これまで人類史に存在しなかったさまざまな要素が絡み合うのだとカイエは言う。
「私、集中すると頭が数式でいっぱいになって、周りが見えなくなるんです。脳の処理能力を全部使ってしまう感じでしょうか……」
「へぇ。足を踏み外すくらい、脳が……」
　バートがカイエの頭部に目をやると、カイエは顔の前でわたわたと手を振る。
「落っこちたのは忘れてください！　Dルームでは話さないでくださいよ！　また、みんなにアレコレ言われるので……」
　ん？
「またって、よくやらかすんですか？」
「んぐっ」
　図星だったらしく、彼女の頬ほおがポッと赤く染まる。そして、とぼけた顔をして首を傾かしげる。
「また……なんて、言ってませんよ？」
「え、でも今……」
　ふと、バートは初めて会った日の出来事を思い出す。
「そういえば、ブルーエンジェルって小型衛星、墜落させてましたよね……？」
「っ!?」
　カイエの目が、満月のようにまん丸くなった。
「あれも、『また』のひとつじゃ──」
「ち、違いますっ！　あれは趣味で、Dルームのみんなは関係ないですっ！　個人的な計算の確認！　軌道飛行における実験！」

　必死すぎる。よほど失敗に触れられるのがイヤなのだろうか。しかし、反応が面白いので、意地悪かと思いつつも、もう少し突いてみる。
「計算って、コンピューターでやったんですか？」
「はい……でも計算上は完璧だったんです！　ちょ、ちょっと私、工作が苦手で……」
　手首をねじってネジを締めるような動作をするが、妙にくねくねしていて、確かに不器用そうに見える。
「カイエさんが、ひとりで作ったんですか？」
「うぅ……」
　今さらフォローするわけではないが、バートは自分の経験を言うことにする。せっかく共通の話題だし、今後も彼女とそういう話ができたらと思う。
「じつは、僕も趣味で小型衛星を作ったことがあって―」
「え？　あっ！　だから趣味じゃなくて、実験っ！」
「ええっと、実験」
「とっ、とにかく、Dルームの業務とはいっさい関係ないですから！　だから、階段を落ちたとかブルーエンジェルとか、絶対、秘密です！　いいですね!?」
　理知的な彼女は幻だったように、巣を壊されたプレーリードッグのようにあたふたしている。あまりの狼ろう狽ばいっぷりに、バートは可か哀わい想そうになってくる。
「バートさん、秘密ですよ!?」
「あ、ハイ」
　と、気の抜けた返事をすると、カイエは前屈かがみになり、噛かみつかんばかりに牙きばを剥むく。
「絶対ですよ！　ゼッタイ！　ぜったい！　ブルーエンジェルは忘れてくださいね！」

「わ、わかりました……！　すみません……」
　バートがペコペコ謝ると、カイエは「あっ……」と急に冷静になり、姿勢を正す。
「あの、こちらこそ、すみませんでした……。私、計算の仕事は、完璧にやりますから。じゃあ、行きましょう」
　カイエは立ち上がり、バートを置いてそそくさとラウンジを出て行く。
　ポカンと呆あつ気けにとられていたバートは、コーヒーカップに残ったコーヒーをどうしようか迷ったが、捨てる場所が分からないので、一気に飲み干す。
「苦っ……」
　彼女以外の新血種族の職員も、話しやすいといいのだが。
　まったく、胃が痛くなりそうだ。

　カイエに先導されて、バートはDルームの前に到着する。
　入り口近くの壁にはオペレーション部門と同様、ネームプレートが並んでいる。人間用のプレートが白札なのに対し、新血種族は赤札だ。
　一〇名分の赤札が並んだ一番下に、バートはプレートを貼る。色の違いで、よそ者であることが際立つ。
　ガラス窓の向こうを見ると、事務作業をする新血種族をぐるりと取り囲む──巨大な棺ひつぎのような──箱形の機械類が異様な存在感を放っている。
『予算を食う巨象ホワイト・エレフアント』だ。
　棺の中でクルクルと回転する二つのリール。スイッチやツマミだらけの見慣れぬ機器。カタカタとカードを吸い込む装置に、カードを吐き出す装置。

　その光景は『吸血鬼の巣』という奇っ怪な場所ではなく、まるでＳＦ小説に出てくる近未来の秘密基地だ。
「バートさん、入ってください」
　カイエがドアを開け、手招きする。
　さあ、行くぞ……
　一歩足を踏み入れると、ひんやりした空気に首筋を撫なでられた。
　それから、香水の匂においだろうか。百貨店の化粧品売り場のような芳香が鼻び腔くうをくすぐる。
「―あれ、人間じゃない……？」
　新血種族の女性たちがバートに気づき、ヒソヒソと囁ささやき合う。
　人間が歓迎されるわけがない。全人類を代表して謝りたくなる。
　多数の赤せき眼がんに射い貫ぬかれ、アリゲーターに取り囲まれた泥ナマズのごとくバートが硬直していると、カイエが皆にふわっとした口調で声をかける。
「オペレーション部門から派遣されたバート・ファイフィールドさんです」
「あ……」
　バートはぎこちなく会釈しつつ、新血種族たちをひそかに観察する。
　美しく透きとおる銀髪はカイエだけで、皆、褐かつ色しよくが混じったような髪色をしている。年齢はバラバラで、バートの母より年上に見える者もいる。戦時中からの最古参だろう。服装は白いシャツではなく、思い思いの色とりどりの格好だ。
「バートさん、何か挨あい拶さつを」
　カイエに促されたが、ここでの挨拶は想定外なので準備をしていない。
「……オペレーション部門から派遣されたバート・ファイフィールドです」

カイエの紹介をそのまま言ってしまった。
歓迎の拍手はない。何かの機械がカタカタと動く音が響く。
つらい。
カイエに助けを求めて、バートは視線を送る。
するとカイエは片隅に置かれた簡易デスクを指す。
「あそこがバートさんの席です。私はやることがあるので、あとは隣の席のミアに教えてもらってください」
そう言い残すとカイエは無情に、部屋中央の機械に向かった。
ひとり取り残されたバートはおどおどと自分のデスクに荷物を置く。デスクの上には作業手順書と、『ＡＣＥ／リファレンス・マニュアル』という教本がある。総計一〇〇ページほどの教本をパラパラめくると、機械の説明や見慣れない数式、そしてＦＯＲＸフオークスや謎のプログラムが目に飛び込んでくる。
隣席のミアと呼ばれた新血種族は、顔も上げずに作業に没頭している。この室内でもっとも幼く見え、まだ高校生でも通じる雰囲気だ。移民の血が入っているのか、髪の色が赤っぽく、顔立ちもどことなくエキゾチックだ。
資料を夢中で読んでいるミアには声をかけにくいが、バートは心を奮い立たせる。
「すみません、カイエさんから君に教わるように──」
「ミア・トリアドール」
サボテンの棘とげみたいな返答にバートは心を刺された。
「教える」
ミアはスッと立ち上がると、棺ひつぎ型の機械をペンで指す。
「『ＡＣＥ』データ処理システム」
いきなり指導が始まり、バートは慌あわてて筆記具を準備する。ミアは機械類を次々と指し、抑揚なく早口で言う。

「カイエさんが操作してる大きなやつが中央処理装置ＣＰＵ。入力ユニットはカードリーダーと磁気テープ装置。出力ユニットは穿せん孔こう機き、磁気テープ装置、プリンター、ＣＲＴレコーダー」

　必死にメモするが追いつかない。磁気テープ装置が二回出てきた。

「ミアさん、あの」

「ディスプレイ磁気ドラムストレージ磁気コアストレージデータシンクロナイザー以上」

　もはや教える気を感じない。

「次」

　柔和なカイエに比べると分厚い壁がある。だが、これが人間と新血種族の本来の関係性だろう。まあ、彼女は極端すぎるようにも感じるが。

　バートは手順書と教本を抱え、ミアについていく。

「あの紙が、プログラムに使うパンチカード」

　室員が長方形の硬質紙をめくっている。約一九×九センチのカードに、横に八〇列、縦に一二行、一から九までの数字が印字されている。パンチカード自体はデジタル・コンピューター専用ではなく、役所などの統計処理でも使われているため、バートは触った経験こそないが、知ってはいる。

「あれが、パンチカードの元になるコーディング用紙」

　別の職員が、一行八〇文字のマス目の入った用紙に、せっせと鉛えん筆ぴつでプログラムを書く。

　断片的に説明するミアの言葉をつなげ、理解に努めるバート。

　手順書によれば―

　キーパンチャーのところにコーディング用紙を持って行くと、キーパンチャーは穿孔機を使い、用紙を見ながらパンチカードに穴を開ける。

　これで、データやプログラムの記録が終わったことになる。

　ただ、簡単にはいかない。

パンチカード一枚がプログラムの一行に相当するので、五〇のステップを踏むプログラムならば、五〇枚必要になる。複雑なものになれば一〇〇〇枚単位になるという。

部屋の隅には、一箱に二〇〇〇枚のカードが詰まった段ボールが、うずたかく積まれている。

室内を一周すると、ミアはさっさと席に座る。

「くわしくは使うとき教える。教本読んでて」

指示に素直に従い、デスクで黙々と勉強する。だが、室員たちが何をしているか気になって、あまり頭に入らない。飛び交う言葉は数式やコンピューター言語ばかり。宇宙に関する会話はひとつもない。教本も同様で宇宙の「う」の字もない。数式や複素数、見知らぬ用語、ループの並列化という意味の分からない手法など、コンピューターと科学技術計算についての説明ばかりだ。

「──あれ？　紫色のフェルトペンがない」

バートの横で、最年長の室員が引き出しが無数にあるキャビネットを探る。するとカイエが「あ、たぶん分かる」と言い、右のこめかみに人差し指を当てて、瞼まぶたを閉じる。

「えーと、左から二列目の、五段目に入れてる」

「……あった！　さすが！」

記憶力もいいんだなとバートは感心しつつ、同時に少しばかりの違和感を覚えてカイエを見ていると、どこかの機械からガリガリと異音がした。

「待って待って！」

室員たちから悲鳴が上がる。パンチカードを読み込むカードリーダーが紙詰まりを起こしている。

ミアがボソッと言う。

「よくあること」

パンチカードは紙の角に少しでも傷がついていると、詰まったり、途中で折れてぐちゃぐちゃになったりする。こうなったら最後、作り直すしかない。詰まらせた室員にカイエが優しく声をかけ、「もう一回作ればいいよ」と慰なぐさめる。

室員たちが紙詰まりを直そうと奮闘するが、機械の奥に紙が引っかかっているらしく復旧しない。バートはそんな彼女たちを見ていると手伝いたくなる。機械の修理や細かい作業は得意で、空軍時代もわりと重宝された。

カードリーダーの前に立ったカイエはげんなりと腰に手を当てる。

「ホント、困った子……誰か呼ばなきゃ駄だ目めかな……」

見るに見かねてバートは席を立ち、ソロッとカイエに近づく。

「あのー。やってみましょうか？」

「できるんですか!?」

「たぶん……」

工具を受け取ると、機械を分解して紙詰まりを直す。予想どおり、空軍の複雑な機械に比べれば楽勝だ。

「よし、これで大丈夫なはず」

電源を入れると、カードリーダーはご機嫌な作動音を上げた。室員たちから「ワァ！」っと歓声が上がる。

「すごい！　こんなあっさり！」

カイエは目をキラキラ光らせて拍手を送る。不器用な彼女にしてみたら、神の所しよ業ぎように見えたかもしれない。カイエだけでなく、ほかの室員からも羨せん望ぼうの眼まな差ざしで見られる。大したことをやったわけでもないのに、照れ臭い。

「このくらい……いつでもやりますので」

無意味にメガネを直して、席に戻ろうとすると。

「あの、バートさん」

　カイエに呼び止められた。
「……ハイ？」
「ついでに、ちょっとお願いがあるんですけど……」
　カイエは遠慮気味に、壁際にうずたかく積まれた段ボールを指す。
「パンチカードを運ぶの、手伝ってくれませんか……」

　腰と腕が痛くなるほどずっしりとした段ボールを台車に積み、バートはカイエに先導されてキーパンチャーのところまで運ぶ。重みで車輪がギーギー軋きしむ。
「はぁ……重くて、角を曲がるのもひと苦労ですね……」
　早くも身体からだが限界に達しそうなバートに、カイエは心配そうな目を向ける。
「気をつけてくださいね。ひっくり返して順番がぐちゃぐちゃになったり、カードが傷ついたりしたら、みんなから恨まれますよ」
「脅さないでください……」
「脅しじゃないです。本当に、とんでもないことになりますから……本当に……」
　妙に実感がこもっている。ひょっとしたら、カイエは転覆させた経験があるのではないか。いや、おそらくそうだ。しかし、突っ込むとまた彼女は立腹しそうなので、やめる。
　と、思っていたら。
「私がひっくり返したことあるとか、思ってるでしょう」
「え、はい」
　条件反射的に答えると。
「くぅっ……」
　カイエは悔しそうに歯を食いしばった。だったら聞かなければいいのに。しかし、それはともかく、この重労働を女性だけでやるのは大変

だったはずだ。
　すると再び、カイエがバートに問う。
「ひとつ聞いていいですか？」
「はぁ」
　今度は何だろうか。
「私やミアに教えられることや、命令されること、不快ですよね？」
　カイエは真顔で言った。
「え!?　不快じゃないです。僕、そんな顔をしてました？」
「いえ、イヤかと思って……」
　不思議そうに首をかしげるカイエに、バートは気を遣うでもなく、素直に答える。
「べつに。コンピューターを使えるのも、単純にすごいと思ってます」
「へぇー……」
　カイエは驚きと感心が入り混じった吐息を漏もらし、物珍しそうにバートを見る。
　彼女の反応はもっともで、世間一般の考えはバートとは違う。『人間が上／新血種族は下』が常識であり、こき使われるなど屈辱だ。そのような差別意識が生まれるおおもとは「豊かな生活を脅おびやかされたくない」という不安だった。
　長いあいだ、新血種族は田舎の農場で働いていたが、二〇世紀に入って農業が機械化されると多くが解雇された。そして都市部に流れた結果、低所得層の人間と仕事を奪い合う事態が発生した。この流れに人間は危機を感じた。雇い主の立場で考えれば、薄給で雇える新血種族のほうが人間よりもありがたいのだ。
　そこで心ない人間は新血種族を潰つぶしにかかる。
『元奴隷の新血種族に権利を認めさせるな！　社会の底辺に押し込めておけ！』

カイエは所内の差別について何も言わないが、おそらく、Ｄルームに入れなかった人間の計算手からは恨まれているだろう。

「ふぅ……これでおしまい……」
バートは腰を痛めながら段ボールを降ろし、キーパンチャーに大量のパンチカードを渡す。処理に時間がかかるので、引き取りは後日になる。プログラム作成に時間と手間をかけるぶん、計算速度は圧倒的らしい。
とはいえ、ＦＯＲＸフオークスによる理解不能な指示と、穴の開いたパンチカードだけでは、何が何だかサッパリ分からない。
「あの大量の計算は……ロケットのどのへんに関わってるんですか？」
バートが興味本位で訊たずねると、カイエは心苦しそうに答える。
「すみません、分からないです。私たちは、各部署から持ち込まれる計算書類を、機械的に処理するだけなので」
「え？　知らずに処理してるんですか？」
「はい。業務に必要とされる情報以外は、教えてもらえないので」
確かに数式や計算式を解くだけなら、問題文はいらないが。ＡＮＳＡの研究所内で、これほどまでに宇宙を感じられない仕事があるとは驚きだ。
「でも、教えてくれたっていい気がしますけど……」
するとカイエは言いにくそうに言う。
「もし計算の意味が分かったら、金のために外部に売る者が出るかもしれない……という判断のようです」
「はぁ……スパイですか」
信頼されてないんですかね、と声に出しかけて、失礼だろうと呑のみ込む。
「こんな業務、バートさんにとっては、つまらないですよね……？」

「いえ、そんな……どんな業務でも、宇宙開発の一員なのは確かですから……」
　心を読まれたようで、とりあえず誤ご魔ま化かすと、カイエは目を細める。
「はい。みんな宙そらに目を向けますが、私たちは私たちで、誇りを持って取り組んでます」
　一等星レベルの技術を所持しているにもかかわらず、本当に人知れず働いているのだなと、バートはあらためて感じる。
「ちなみに室員のみんなは、どのくらいでコンピューターを使えるようになったんですか」
「三か月から半年くらいですね」
　Ｄルームの面々の半数は、地方からやってきた優秀な者だという。バートは落ちこぼれないようにしなければと気を引き締める。
「ところで、デイモン部門長の言っていた『重要なプロジェクト』について、何か聞いてます？」
「何ですかそれ……？」
　まったく心当たりがない様子でカイエはキョトンと首を傾かしげる。その反応を見て、計算すら隠されるのだから重要事項を教えるわけがないとバートは気づいた。
「あ、知らないならいいです。違う部門の話かもしれないので」
「そうですか。じゃあ、戻りましょう」
　グルル……
　バートの胃が呻うめいた。チクチク刺すように痛む。原因は、吸血鬼の巣に戻るという精神的圧迫か、ラウンジで飲んだ苦すぎるコーヒーのせいか……おそらく両方だろう。
「カイエさん。すみません。トイレに寄っていきます……」

バートは近くにあったトイレに駆け込み、個室でホッと息を吐く。朝から大変だったが、ようやく落ち着けた。

出勤時は想像もしなかった『吸血鬼の巣』詰めだ。

頭が痛くなる未知の言語と、紙を詰まらせる機械。重すぎるパンチカード。人間職員がコンピューターを敬遠する理由が身をもって分かった。これまでに触れたことのないモノばかりで、とにかく、とっつきにくいのだ。

「はぁ……宇宙はどこだ……」

地下のトイレからは、何も見えない。カイエに「みんな宙に目を向ける」と言われたばかりだが、やはり考えてしまう。

「『重要なプロジェクト』に期待するか……」

泥ナマズ未満になってクビを切られないように、業務をこなすしかない。それにカイエの言葉を信じれば、今後はコンピューターが科学の中心になるのだから、強い武器になるはずだ。

一度落ち込んでもポジティブ思考になれるのは、バートの良いところだった。

「戻るか……長居してるとサボってると思われるし……」

と、個室を出たそこに、作業着姿の新血種族の男性がいた。

「！」「！」

ぶつかりそうになるほどの距離で、バートの心臓が止まりかける。

強こわ面もてで筋骨隆々の男性は驚いた様子で目を見張っている。人間がなぜここにいる……というように。

「す、すみません……」

バートがおどおどと会釈すると、相手は気まずそうに「いえ……」と会釈を返し、互いに道を譲り合う。

研究所内だというのに、まったく別の国に来てしまった気分だった。

トイレを出て時計を確認すると、もうすぐ昼休憩だ。

胃は本調子ではなく、気疲れのせいか食欲もない。
売店でサラダでも買って、ひとりで綿花畑の丘に行くか……

昼時の食堂はひどく混雑し、油の匂においと喧けん噪そうに溢あふれている。
やはりここにも、人間と新血種族のあいだには透明な壁がある。窓際の良席を人間が陣取り、新血種族たちは照明の薄暗い片隅に追いやられている。
そしてバートはDルームの室員に混じって豆サラダを食べている。
対面には、フライドポテトとオクラのスープを食べるカイエ。
ランチは外で孤独に済ませようとしたバートだったが、叶わなかった。トイレからDルームへ戻ると、カイエに開口一番、「お昼、一緒にいかがですか？」と誘われたのだ。断るのが苦手なバートは、頷うなずくしかなかった。
馴な染じめない新入りに気を遣ってくれて優しいな、とバートは感謝しているが、食堂での息苦しさは半端ではない。
周囲の新血種族からの「なぜ人間が？」という疑問の眼まな差ざし、人間からの「アイツなんで新血種族と？」という刺すような眼差し。
サラダすらも食べる気にならない。
「バートさん、食欲ないみたいだけど、体調が悪いんですか？」
フォークで豆を転がしていたらカイエに心配されてしまい、バートは「いえ、大丈夫です」と豆を無理やり飲み込む。
カイエはケチャップの海に浮かんだポテトをスプーンですくい、まるでケチャップを飲むようにして食べる。オクラのスープにもケチャップをドバドバ入れて、スープが赤くなる。おかしな食べ方をしているのはカイエだけではなく、新血種族たちは皆、調味料を過剰に使って味を濃

くしている。
　バートの視線に気づいたのか、カイエはどこか照れくさそうに口もとを緩ゆるめる。
「私、ケチャップ好きなんです」
　見たら分かります、とは言わず、別の疑問をぶつける。
「ケチャップ使いすぎで、食堂のおばさんに怒られませんか？」
「あぁ……それ」
　カイエは唇の端についたケチャップをチロッと舌で舐なめると、気恥ずかしげにはにかむ。
「以前、本気で怒鳴られました……『一本使うなら自分で買ってこい！』って……アハハ。だから、みんな自腹ですよ。たっぷり使わないと、あまり食べた気がしないので」
　食事の内容は人間と同じだが、味付けが人間向けで、新血種族にとっては薄いようだ。
　カイエの隣にいるミアも、真っ赤なトウガラシスープに、さらに激辛のハバネロソースを投入して、もはや辛味を食べている。これはいくらなんでもおかしいと思うが。
　ミアにジロリと見られる。
「……辛くする？」
「いいです……辛いのはあんまり……」
　断られたミアは、カイエがポテトを食べている隙すきを狙ねらって、カイエのスープにこっそりハバネロソースを投入し始めた。
　無表情で悪戯いたずらをしている。
　見て見ぬ振りをしておこう。
　しかし、どういう味覚をしているのか。
「あ……」
　ふと、家庭教師から聞いたことを思い出した。吸血鬼始祖オリジナル

ズと新血種族は外見こそ似ているが、五感に関わる部分はかなり違うと。

吸血鬼始祖が暮らしていた地区は極寒で冬が長いため、耐寒が高い。そして日照時間が短いため、夜目が利く。また、主食が血液と成分が同じである動物の乳だったため、血液以外に対する味覚がない。

一方、人間の血が入った新血種族は、代を重ね、連合王国の環境に適応するうちに、五感が人間に近づいていった。昼間の明るさや太陽、暑さに耐性が生まれ、味覚もわずかに獲得した。吸血の名残なのか、味を濃くして塩分過多になっても、それが原因で病気にはならないようだ。

そして、吸血行為。

新血種族には、きわめて稀まれに『吸血鬼症候群ノスフエラトウ・シンドローム』を発症する者がいる。発症するのは、皆かい既き月げつ蝕しよくなど、月が血の色に染まる日に多いとされるが、くわしく研究されていない。

吸血と言っても、人を噛かみ殺した例は近年なく、動物を噛んだというニュースが年に数回ある程度だ。しかし、ひとたびニュースに出れば、まるで連続殺人犯のように騒がれる。マスコミにとって吸血鬼症候群は美お味いしいネタだった。

また、「新血種族に噛まれかけたので銃撃した」という吸血未遂事件も時折起きていたが、「噛まれかけた」とは人間至上主義者の嘘うそであり、正当防衛ではなく、単なる銃撃だと言われている。だが裁判所で判決を下すのは全員人間なので、たとえ新血種族を撃ち殺しても、数年の懲役か、確たる証拠がなければ無罪となることもしばしばだった。

ジリリリリ！

「ん？」

突如、食堂内にベルが鳴り響いた。緊急放送の合図だ。

和なごやかな空気が一瞬にして凍る。

バートは手にしていたフォークを自然と握にぎりしめ、カイエは湯気の立つスープカップを口に運びかけた姿勢で固まる。皆、雑談を止める。

まさか、核戦争か。

天井のスピーカーから、強こわ張ばった声のアナウンスが流れ出る。

《―現在、共和国のミハイル・ヤシン飛行士が、宇宙飛行中》

「!?」

予告なしの攻撃に頭をぶん殴なぐられる。

皆、固かた唾ずを呑のむ。

《―二五時間で地球を二〇周し、食事を三食、さらに睡眠を取るとの情報アリ》

目まいを覚えるような衝撃を打ち込まれた。

「……ホントかよ？」

連合王国の実績は『たった一五分の弾道飛行』だ。残酷なまでの差をつけられた。

凍っていた時間が動き出し、重苦しいざわめきが広がる。あるグループは呆ぼう然ぜんとし、あるグループは食堂を駆け出ていく。

共和国は、すごい。

率直に、バートはそう思った。悔しさよりも、共和国の技術力に対する感心が勝る。ただ、その一方で、兄の宇宙飛行の価値がどんどん失われていくような寂しさが胸に満ちる。

バートの対面にいるカイエはスープカップを持ったまま、心ここにあらずという様子で天井を見上げている。声は聞き取れないが「すごい……」とつぶやいたのが唇の動きで分かった。そして彼女はぼんやりしたままスープカップを口に運び、ぐいっと飲んだ。その瞬間。

「んぐっ！」

目を丸くしたカイエは慌あわててカップを口から離すとガシャンと落

とすように置き、両手で口を押さえて「熱っ、辛っ！」と呻うめく。
　突然の行動に、バートも室員の皆も呆ぼう然ぜん。
　カイエの朱あかい瞳ひとみが涙で潤うるむ。
「み、みみず、みみず……」
「ミミズ？」
　ミアが意地悪な顔で聞き返す。
「水ぅっ……！」
　カイエはヒィヒィ喘あえいでいる。熱くて火傷やけどしたらしい。しかもミアが超激辛にしたスープだ。
　その痛みは、想像したくない。
　ごくごくと水を飲んだカイエは、舌をベーッと突き出して、手で風を送って冷ましている。
「カイエさん？　どうしました？」
　悪びれもせずミアが訊たずねると、カイエは額から汗を流しながら、手をひらひらと振る。
「な、なんでもないよ。お水だと思って飲んだら、スープでびっくりしただけ……」
　水と勘違いしたのかよ。バートは心の中でつっこんでおく。
　ミアがジトッとした目でカイエを見る。
「どうせまた、何か計算してたんですね？」
「アハハ……でも、なんか辛すぎないかな……今日のスープ……」
「一気に飲むなんて、ワタシも想定外でした」
「ん？」
「なんでもないです」
　ミアは目を伏せ、真っ赤なスープをチュルチュルとすする。
　カイエに照れたような苦笑いを向けられたバートは、どうしていいか分からず、苦笑で返す。

ドジなのは皆にバレバレだし、むしろ遊ばれてるじゃないかと思ったが、ブルーエンジェルの件はきつく口止めされていたので、忘れることにした。

ライカ・クレセントの中心街には、歴史を感じさせる建物が立ち並んでいる。装飾の美しい街並みは観光地になるほどで、水揚げされたばかりの新鮮な魚介類を振る舞う料理店が多く、地価の高いその周辺は、医師や弁護士などの高給取りが住む高級住宅地となっている。

一方、安月給の研究所職員の住まいは、中心から離れた湖畔か、あるいは町外れだ。ＡＮＳＡには予算がないので、研究は最先端でも待遇は町工場と変わらない。新人であるバートの給与は言わずもがなで、家賃の格安なミジービ川沿いの、築二〇年のアパートに住んでいる。

吸血鬼の巣から生還したバートは心身ともに疲労困こん憊ぱいだ。シャワーを浴びてもスッキリしない。ひとり掛けのソファーに深く沈み、氷の浮かぶコーラを飲む。帰りに買ってきた科学雑誌を読む気力もなく、書棚からだらしなく溢あふれた本の上にポーンと放り投げる。テレビのベースボール中継では、バートの地元のチームが九点差で負けている。

一息吐ついて、ぼんやりと、今日一日を思い返す。

朝は歓びに包まれて出勤したのだが、その高揚感はすっかり霧散していた。

「……月に到達するのが先か、僕が倒れるのが先か……」

デイモン部門長の言っていた『重要なプロジェクト』に希望を託す。部門長自身があまり乗り気ではなかった点は引っかかるが、泥ナマズに期待していないだけだろうとバートは自じ虐ぎやくする。

ベースボール中継が終わり、ニュースが始まる。
《──不満の高まる新血種族が、大規模なデモを起こしました》
連日、暗い話題ばかりだ。
《──暴動に発展しかけましたが、鎮圧されました。怪け我が人が多数出ているとの情報が──》
デモには危険がつきもの。人間至上主義者のなかには、騒ぎに乗じて暴力を振るう過激派もいる。その最たる例が、秘密結社 [ソーラーフレア・クラブ] だ。
一九世紀後半、人間男性のあいだで、多種多様な目的を持つ秘密結社を作ることが流行した。 [ソーラーフレア・クラブ] もそのうちのひとつだが、結成当初は過激さの欠片かけらもなく、暇ひまな若者たちが吸血鬼小説に影響されて作ったオカルトグループだった。
太陽神ハイペリオンを崇あがめる胡う散さん臭くさい儀礼を考え、鳥のくちばし型のペストマスクと黒いマントを着用し、新血種族を追いかけて遊んでいたのだが、次第に団員が増え、悪ノリが始まり、いつしか『病の元凶である新血種族を、太陽フレアで浄化する』という危険思想集団となった。
ふだん、団員は一般市民を装っているが、夜の活動時になると変装する。団員には元兵士や炭鉱夫などの爆薬に精通した者もおり、近頃は新血種族たちの家や教会に爆弾を仕掛けるほどだった。
破壊行為はもちろん犯罪だが、見逃される。その理由は、街によっては州警察や保安官補が団員だったからだ。 [ソーラーフレア・クラブ] による犯罪は、犯人が特定されず、逮捕や断罪も稀まれで、ついには「亡霊の悪戯いたずら」と言われるようになった。
ライカ・クレセントも例外ではない。
以前、バートが深夜にミジービ川沿いを散歩していると、河原で業火の儀式をする一団と遭遇した。闇やみに蠢うごめく不気味な姿は中世か

ら蘇よみがえったようで、遠目から燃やしているものが見えたのだが、それは、イリナや市民運動家の顔写真で──身の毛がよだち、転がるように逃げた。以来、夜間の外出は控ひかえている。気味の悪い亡霊の姿が脳裏に焼き付いて離れないのだ。

「けど……まさか、新血種族と仕事するなんてね……」

バートは窓の外に目をやる。

鈍にぶい月明かりの下、泥で濁にごったミジービ川がゆるやかに流れる。

かつての内戦で血の色に染まり、『ブラッド・リバー』という禍まが々まがしい異名を与えられた大河は、同時に、街の『ブラッド・ライン』──血の境界でもあった。

人間と新血種族の居住区はミジービ川で明確に分断されており、新血種族は川向こうの月げつ影えい区くに住んでいる。人間の住む三み日か月づき区くを『光』だとすれば、月影区は『闇やみ』だ。

街の住民は九割が新血種族で、残りの一割は、新血種族の家族となった人間や貧困移民、不法滞在者たち。「治安が悪いので、人間は用がなければ立ち入るべからず」と公的に警告されており、時折銃声も響く。バートは自ら好んで危険に首を突っ込むタイプではないので、もちろん橋は渡らない。

しかし、バートはDルームで仕事をして思った。カイエたち新血種族は人間とほとんど変わらないのではないかと。外見と味覚は大きく異なるが、感じた違いはその程度だ。世の中には、「新血種族という民族は、人間より劣り、不誠実で怠惰」というイメージが蔓まん延えんしているが、未知の機械と向き合う彼女たちに関しては、むしろ真逆の印象を受けた。

ニュースの話題は、宇宙飛行士ミハイルの軌道飛行へ移る。「ゲルギエフ書記長のコメントが届いた」とキャスターが言う。

テレビの画面には自信に満ちたゲルギエフが映り、勝利の笑みを抑えきれない様子で声を張り上げる。
《―連合王国が花火大会やキャッチボールをしている間に、我々は月にまた一歩近づいた！》
花火大会は『打ち上げ失敗』、キャッチボールは『地上から地上へ放物線を描くだけの弾道飛行』を皮肉ったものだ。
「完全に見下されてる……」
悔しいが、惨敗続きで反論の余地もない。
東歴一九五七年、人工衛星『パールスヌイ一号』に対抗した打ち上げは、二秒で爆発。
一九五九年、共和国は月の裏側の写真を撮ったが、連合王国は未達成。
そしてイリナ、レフ、ミハイルの宇宙飛行。
ニュースキャスターは視聴者の不安を煽あおる。
《―ロケットで核爆弾を配達されたら終わり。衛星で国防を盗撮されたら終わり。ＡＮＳＡは、国家予算を食い潰つぶす巨象でしょうか？》
「頑張ってるよ……！」
バートはテレビを切ると、氷の溶けきったコーラを飲み干す。
いくら頑張っても、宇宙の暗くら闇やみでもがいている気分だった。

星の瞳　Ｓｔａｒ　ｅｙｅｓ

連合王国北部にある首都、エリクソン特別区。
ミハイルの飛行成功を受けて、首相や閣僚などの政治家、ＡＮＳＡの局長や最高地位の科学者たちがＡＮＳＡ本部に集まり、緊急対策会議を開いている。

激昂した上院議員が唾つばを飛ばす。
「昼夜にわたる宇宙飛行は『いつでも核を落とせる』という意思表示だ！　ゲルギエフは平和を強調するが、そんなものは世界から支持を得るための方便に過ぎん！」
政府は核攻撃に恐怖し、自分たちだけが逃げ込むための巨大核シェルターを──国民には秘密で──ホテルの地下に建設しているような状況だった。
「なんとかせねば、女王陛下に顔向けできないぞ！」
今年で一八歳になるアーナックの女王は宇宙開発計画に対し、いっさい発言していない。それは本人の意思ではなく、広こう汎はんな影響力を有する立場にあるゆえに、議会から口止めされていたというのが正しかった。
宇宙開発支持派と反対派が激論を交わす。
「国民は恐怖しています。共和国に対抗できるというアピールのためにも、早急に軌道飛行を成功させなければなりません」
だが、予算の問題がつきまとう。
月着陸宣言をした以上は突き進まねばならないが、膨大な予算を使う事実が明らかになると、国民から批判が噴出した。
「国内では暴動が多発。国外では戦争の危機。税金を使う場所は山ほどある！　失敗続きの計画に、どれだけかけるつもりだ!?」
反対派の非難を、支持派がなんとか受け止める。
「予算がなければできません。金属、燃焼、誘導システム……何もかも新しく作らねばならないのです」
ロケット開発の各工程は、私企業による入札だったが、予算不足のために安価で品質の悪いものばかり採用され、それが失敗を繰り返す一因でもあった。アーロンの打ち上げも、最安値の部品ばかりで組み立てられた粗悪品だった。

宇宙開発競争に費やされる予算は、実際のところは、本物の戦争の一割程度だが、「宇宙」「史上初」という派手さと飛行の無利益さばかりがピックアップされ、非難の対象になりやすい。

国家が夢とロマンだけで月を目指すことはできない。

月着陸など、もはや国家としての意地だけだ。

そもそも『人間を宇宙へ飛ばす価値』は前々から議論されていた。

科学的な研究探査ならば、無人飛行で十分可能なのだ。国民を宇宙に送り込んだところで、得られるものは名誉と話題性以外に乏しく、有人月着陸に至っては、共和国との競争に勝つこと以外に、何のメリットもない。

この事実は、国家上層部は皆、承知している。

ＡＮＳＡ副長官でさえ、かつて上院議員から「人間が月へ行ったとして、どのような実用性があるのか？」と問われたとき、「私にとっては無意味だ」と即答していた。

「科学的価値を追及するならば、共和国など無視して、宇宙空間に実験室を作るか、無人探査機でより遠くの天体を目指すべし」

これが妥当な意見だ。しかし、その一方で「宇宙飛行士なしの無人計画など、納税者の国民が認めない。国民は時代の英雄を求めている」という難点もあった。

その英雄を誕生させたのが、共和国だった。

レフとイリナについての報告が入る。

「彼らは共和国の近隣諸国を回っていますが、どこへ行っても大歓迎され、地球の英雄になりつつあります」

イリナの人気が高まるほど、連合王国の新血種族が騒ぎ、差別を世界中から批判される。

世界はゲルギエフの術中に陥っている。

「もたもたしていたら、『東の妖術師チーフデザイナー』に次の呪術を

放たれるぞ！」
　共和国のロケット開発を取り仕切る正体不明の人間を、政府は悪魔のように恐れていた。連合王国の秘密情報部は世界中で諜ちよう報ほう活動をしているが、共和国の内情に関してはからっきし駄だ目めだった。
　侃かん侃かん諤がく諤がくの渦中、沈黙を守っていた白髪の壮年男性が、ゆっくり挙手をする。
「ひとつ、いいですか」
　その声に、皆が注目する。
　連合王国のロケット開発責任者、ヴィル・クラウスは、異国訛なまりの発音で穏やかに話す。
「データを解析する限りでは、共和国にはまだ月へ行ける技術はありません。軌道飛行とはまったく違う技術が必要になりますから」
　スパイが共和国の情報を取れなくても、レーダー網から得られた飛行データをコンピューターで解析し、だいたいの技術力は把握できた。
「ならばどうする。我が国は月どころかキャッチボールではないか」
「私のロケットは、危険性は残りますが、軌道飛行は可能です。三月の三号機の失敗も、すでに修正できており、花火大会にはなりません。そして『ＡＣＥ』も、処理能力は十二分にあります。例の彼女が書いたという研究論文や技術報告書も使えるでしょう」
　クラウスは開発責任者といえども、敗北の責任を負っているわけではない。連合王国のロケット技術が遅れた最大の原因は、開発を担当していた軍部が陸海空に分かれて無益な派閥争いをしていたことだ。その頃、天才科学者であるクラウスとそのチームは、移民であることを理由に排除され、僻へき地ちの研究所で苦汁を嘗なめさせられていた。
　軍部の目を醒さまさせたのは、『パールスヌイ・ショック』だった。国防総省で議論して「内部争いしていたら自滅する」とようやく気づき、宇宙開発の組織をひとつにまとめた。それがＡＮＳＡだ。そしてク

ラウスが開発指揮を執り始めると、業容が一変した。
　しかし、国民は経過や内情など知らず、結果で判断する。
　共和国が宇宙飛行を成功させたとき、国民はクラウスを無能扱いし、移民の戦争犯罪人だと糾弾した。月へ人間を送る無意味さなどクラウスも重々承知だが、価値や意味では語れぬ想いがあった。
　業を煮やした首相が、テーブルをドンと拳こぶしで叩たたき、結論を求める。
「現状はもういい。問題は今後だ」
　近い将来、月着陸計画推進のためにケイリー研究所を拡大移転し、チーム・ハイペリオンを組織する予定だった。だが国民の支持を得られず、予算が減額となれば、もはや宇宙計画そのものを打ち切ったほうが得策と言える。
「まず第一に、『プロジェクト・ヘルメス』。実験を続けるか否いなか」
　ＡＮＳＡ上層部とクラウス博士が、決意を秘めた表情で頷うなずく。
「そして、新血種族対策。科学技術の信頼回復。『アーナック・ワン』の最終判断」
　秘書官が『アーナック・ワン』と表紙に書かれた極秘資料を出席者に配る。
　首相は覚悟を決めた顔つきで、非情な口調で語る。
「宇宙計画という『予算を食う巨象ホワイト・エレフアント』、傷口から血税を垂れ流し続けるならば……延命措置ではなく、いっそ殺すことも考慮しなければならない」

第二章　『アーナック・ワン』

青の瞳　Ｂｌｕｅ　ｅｙｅｓ

突如『プロジェクト・ヘルメス』の予定変更が各所に通達された。

軌道飛行について、当初はマネキンとチンパンジーの打ち上げ実験を経て、本番の有人飛行に移る予定だったが、『実験を飛ばし、次回が有人軌道飛行』とされた。

背水の陣を敷いた計画に、研究所内は大わらわだ。

そんな緊急事態のなか、バートはカイエとともに、本棟の会議室に呼び出されていた。

緊張した面持ちのふたりの前には、研究所の所長、デイモン部門長、広報室長。そして、バートの知らないグラマラスな女性がいる。プラチナブロンドの豊かなロングヘアをなびかせ、都会的にスーツを着こなす彼女は、『変人の天国ナード・ヘヴン』には居ないタイプの華やかな人種だ。

事情が分からず困惑するバートとカイエに、疲労が顔に滲にじんでいる所長が呼び出した理由を伝える。

「率直に言う。君たちには、政府が策定した新規プロジェクト『アーナック・ワン』に、ＡＮＳＡの職員として参加してもらいたい」

アーナック・ワン？　それが『重要なプロジェクト』だろうかと、バートの緊張は極限まで高まる。

所長に挨あい拶さつを促された女性が、バートとカイエの前に歩み出る。

「初めまして。ＡＮＳＡ本部、広報室所属。ジェニファー・セラーズよ」

いかにも自分に自信があるといった雰囲気の彼女は、ニッコリと笑み

を浮かべて、バートに握手を求める。差し出された手を握にぎると、ギュッと強く握り返された。彼女の手のひらは、柔らかさはなく、硬い。

　次いで、彼女はカイエにも握手を求めるが、笑顔はなく、軽く触れた程度で手を引っ込めた。カイエのことを──もしくは新血種族全体をあまりよく思っていないと、暗に伝えたいかのようだ。カイエはとくに嫌な顔をせず、いつもと変わらない穏やかな微ほほ笑えみを浮かべている。そういう態度を取られ慣れているのだろうとバートは察する。

　しかし、なぜ広報部員がいるのか。そうバートが疑問に思っていると、ジェニファーがアーナック・ワンの資料を提示した。そこには『民族融和＆科学技術大国推進』と書かれている。

「いい？　アーナック・ワンの目的はふたつ。まず、世界と国民に向けた、民族問題絡みのイメージ向上。新血種族が研究所に在籍している事実は知られていないから、人間と手を取り合って開発しているというアピールをする」

　バートは心の整理がつかないまま、嫌な予感に襲われながら、ただ頷うなずく。

「次に、科学技術大国として、世界最高峰のコンピューター『ＡＣＥ』を強く押し出す。打ち上げ競争に負けたせいで『科学力も劣る』と悪評が立っているけど、それは違う。宇宙開発に関する機密保持は当然あるけど、共和国のように秘密主義ではないから、ある程度の内情を開示しても問題ないわ」

　カイエは唇を引き締め、こくりと頷うなずく。

　ジェニファーは肩に掛かった髪をサッと払うと、少し間を開けて言う。

「それで言葉は悪いけど、あなたたちは広告塔として、人間代表にバート君、新血種族代表にカイエさんが指名されたの」

「え……!?」
　人間代表？　バートは耳を疑った。カイエも呆あつ気けにとられている。
「バート君は国民的英雄であるアーロン飛行士の弟。そしてカイエさんはコンピューターを使いこなし、弾道飛行の計算をした実績がある。うってつけでしょう」
　ここでも弟か、と自尊心をハンマーで殴なぐられる。が、それ以上に、責任重大な役目を言い渡されて頭がいっぱいになる。名もなき星ほし屑くずである自分がスポットライトを浴びるなんて。
　戸惑うバートを横目に、ジェニファーは意気揚々と説明を続ける。
「宇宙飛行士が命知らずの勇者ならば、あなたたちは魔法の機械を使う賢者よ」
　誤解だ。バートは慌あわてて訂正する。
「あ、あの。僕は、まだ全然使えないんですけど……」
「大丈夫。国民に直接作業を見せるわけじゃないし。それに、細かいメディア対応は私が担当するから」
　有無を言わせずという感じのジェニファー。
　所長が口を挟はさむ。
「君たちは、我が国の宇宙計画を代表する存在となる。公人である自覚を持ち、愛想良く振る舞い、勇敢な姿を見せてほしい。また、君たちは共和国の宣伝塔であるレフとイリナの対抗馬という扱いにもなる。彼らがこの国に来たときには会ってもらう」
　誇りに思って欲しいという顔つきの所長。事実、大変な名誉だ。
　しかし、むしろバートは大変なことに巻き込まれているという実感が湧わいてきて、腕組みしているデイモン部門長に視線を投げ、助けを求める。するとデイモン部門長は険しい表情のまま、首を横に二度三度振る。私の知ったことではない、と。その反応を見て、「新血種族とコン

ピューターに慣れておけ」と言われた意味がようやく分かった。
「ねえ、カイエさん」
　黙り込んでいるカイエに、ジェニファーが呼びかける。
「この広報プロジェクトは、人間の意見だけで決めたわけじゃない。『全国新血同盟』の代表者とも意見を交換しているのよ」
「たとえば、どんなことをするんですか？」
　冷静なカイエの問いかけに対して、ジェニファーもまた、冷静に返す。
「多岐にわたるわ。各種取材や写真撮影。宇宙飛行士とともにイベントに参加。握手会。それから、ＦＯＲＸフオークスの紹介とかね。ＡＣＥ社も協力を表明してくれている」
　恰かつ幅ぷくのいい広報室長が、バートとカイエに強く訴える。
「この国の宇宙開発は、知ってのとおり、税金で成り立っている。国民の支持が得られなければ、政府は宇宙開発にかける予算を削減し『変人の天国ナード・ヘヴン』は地じ獄ごくになるだろう」
　バートもそれは理解しているが、心も頭も混乱の極みで、背中に嫌な汗が噴き出る。
　そしてジェニファーは、バートとカイエが引き受けるものと決めつけた態度で続ける。
「広告塔といっても、毎日出ずっぱりなわけじゃない。平日は研究所の通常業務。休日に広報活動。二個の帽子を被かぶることになるけど、休日手当は出るし、契約金も小遣いには十分すぎるほど支払われる。条件は悪くないでしょう。質問は？」
　カイエが問う。
「新血種族から選ばれるのは、私だけなんでしょうか。宇宙飛行士候補はいないんですか？」
「一名いるわ。政府が空軍に圧力をかけて、最優秀者を無理やり選出し

た」
「無理やり？　それは、新血種族など選ばないということですか？」
　いつもは穏やかなカイエの声に、鋭するどさが混じる。あらぬ誤解を生んだと気づいたらしいジェニファーは苦笑する。
「違うわよ。元々数の少ない新血種族の隊員に、宇宙飛行士になれるほどの資質を有した者がいなかっただけ。この国の宇宙飛行士になるには、二四機種以上の戦闘機への試乗経験や、大学院レベルの科学知識が必要だけど、彼は基準にまったく届いていない。とりあえず訓練生として学ぶようだけど……どうなるかしらね」
「……成功を祈ります」
　カイエは胸もとに手を当て、心から祈るように言った。
　すると急せかすように所長が契約書をトントンと指で叩たたき、サインを求める。
「急な指名で思うところはあるだろうが、宇宙開発継続のため、引き受けてもらいたい」
　カイエは即座に返答する。
「はい、光栄です」
　ペンを取り、すらすらと署名するカイエ。対照的に硬直するバート。
　この重大な契約を、なぜそんな即決即断できるのか。
　カイエがバートの目の前にペンを置く。
　所長がずいっと契約書をバートの前に滑らせ、圧をかけてくる。
「バート君。いいね？」
「あ、いや、その……」
　契約書から目を逸そらし、うつむく。妄想の中で、レフと握手したことはある。だが、まさか本物の表舞台に立つなど、頭の片隅にもなかった。
　想像するだけで身震いする。

なぜ、自分が。

全国に数十万人も職員がいるのに、新人で実績もない自分が、英雄の弟というだけで選ばれるなんて。

無茶だ。

うつむいたまま固まっていると、ジェニファーが肩をすくめて溜め息いきを吐ついた。会議室内が、彼で大丈夫なんだろうか……という重い空気に満ちていくのをバートは肌で感じる。隣にいるカイエの、真まっ直すぐな視線が頬ほおに刺さる。自分の相手役となる人間の資質を測るように、彼女はじっと見詰めている。

差し出された契約書にバートは目を向ける。

断るのか？　そもそも、断っていいのか？

「……」

辞退すれば、皆に失望される。兄からは呆あきれられ、父や祖父からはファイフィールド一族の恥だと見放される。研究所でも肩身の狭い思いをするだろう。Dルームから席がなくなり、そのまま解雇だってありえる。研究所から追い出されるということは、宇宙開発の中心に携たずさわるという夢を諦あきらめることだ。

それだけは、嫌だ。

自分には、宇宙への夢以外に何もないのだから。

せっかく辿たどり着いた夢への扉を、自ら閉ざすなんて、そんな馬鹿なことはない。

アーロンの弟という理由だろうが、しがみつくしかないのだ。

バートは心を奮い立たせ、腿ももを痛くなるほどに握にぎり締める。

「やります……」

弱々しく宣誓すると、ペンを取り、署名する。カイエの美しい署名に比べると、バートの線はグニャグニャに乱れ、怯おびえた心情を表しているかのようだ。

ふたりの契約書が出そろうと、所長が「最後に」と伝える。
「国民の支持を受けるか否いなかは、君たちにかかっている。ないとは思うが、くれぐれも、妙なスキャンダルを起こさぬように」
所長と広報室長は忙しそうに退室した。
すると、ずっと眉み間けんにシワを寄せていたデイモン部門長が腕組みを解く。
「バート、カイエ。君たちの本業は、あくまでもDルームの仕事だ。『プロジェクト・ヘルメス』に支障が出ない程度に、広報活動に精を出してくれ。有人軌道飛行も、重要なプロジェクトだからな」
デイモン部門長は棘とげのある言い方をしてジェニファーを見やると、会議室を出て行った。
ジェニファーは肩をすくめて両手を広げる。
「部門長って面倒くさそうな人。ねえ、バート君？」
困ったバートは咳せき払ばらいをして「え、そんなこと……」と投げられたボールを避ける。
「まあいいや。お偉い部門長様だもんね。あ、今『バート君』とか言っちゃったけど、もうチームメンバーだから『君』と『さん』付けはやめる。私のこともジェニファーでいいわよ」
さばさばしているジェニファーは、冊子を二冊ずつ、バートとカイエに差し出す。タイトルは『マスコミ対応マニュアル』『広報活動マニュアル』。
「宇宙飛行士用に作られたものだけど、読んでおいて」
薄っぺらいピザほどの厚さの冊子が、バートには鉄板のように重い。ＦＯＲＸフオークスを習得する合間に、広報についても学ぶなど、自分の手に負えるのだろうか。
「私、朝から晩までお世話するわけじゃないからね。自己責任ね。ところで、ふたりは水着持ってる？」

　唐突な質問に虚を衝つかれる。
「ありますけど……」
　カイエも困惑を浮かべる。
「飛行士がやるような水中トレーニングをするんですか？」
「ううん。雑誌用のピンナップ撮影」
「……えっ？」
「『七人の飛行士ヘルメスセブン』が水着姿で海のバカンスをしている写真、知らない？　あれ、人気なのよ。だから近いうちに、あなたたちも撮ることになったの。あ！　最初に言っとくけど、私は担当者として派遣されてるだけで、各種決定はＡＮＳＡ本部の上司がしてるから。文句を言っても無駄だからね？」
　決定事項として告つげられ「ハイ」としか言えない流れだ。カイエは目を伏せ、上腕を触って一瞬気にするが、こくりと頷うなずき、納得する。恥ずかしいというより、心配というような表情だった。
「あら？　カイエは身体からだに自信がないの？」
「んぐっ」
　ジェニファーがめざとく追及すると、カイエは喉のどを鳴らして息を呑のむ。
「大丈夫よ、あなたはグラビアモデルじゃないんだから」
　私は自信あるけど──とダイナマイトバディを突き出すジェニファー。
「あ、大丈夫、です……やります……」
　しずしずと縮ちぢこまるカイエ。
「オッケー。じゃ、今後の予定については、また連絡するわね。とりあえず、今週末は空けといて。じゃ、バイバイ」
　と、ジェニファーは去りかけて、くるりと振り向く。
「あーそうそう。ふたりは、かしこまった感じじゃなくて、フランクに交流してね。民族融和の象徴なんだから。ハイ、さっそく任務開始」

　パチンと手を叩たたいてジェニファーは去り、バートとカイエのふたりが会議室に取り残された。
「はぁ……カイエさん……いきなり、まいりましたね……？」
　同意を求めたのだが、カイエは満面の笑みを投げ返す。
「水着はびっくりしたけど……でも、頑張りましょ……ううん、張り切っていこうね、バート！」
　両手で「よしっ」と可か愛わいくガッツポーズして、さっそくフランクな感じを実行している。しかも、カイエはまるで選ばれたことが嬉しいようだ。
　いや、代表に選ばれるのは、ふつうなら嬉しいのかもしれない。
　だがバートは不安しかなく、決断をさっそく後悔している。
「ねえ、バート。Ｄルームに戻る前にラウンジに寄って、冊子を読み合わせていかない？」
「あ、いいですよ」
　カイエは不満そうに唇を突き出した。
「違うよ。そこは『オッケー』だよ？　あと『さん』付けもなしね？」
　フランクに対する指導が入った。バートはむず痒がゆさを堪こらえながら、声に出す。
「オッケー、カイエ……」
　カイエは口に手を当て、ふふっと照れる。
「くすぐったいけど、慣れていこうね」
　パートナーが彼女で良かったとバートは感じる。もしミアだったら殺さつ伐ばつとしていただろう。

　バートとカイエは会議室を出て、いつもの業務をこなすためにＤルームに向かう。職員たちが忙しそうに廊下を走り回っているが、ふたりがとおりかかると、誰もが訝いぶかしげな目で見てくる。人間の男と新血

種族の女が並んで歩くのは、まだ『アーナック・ワン』を知らない職員たちからすれば、とても奇妙なものだろう。
　本棟の玄関ドアを抜けて、外に出る。いつもより慌あわただしく車両が行き来しているが、太陽が燃え盛っているせいもあり、出歩いている人間は少ない。
　どちらから言うでもなく日陰を選んで歩いていると、しばらく口を閉ざしていたカイエが、「あのね……」とやや言いにくそうに声をかけてくる。
「はい？」
「パートナーになったあなたに、あらためて話しておきたいことがあるの。室員のみんなには伝えてる、私の特殊な力について」
　まさか吸血鬼症候群？　と、少し身構えると、カイエはどこか照れ臭そうに言う。
「私、記憶力がいいんだけど……それは『映像記憶』っていう能力があるからなの」
「映像記憶……？」
　初めて聞く言葉だった。
「どういうもの？」
「眼に映ったものを、そのままの映像として、脳に記録できるの」
　カイエは目を閉じて、こめかみに指先をあてる。
「こうすると、瞼まぶたの裏に鮮明に浮かんでくる。書類でも、風景でも、写真みたいに鮮明に」
　それを聞いて、バートには思い当たる節ふしがあった。
「なるほど。僕が初めてDルームに行ったとき、君がペンを見つけた姿に違和感があったんだけど、その理由が分かったよ」
「えっ？」
　びっくりしたように、カイエは口を手で塞ふさぐ。

「私、何か言った？」
「ふつうなら『どこどこにあると思う』って言うところ、『棚に入れてる』って、おかしな断定してたから」
　得心が行ったように、カイエはうんうんと頷うなずく。
「確かに、そう言ってたかもしれない……」
「たとえば、今見てる風景も記憶しちゃうの？」
　バートが工場棟を指して問うと、カイエは首を横に振る。
「ううん、意識して網膜に焼き付けないと無理。ペンは『片づけた場所、絶対に忘れるぞ』って思ったから覚えちゃった。例外として、衝撃を受けると勝手に脳に刻まれちゃうけど……」
　カイエは口ごもり、暗い顔になる。意図せず覚えてしまうのは悪いことが多いのだろうとバートは感じたので、これ以上深掘りはしない。
　Ｄルームに向かって歩きながら、映像記憶能力について聞く。
　高校程度の教科書ならば一冊二〇分くらい眺めれば覚えられる。高度な科学書や工学書も、三回で記憶できる。ＦＯＲＸフオークスを短期間で習得できたのも、この力が大きい。
　万能のようだが、さりとて、記憶するのと使用するのは全然違うので、たとえばピアノの譜面を暗記しても弾けないのだとカイエは言った。
「でも、理工学系の難解な本は、仕事に使えるんですよね？　あっ、使えるんだよね？」
　油断すると敬語が出るので言い直す。それがおかしかったのか、カイエはふふっと白い歯を見せて答える。
「使えるというか……覚えたものが、脳内で自動的に融合して、処理されてるのかな。自分の頭の中で何が起きているのか分からないんだけど……数学の問題とかでも、公式を使って計算する前に、瞬間的に答えがバンッて出てくるの。公式を知らなくても、答えが分かる……」

　いつも苦労して計算しているバートからすれば、夢みたいな話だ。しかし、能力の分からなさも相まって、彼女自身が最新型コンピューターのようにも思えてくる。
「どうやって身につけたの？　訓練とか……？」
　カイエは人差し指を立てて左右に振り、否定する。
「先天的なもの、なんだと思う。物心ついたときには、いつの間にかいろいろ覚えてた。家にあった本を片っ端から読んだりして……あっ」
　カイエはハッと気づいたように目を大きく開く。
「この能力があるのは、私だけじゃないよ。人間にもたくさんいるから。例えば―」
　そう言って、電流に関する発明をした科学者や、悪魔と呼ばれた数学者、万能人の異名を持つ芸術家の名を挙げた。その者たちはバートも知っている著名な人物ばかりだった。
「誤解しないでね。分かりやすいから有名人を挙げただけで、彼らと私がいっしょなんて、そんな身の程知らずじゃないから。私が一番得したのは……トランプで負けないことかな」
「トランプ……？」
　カイエはニーッと目を細める。
「神経衰弱メランコリーやポーカーは、絶対負けないよ」
　違法の賭と場ばで、銀髪の乙女が荒くれ者たちから金を巻き上げる姿を想像する。
　―まあ、はぐらかしで、それが一番得したなんてことはないだろうが。
「じゃあ、損したことは？」
「脳内で処理してると、そっちに全部持ってかれちゃって、ほかが処理落ちしちゃうこと」
「ああ。階段から落ちてきたのは、映像記憶のせいだったんだ」

「……え？」
　カイエが眉まゆをひそめる。
「だから、カイエが階段から落ちたのは……」
「え？　え？」
　カイエがずいと顔を寄せ、上目遣いに睨にらんできた。
「忘れてくださいと、言いませんでした？」
　わざとらしく敬語ですごまれ、失言だったと気づいた。
「忘れた。忘れました。僕、記憶能力ないから」
「うん、忘れましょうね」
　冷たくにっこりするカイエ。
　とはいえ、天から飛びかかられた恐怖と、密着したときの香りや感触は忘れられないが。
　そのあと、しばらく会話もないまま日陰を歩きながら、バートは彼女との会話を反はん芻すうする。彼女の能力がどれほどのものか不明だが、少なくとも自分には、彼女のような特殊な才能はない。無数にある星ほし屑くずのひとつでしかなく、『宇宙飛行士の弟』というラベルを剥はがせば、いくらでも代替が利く部品だ。
　とにかく人間代表として、恥をかかないようにしなければ。
　そして兄の名に傷を付けないようにしなければ。
　そう感じたとたん、責任がのしかかってきて、胃がキリキリした。
「カイエ。ラウンジの前に……トイレ寄っていい……？」
「お腹なか、弱いの？」
　君の心が強すぎるんだっ……！
　バートは心の中でつぶやいた。

　Ｄルームに戻ると、カイエは『アーナック・ワン』について室員たち

に説明した。
　室員たちは広告塔という扱いを怪しみ、カイエが「ねえ、バート？」と親しげに呼びかける関係を訝いぶかしがる。バートが「そ、そうだね、カイエ」と返すと、皆からギロリと睨にらまれた。
　だが、カイエが広報の意義を懇切丁寧に伝え、「みんなに迷惑かけることはないと思うし、いつもどおりに業務をこなしてくれれば大丈夫」と説得すると、室員たちは首を傾かしげつつも、納得した様子で仕事に戻る。
　広報活動が始まる一方で、宇宙開発の本筋である『プロジェクト・ヘルメス』は成功に向けて猛然と走り出しており、室員たちが手を休める暇ひまなどなかった。
　約一か月後の九月半ばに予定されているスティーヴ飛行士の軌道飛行は、もともとはマネキンの計画だったために多くの仕様変更があり、各所からＤルームに届けられる依頼は激増している。バートはＤルームが研究開発の重要な部分を担っているのだと思い知らされた。
　だが、人間のＤルームに対する接し方はまったく酷ひどいものだ。新血種族がコンピューターを使うことが気に入らない人間は、依頼に来たときも偉そうに振る舞って頭を下げない。
「感じ悪いなぁ……」
　バートがポツリとこぼすと、ミアが温度のない声で言う。
「人間にとって、ワタシたちは機械と同じ。数式を吸い込んで、計算して吐き出す。そういう存在」
　まるで「鶏は卵を産む存在」「牛は乳を出す存在」みたいな言い草だが、ミアからは怒りや哀かなしみの感情はとくに読み取れない。近くで話を聞いていたカイエが愁いを帯おびた溜ため息いきを吐ついたような気がしたが、バートと目が合うと、いつもどおりの微笑を浮かべる。
「役目が増えて大変だけど、お手伝いよろしくね」

「ああ、もちろん」
　予想もしなかった『人間代表』。いまだに心はざわついているが、週末以外はＤルームの業務をしっかりこなさねばデイモン部門長に叱しかられてしまう。
「よし、やるぞ……！」
　苦いコーヒーをグイッと飲んで気合いを入れる。
　ＡＣＥの教本を読み終えたバートはプログラムを作る業務に入る。少しでも数値が間違っていたら大事故に繋つながりかねないので、細心の注意が必要だ。
　しかし。
　依頼書には計算式ばかりがずらずらと並び、弾はじき出される数値が何の役に立つのか、いまいち分からない。もし、依頼書に宇宙とまったく関係ない計算が混じっていても──たとえば核兵器の製造や、はたまた科学的な合成食品など──気づかずに作業させられてしまうだろう。
　誰かと協力しながら仕事するよりも、個人で黙々と作業する方が好きなのでプログラム作りは嫌いではないが、せめて宇宙を感じられたらと思う。
「ふぅ……」
　バートが溜ため息いきを吐つくと、隣席のミアがジローッと睨ねめつけてくる。
「つまらない？　うんざりしてる？」
「……おもしろいものではないですね……」
　正直に答えると、ミアは依頼書の計算を指す。
「数式に宇宙を見たら？」
「ん？」
「宇宙は数字で表現できる。計算式から遙はるかな天体を想像する。これは、月の引力かもしれない。これは木星に到達できるロケットエンジ

ンかもしれない。全然違うかもしれないけど、想像するのは自由」
「へえ……」
　そう言われると、無機質だった数式のひとつひとつに命が吹き込まれ、意味が生まれたように思える。感心してミアに目を向けると、ミアは首を横に振る。
「ワタシの考えじゃないよ。ワタシは宇宙を想像しない」
「あ、そうなんだ……誰のですか？」
「カイエさん。よく無意識に数式をつぶやいてるけど、たまに『彗すい星せい……』とか『銀河……』とか混じってる」
　テーブルで作業しているカイエは、背中を深く丸めて、まるで計算書と会話するような姿勢を取っている。映像記憶で刻まれた科学や天文学が脳内で融合し、彼女の頭には無限の宇宙が広がっているのかもしれない。
「ちなみにミアさんは、何を想像してプログラムを作ってるんですか？」
　何気なくバートが問うと、ミアはハバネロソースを振りかけてきそうな目つきになる。
「……」
「すみません、なんでもないです……」
　すごすごと作業に戻るバート。気をつけよう。カイエに話しかけるのと同じ調子でほかの室員と接すると大怪け我がしかねない。
　バートは再び用紙に向き合うと、カイエの考えを真ま似ねて、数式に宇宙を見る。
　このプログラムは何に使われるのだろうか、月へと飛んでいくロケットだろうかと夢想しながら、用紙に鉛えん筆ぴつを走らせる。
　未知の宇宙を数字で表現できるのは、とても不思議だ。
　広告塔の重圧で潰つぶれていた心が、少しだけ解放された気がした。

朱の瞳　Ｖｅｒｍｉｌｉｏｎ　ｅｙｅｓ

昼間の長い南部の夏も、午後七時を過ぎれば太陽は沈み始め、空に浮かんだ怪物のような積乱雲は夕陽に染まる。

カイエが広報担当となり、初の週末を迎える金曜日の夜。

研究所からバスで帰宅するカイエは、ミジービ川に架かる橋を渡ってすぐの停留所で降車する。月げつ影えい区くにある数少ないバス停のひとつで、ここがバスで帰れる限界地点だった。月影区の道は未舗装で大雨が降るとすぐに泥のシチューになり、バスはタイヤが泥に埋まって動けなくなるため、奥まで行ってくれないのだ。

バスの運転手は感じの悪い人間で、カイエが乗降口を降りる途中で追い落とすようにドアを閉めた。考えごとに夢中になるあまり、乗り過ごしかけたカイエも悪いのだが。

軌道飛行に加えて広報役の件もあり、脳内の交通整理が難しい。今週の頭まではミアたち数名といっしょに帰っており、ぼんやりしていても降車を忘れることはなかったが、近頃は広告塔の件で残業があるのでカイエひとりだ。

「いけない。ちゃんとしなきゃ……」

つい先日、研究所の階段から転落して、バートを押し潰したときの映像が鮮明に蘇よみがえる。

「あぁ、最悪、最悪っ……！」

恥ずかしくて身み悶もだえる。忘れたくても、脳に刻み込まれてしまった。バートが善い人間だったから助かったが、相手次第では治療費を請求されていただろう。

Ｄルームに来た人間が彼でよかったと、カイエは心から思っている。

室員に対して嫌がらせをしないし、偉そうにもしない。コンピューターにも真ま面じ目めに取り組んでくれる。

しかし、広告塔のパートナーとしては少々頼りなかった。

明日の土曜は『アーナック・ワン』初のイベントがある。『七人の飛行士ヘルメスセブン』の壮行会に参加して、カイエとバートも各々一分程度の挨あい拶さつをするのだ。会場は、湾岸地区にある『ロケット発射センター』。イベントについての詳細をジェニファーから説明されたが、バートは顔面蒼そう白はくで、また腹痛を訴えていた。それから、例の水着写真撮影はイベント後にやると言われた。

Dルームの面々は基本的には応援してくれていたし「カイエさんなら私たちの代表としてふさわしい」と信頼してくれていたが、パートナーのバートについては一様に「大丈夫？　足引っ張られない？」と心配し、そしてバート自身も「本当に僕で大丈夫かな……」と不安を前面に出している。もちろん、カイエも緊張しているのだが──。

「やるしかないしね……！」

覚悟は決めた。とにかく、家に帰ったら挨あい拶さつの練習をしよう。

カイエの家は停留所からずっと南に下った湿地帯の近くにあり、徒歩で三〇分かかる。暑くてつらいが、もう慣れていた。

水飲み場で生温かい水道水をごくごくと飲み、赤茶けた砂埃ぼこりの舞う雑草だらけの道をてくてくと歩き出す。

月げつ影えい区くは最先端のコンピューターとは遠くかけ離れた、戦前の世界だ。

ペンキの剥はがれた柵さくの奥、掘っ立て小屋のような家々が無秩序に建ち、ツタに覆おおわれた長屋は窓ガラスの割れた部分を新聞紙で覆っている。大きなハリケーンが来れば、多くは破壊されてしまうだろう。

道から外れた草むらには、獰どう猛もうなファイヤーアントの蟻あり塚に並んで、貧困移民や不法滞在者の暮らすトレーラーハウスが列をなしている。

電球の切れた街灯は放置されており、薄暗い路地裏では、目つきの悪い者たちが密造酒ムーンシヤインをラッパ飲みしながら賭かけをしている。そこには年端もいかぬ娼しよう婦ふも混じっている。

連合王国の底辺そのものである彼らに、カイエは憐あわれみや憎しみとすら言える感情を胸に抱きながら、足早にとおり過ぎる。

月影区の中心といえる『市民戦争記念広場』。騎馬像が立っている公園があり、周囲には活気溢あふれる商店街がある。

スーパーマーケット、飲食店、理髪店に酒場、葬儀屋。電器屋には、街で唯一のテレビがあり、街頭テレビの役割を果たしている。設備の整った病院はないが、産院を兼かねた診療所はある。月信仰の教会は心のケアをし、集会所としても使われる。どれも人間居住区のものに比べれば簡易で質素だが、経営者が新血種族や移民で、拡充する資金がないのだから当然だ。

人間居住区との大きな違いは、州警察の交番がないこと。そのため、警察風の帽子を被かぶった自警団が旧式のライフル銃を手に見回りをする。夜に活動する [ソーラーフレア・クラブ] を威い嚇かくするため、彼らは夜空に向けて発砲する。

カイエが商店街に入ると、街頭テレビで新血種族のボクシング選手を応援していた子どもたちが、弾はじけんばかりの笑顔で駆け寄ってくる。

「カイエ！　おかえり！」

「ただいま」

カイエは袋から丸いブリキ缶を取り出して、子どもたちに渡す。帰り

がけにＡＮＳＡの売店で買ってきたバタークッキーだ。
「ケンカしないように分けてね」
「ありがとう！」
　子どもたちがカイエに抱きつく。その腕や足は汚れ、痩やせ細っていた。

　夜になると、商店街には仕事を終えた者たちがぞろぞろと集まってくる。この街に住む男性の主な職業は港湾や製材所などでの肉体労働。女性は海産物工場の下処理や、人間居住区の清掃員や給仕をしていた。
　毎日、カイエはスーパーマーケットに寄る。人間居住区の店に比べると商品は少ないが、調味料や辛子類、自家製ケチャップを作るためのトマトは豊富に置かれている。
　カイエはいつも出来合いの食品を買うが、そのわけは、料理の腕が破滅的だからだ。包丁で指を切るのは当たり前、野菜の皮を剥むくと、なぜか可食部分がなくなる。ぼんやりして鍋を焦がし、身の危険を何度か感じるほどだ。
　瓶びん詰めのコーンと、タマネギ、ピーマン、セロリの炒め物、ナマズの揚げ物を手に、カイエはレジへ行く。
　レジの横の壁には、カイエが登壇するイベントのポスターが貼ってあり、少し恥ずかしい。ポスターの主役は『七人の飛行士ヘルメスセブン』で、下にバートとカイエの顔写真が並んでいるのだが、カイエの顔が花丸で囲んであり、この街の主役は彼女だとはっきり分かる。
　白髪の老店主が会計をしながら、カイエに声をかける。
「こんぴゅーた……全然知らないが、カイエちゃんはスゴイなァ」
　ニコニコする老店主の歯はボロボロで、牙きばは抜け落ちている。赤せき眼がんも、垂れ下がったまぶたに隠れて、尖せん耳じ以外は人間の老人のようだ。

「昔はうちの計算機だったのに、今や国家の計算機だもんな」
　カイエは幼い頃、老店主といっしょにレジに立ち、老店主が読み上げる金額を瞬時に計算していた。お駄賃代わりに「家までのエネルギーだ」と老店主からストロベリーキャンディを貰もらい、舐なめながら家までの暑い道を元気に乗り切った。今でも舐めれば当時の記憶が甘い匂においに乗って蘇よみがえる。
　客たちが、カイエの周りに集まってくる。
「カイエちゃん。ようやく実績を認めてもらえたんだな」
「前から宇宙飛行に関わっていたのにね」
　アーロンの弾道飛行にカイエは深く携たずさわっていたが、テレビに出るのはアーロン飛行士やクラウス博士ばかりで、たとえＡＣＥ社のコンピューターが紹介されたとしても、カイエの名はどこにも出なかった。それが街の皆は不満だった。
　しかしカイエは苦笑して謙けん遜そんする。
「私がコンピューターを作ったわけじゃないし、ＡＮＳＡの職員はたくさんいるから」
　老店主はポスターを見て顔をしかめる。
「カイエちゃんは応援してるけど、宇宙開発はね……。イベントのポスター貼ってるけどさ、気乗りしないよ」
　周りにいた客の女たちも頷うなずき、口々に不満を言う。
「月へ人間を送る金があれば、貧しい新血種族の子どもを全員無料で学校に送れるよ」
「衛生設備や道の舗装もね」
「吸血鬼症候群の研究だって」
「政府は、天上より地上を見てほしいよ」
「たいして税金を納めてない私らなんて、目に入ってないんだ」
　住民たちは、ＡＮＳＡに勤つとめるカイエ個人は誇りに思っている

が、宇宙計画には不満しかない。カイエは気まずくて、苦笑いで頷くだけだ。彼女たちの意見はもっともで、何も言えない。

そのとき、ゴロゴロと空が鳴ったかと思うと、激しい落雷の音がドアのガラスを揺らした。

「！」

客の女たちは口をつぐみ、鬱うつ憤ぷんや愚ぐ痴ちは雷に吹き飛ばされる。

好機だと、カイエは「雨が降る前に帰りますっ！」と足早に店を出ようとする。

「カイエちゃーん、忘れ物！」

呼び止められて、買ったものをレジに忘れていたと気づく。

「あっ！　すみません……」

老店主や客たちが笑う。

「大人になっても、そういうヌケたところ変わんないねぇ」

カイエは頭を掻かきながら誤ご魔ま化かす。恥ずかしさで頬ほおが熱くなる。

「あははっ……」

カイエは小学校までこの街で育ったが、中学以降、北部の学生寮でひとり暮らしをしていた。民族分離により、南部では新血種族が高度な教育を受けられる学校がなかったのだ。

カイエの家は貧しくて教育資金はなかったが、神童と呼ばれたカイエの可能性を潰つぶしてはいけないと教師が街の皆に訴えかけ、皆が少額ずつだが出し合ってくれた。老店主も協力者のひとりだった。

貧しい街から大学に行って、さらにコンピューターまで使えるようになれたのは、援助してくれた住民がいたから。もし周りに理解者がいなければ、問題がある厄介な少女として扱われ一生を終えていたとカイエは思っている。

そして大人になったカイエはケイリー研究所での勤務が決まり、実家へ戻ってきた。今の自分があるのは街の皆のお陰だと深く感謝していて、できるかぎり恩返しをしたい。子どもにお菓子をあげるのも、そういう気持ちからだった。

「じゃあ、今度こそ、帰ります……」

商品を受け取って店を出ようとするカイエに、老店主が心配そうに声をかける。

「カイエちゃん。仕事に打ち込むのは立派だけど……くれぐれも身体からだには気をつけるんだよ」

「はい！」

元気よく返事をすると、老店主は牙きばのない口をニッと開いた。

太陽は地の果てに落ち、深い夜が訪れる。

沼を覆おおう大きなスイレンの葉を大粒の雨が叩たたく。ヒッコリーの木に絡みついた葛くずのつるから、水が滴したたる。小川では魚やザリガニが蠢うごめき、川から水が溢あふれると、アリゲーターが森に迷い込む。

そんな水辺のほとり。

群生する月下美人に囲まれた庭の奥、レンガを土台にした木造の小さな家にカイエは住んでいる。

ザアザアと浴室の窓を打っていた雨音が次第に小さくなり、カエルの鳴き声がやかましく響く。

「はぁ、ふやける……」

カイエは湯船に浸かりながら、明日の挨あい拶さつを考えていたのだが、気づいたら湯がぬるくなるほど時間が経っていた。

べつに挨拶は気がかりではない。問題は水着だ。いきなり「水着写真を撮る」と指示されたときは頭がクラッとした。

手のひらで腕に湯をかけながら、そっと撫なでる。
「うん……目立ってないよね」
恥ずかしいのは別にして、大丈夫そうだ。
湯船を出て、月下美人で作ったシャンプーで髪を洗う。柔らかく甘い香りに包まれ、癒いやされる心ここ地ちと、忘れられない哀かなしみが入り混じる。
晴れ舞台を見せてあげたかったなと思うと、胸がキュッとなった。
泡を洗い流してカイエが浴室を一歩出ると、居間からラジオの音が聞こえてくる。
「あれ……お父さん？」
帰宅時には不在だった父・ドミニクが港湾の仕事から帰ってきたようだ。
身体を拭ふき、部屋着を身につけ、居間に行く。
やはりドミニクがいた。上半身裸で椅い子すに腰掛け、ナマズの揚げ物をつつきながら、密造酒ムーンシヤインを飲んでいる。かなり飲んだのか、スキンヘッドの頭や、筋肉質の胸板が赤い。
水浸しの作業着が椅い子すの背にかけてあり、ズボンも濡ぬれている。大雨に打たれたのだろう。
風呂を待っていたのかと気づき、カイエは焦って促す。
「長風呂してごめん。どうぞ」
ドミニクは喉のどを鳴らして密造酒ムーンシヤインを飲み干すと、乱暴に作業着を掴つかみ、風呂に向かう。そしてカイエの前で足を止めると、不機嫌そうに言う。
「人間の主催するイベントなど、俺は見に行かないからな」
「分かってるよ……」
カイエは重々承知だと頷うなずく。
ドミニクは浴室へ入ると、後ろ手にドアをバタンと閉めた。

　父に見に来てほしいとはカイエは思わない。寂しさが心をかすめるが、父の気持ちも痛いほどに分かるからだ。
「……さて、私も食べよっ……！　ケチャップ、ケチャップ！」
　自らを元気づけるように、カイエは笑顔を作る。
　私が頑張れば、私たちはきっと幸せになれる。それも、この町だけじゃなくて世界中の皆が。
　だから絶対、闇やみの奥深くに輝き始めた星を、掴み取らなきゃいけない。
　窓の向こうに咲く月下美人の花に、カイエはそう誓った。

第三章　天体観測

青の瞳　Ｂｌｕｅ　ｅｙｅｓ

ついにイベント当日を迎え、バートとカイエは『ロケット発射センター』のある湾岸地区へ、ジェニファーの運転する車で移動していた。ロケット発射センターは騒音や部品落下などの理由により、市の中心部からは遠く離れている。湾岸地区へ繋つながる道には住宅は少なく、採油塔や終戦で不要になった軍事車両の墓場もある。

しばらく車を走らせて湾岸地区へ入ると、あらゆるところに『宇宙への道』と書かれている。今年初頭にチンパンジーのＳＡＭを宇宙へ打ち上げ、アーロンの弾道飛行が成功して以来、ロケット発射センターは『宇宙開発の聖地』となっていた。ホテルのロビーにはロケットの模型が飾られ、土産物屋ではさまざまな記念品を売っている。打ち上げ時にはおおぜいの報道陣や見物客で賑にぎわい、宇宙とは無関係な教会にさえもロケットの絵が飾られている。

車窓を流れる海が太陽に輝くのとは対照的に、バートの心はどんより曇っていた。

早くも胃が痛い。

約一時間のイベントの内容は『七人の飛行士ヘルメスセブン』の激励がメインで、バートとカイエのお披ひ露ろ目めは前座の扱いだが、注目度の大小は関係ない。腹痛もさることながら、緊張のあまり二日前から全然眠れず、目の下のクマがひどい。

ジェニファーはミラー越しに、後部座席のバートを覗のぞき込む。

「あなた、顔色が悪いけど。ピンナップ撮影もあるんだからね？」

「分かってます……」

バートは隣のカイエに目をやる。

カイエは窓から吹き込んでくる潮風を浴びながら、ぼんやりと何かを考えている。緊張しているようには見えない。化粧をしなくても綺き麗れいな顔立ちだが、いつもより華やかで明るい印象を受ける。服装も花柄の赤いドレスで、目を惹ひくものだ。一方バートは、勤務時と同じ、地味なシャツとスラックス。一見、カイエの付き人に見える。

信号で止まったとき、ジェニファーがチラシをバートたちに差し出した。

「これ、会場で配られる、あなたたちのプロフィール」

考えごとをしていたカイエも、チラシを受け取る。

各々の顔写真の下に経歴が載っていて、バートはカイエのプロフィールを確認する。

同じ二四歳で、出身地はこの街。学歴は──

「……は？」

バートは言葉を失った。

超優秀だ。

飛び級で世界有数の名門大学へ入り、計算機科学で学士号を取得。驚きはそれだけでなく、二〇歳にして、国立の天体物理観測所で『月の軌道計算』と『パールスヌイ一号の追跡』に携たずさわっている。

バートも、州ではトップの有名大学を卒業したが、彼女に比べたら泥ナマズだ。映像記憶の能力を聞いたときはただ者ではないと思ったが、まさか、ここまでとは。

衝撃を受けてカイエの顔を呆ぼう然ぜんと眺めていると「なに？」とすました顔で言われた。

「いや……こんな経歴、聞いてなかったから……」

「そうだっけ……？」

カイエは片かた頬ほほに人差し指を当てて、小首を傾かしげる。

「大学に行って、研究所でコンピューターを使ったと言ったはずだけ

ど……」
「それは正しいけど、これは予想外すぎるって！　しかも天体物理観測所！　レポート夢中で読んだし！　早く言ってくれれば良かったのに……！」
　宇宙に関することだと興奮するバートが早口でまくし立てると、カイエは軽く溜め息いきを吐つく。
「だって、言うと、嫉ねたむ人間もいるから」
　言われて、ハッとした。確かに、この華麗なる経歴を自分から明かすのは、自慢に受け取られかねない。研究についてもっと訊ききたいとは思うが、彼女があまり気乗りしないようなので、話したい気持ちを抑えこんだ。
「―私は、べつに嫉ねたまないけど」
　ジェニファーが運転しながら口を挟はさんできた。どうやら妙なライバル心があるらしい。
「っていうか経歴見て知ったんだけど、私、カイエと大学同じ。先輩だった」
「そうなんですか!?」
　カイエも知らなかったようだ。
「私は社会政治学だから、専攻は違うけどね」
　そこまで言って、ジェニファーは声を真剣な調子に変える。
「……ねえ、共和国の秘書官に、リュドミラ・ハルロヴァって女がいるでしょ？」
　ゲルギエフの横に立つ、綺き麗れいだが冷たい顔をした女性だ。テレビや新聞で何度か見ている。
「あの人がどうかしましたか？」
「すっごく似てる人が、大学の同級生だったのよ。しかも留学生」
「え？　本人ですか？」

　ジェニファーは半信半疑という感じで。
「さあ？　名前は違うし、出身国も違ったんだよね。もっとも、スパイなら正体は隠すだろうし、あの国のことだから、人を殺して戸籍を奪ったのかもしれない」
　物騒なことをサラッと言うが、あり得るのが恐ろしい。そして、ジェニファーはこれまでで一番重い調子で言う。
「以前渡した広報マニュアルにも書いてあるけど、有名になれば、いろんな輩やからが近づいてくる。隙すきを見せないようにね。とくにバート……」
　ごくりとバートは唾つばを呑のむ。
「あなた、女性に弱そうだから、ハニートラップに引っかかりそう」
「引っかかりません！」
　すると、カイエがじーっと見つめてくる。
「な、なに？」
　宝石のように綺麗な朱しゆ色の瞳ひとみにドギマギすると、カイエがボソッとつぶやく。
「引っかかりそう……」
「カ、カイエまで……！　引っかからないって……たぶん……」
　いや、しかし、冗談ではなく気を引き締めねば。どこに何が潜ひそんでいるか分からない情勢だ。実際、核兵器の研究所にスパイがいて、関与した者が逮捕され、死刑にもなっていた。
「ほら、もうすぐ着くわよ」
　ジェニファーに言われて窓の外に目をやると、ミサイルを追跡するためのアンテナ群が立ち並んでいる。
　聖地だ。
　バートが何度も夢見た憧あこがれの場所だが──広報役でここへ到達するなど、夢にも思わなかった。

会場内の控ひかえ室に案内されたバートは極度の緊張状態にいる。昼食が用意されているが、まったく喉のどをとおらない。挨あい拶さつ文のメモをひたすら読み返す。

イベントの進行表を見ると、こともあろうに、バートが挨拶の一番手だった。しかも司会役はアーロン。兄弟で舞台に立つという盛り上がりを狙ねらったのだろうが、ありがた迷惑だ。

挨拶を脳内でシミュレーションしたが、それだけで身も心も震え、心拍数が急上昇する。

「はぁ……。ふぅ……」

溜ため息いきを吐つきすぎて喉が渇き、水ばかりごくごくと飲んでいる。カイエに「そんなに飲むとトイレが……」と心配されるほどだ。ケチャップまみれのコーンブレッドをもぐもぐ食べている彼女の強心臓が羨うらやましい。

ちょっと提案してみる。

「挨拶、レディファーストで、カイエが最初でもいいけど……」

「土ど壇たん場ばで変更するのは、良くないと思うな」

あっさり断られた。

バートがあまりに沈んでいるせいか、カイエが励ますように言う。

「ほら、イリナとレフがやった全世界への演説に比べれば、沼でカエルやザリガニ相手にしゃべるようなものじゃない？　私、そう思うと心が落ち着くけど……」

「カエルやザリガニか……」

想像してみると、気のせいか、少しだけ心拍数が下がった気がする。そういえば、彼女の口から初めてイリナの名を聞いた。彼女はイリナをどう思っているのだろうか。

―と、気が紛れたのも、つかのまだった。
ジェニファーが、カメラを手にした中年男性を連れてくる。
「彼、『リヴィン画報』の記者。覚えといてね」
写真をメインにした雑誌『リヴィン画報』は、宇宙飛行士のプライベートに関する情報の取り扱いでＡＮＳＡ広報部と専属契約しており、唯一の公式媒体と言えるものだ。ＡＮＳＡがリヴィン画報一誌のみと契約した理由は、殺到するマスコミから宇宙飛行士を守り、情報を都合良くコントロールするためだった。だが、その副作用として、他誌はドル箱を扱えず苛いら立だちを募らせている。
「リヴィン画報以外の記者は、盗撮も平気でやってくるから気をつけて」
張り込みは当たり前。アーロンの打ち上げ時には、一〇〇人以上の記者が実家を取り囲んだ。バートも「アーロンの裏話を教えてほしい」と接触された。しかし、清廉潔白な兄の姿しか知らないので、何も教えることはなかった。
このようにして、下世話な大衆紙はあの手この手で宇宙飛行士の噂うわさを入手し、発行部数を伸ばすためなら怪しい情報でも取り上げた。近頃でも『アーナックニューズ』が「史上初の宇宙飛行士はスホイシン大尉！」という誤報を流して共和国政府から非難されたが、その後も「連合王国は狼おおかみ男を打ち上げる！」など騒ぎ、まったく懲りていない。
バートとカイエが記者と挨あい拶さつを交わしていると、ジェニファーがドアを指す。
「ほら、来たわよ。英雄が」
上品なスーツ姿の『七人の飛行士ヘルメスセブン』がスポークスマンを従え、威風堂々と入ってくる。
彼らは海軍、空軍、海兵隊から選ばれた中佐たちで、三〇代が中心。

共和国の宇宙飛行士に比べると、年齢も階級も上になる。身長制限により全員一八〇センチメートル以下だが、英雄たるオーラを放ち、バートからすれば二メートルほどありそうに感じる。
　金色の髪の毛を短く刈り上げたアーロンが、バートを見つけて手を挙げる。
「やあ、バート。久しぶりだな」

弾道飛行成功の凱がい旋せんパレード以来、三か月ぶりの再会だった。飛行士たちはそれぞれの役割を果たすべく、忙しく全国を駆け回っており、一堂に会する機会が多いわけではない。

無駄のない姿で、いかにも有能な雰囲気をまとうアーロンは、小さくなっているバートを気にかける。

「広報の仕事は、俺も戸と惑まどいがある。だが、有名になるのも使命だ。国家やＡＮＳＡの事業は、個人の夢を叶えるボランティアじゃないからな。それ相応の責任を負って当然だ」

次いでアーロンは、カイエに握手を求める。

「初めまして、カイエ。弾道飛行の成功には、君の大きな助力があったと聞いている」

清すが々すがしい笑顔のアーロンに、カイエも笑顔で応じる。

「お褒ほめにあずかり、光栄です」

初対面のふたりは、すごく自然で、種族の壁を感じない。見栄えのする男女が握手をしている光景は、それこそ宇宙開発の象徴のようにバートは感じる。そして、優秀で明るく聡そう明めいなカイエは、どこか兄に似ていると思った。ただ、兄は階段から転落するようなドジは踏まないが。

「おい、アーロン。俺にも紹介してくれよ」

有人軌道飛行に挑戦するスティーヴ・ハワード飛行士が近づいてくる。

スティーヴ飛行士はテストパイロット時代に超音速機で大陸横断飛行の記録を樹立したことで知られる人気者だ。アーロンを表す言葉が『スマート』なら、スティーヴは『ワイルド』。軌道飛行は強行軍で九月一三日に打ち上げが決定したが、スティーヴ飛行士は「激戦地へ試作機で挑むようなギャンブルだ」と笑って言ってのける。命懸けの飛行にふさわしい軍人気質の持ち主だ。

　そんなスティーヴ飛行士はカイエを一いち瞥べつすると、どこか不満げに鼻を鳴らす。
「自分の命は、人間の脳に預けたいんだが。そういうわけにもいかないんだろう」
　言葉の端々に、新血種族やコンピューターに懐疑的である気持ちが滲にじむ。だが、そんなスティーヴ飛行士にも、カイエは物もの怖おじしない。
「コンピューターを作ったのは人間の脳です。ご安心ください」
　強く言い切ると、スティーヴ飛行士はニヤリと笑い、バートの肩を「頼むぜ」とバシッと叩たたき、アーロンを連れ去って行った。
　記者やスポークスマンと打ち合わせをしていたジェニファーが、バートとカイエを手招く。
「さあ、会場へ移動するわよ」
　いよいよバートの心臓は動どう悸きが止まらない。

　会場となる講堂には各国の取材陣が入っている。軌道飛行への挑戦表明と、『アーナック・ワン』のお披ひ露ろ目めとあって、注目度は高い。一般席に座っている三〇〇名の聴衆は、九割以上が人間で、新血種族は居い心ごこ地ち悪そうに片隅にかたまっている。
　舞台袖そでから客席の様子を見たバートは足がすくんでしまう。
　ステージには『ドリーム・プロジェクト』と書かれた横断幕が張られている。
　それを見たジェニファーが皮肉っぽく言う。
「宇宙開発に、夢なんてないからね」
「え？」
　バートとカイエがそろってジェニファーを見ると、彼女は言い聞かせるように語る。

「新聞社や出版社は発行部数のために、政治家は選挙のために、企業家は商売に『夢』を利用する。それでも、あなたたちは熱く夢を語るのよ。納税者の胸を高鳴らせて、観劇料を払ってもらえるように。オッケー？」
「オ、オッケー……」
　ジェニファーの意見はとても現実的で、何も間違っていない。カイエも納得したように頷うなずいている。
　式の開始時刻となる、午後一時を知らせるチャイムが鳴った。
　司会を務めるアーロンが登壇すると、無数のフラッシュが焚たかれ、割れんばかりの歓声と拍手が起こる。
　アーロンはマイクを手に、開式の挨あい拶さつを始める。
「私の飛行は、偉大なる冒険の足がかりにすぎません――」
　カイエもさすがに表情が硬い。バートは緊張しすぎて、アーロンの声が頭に入ってこない。挨拶文のメモを確認し、脳内で繰り返すうちに、とうとう出番となる。
　アーロンが舞台袖そでに目を向けて、希望に満ちた声で言う。
「今日は、七人の飛行士ヘルメスセブンの前に、ゲストを呼んでいます。バート！　カイエ！」
　来た――
　汗のにじむ手で、メガネとネクタイを直す。
　アーロンに呼び込まれ、盛大な拍手の中、舞台に上がる。
　足が震える。胃がキリキリする。視線に突き刺される。
　舞台の中央、アーロンの隣にバートとカイエが並ぶ。
　乱発されるフラッシュにクラクラと目め眩まいがする。
　レフとイリナの演説に比べたら、聴衆はカエルとザリガニ、カエルとザリガニ――
「じゃあ、バート、一言いいかな？」

アーロンに肩を叩たたかれた。
レフの演説を思い出せ。魔法の言葉を唱える。
さあ、行こう……！
暗記した挨拶文をつらつらと読み上げる。
「ハ、ハジメマシテ……アーロンの弟、バート・ファイフィールドです」
声が裏返りそうになる。
「僕は、ケイリー研究所のＤルーム担当になり、それで―」
「なあ、バート」
唐突にアーロンに口を挟はさまれ、心臓がドクンとなる。
「ディールームって、何の略だ？」
「え、あ。デジタルコンピュータールームの略で、それで、えっと……」
忘れた。
質問されて、全てが吹っ飛んでしまった。
「えー……」
メモに頼ろうと、ポケットをまさぐるが、メモがない。
「……」
頭が真っ白になる。血の気が引いていく。
メガネを直すフリをしてうつむき、必死に考える。
会場でざわめきや失笑が起き始める。
するとアーロンは「バート、ありがとう」と笑みを浮かべて、バートの手からマイクをもぎ取った。これ以上はマズいと判断したのだろう。「弟は学生時代、小型衛星コンテストで優勝したこともあるんだ」とフォローし、客に拍手を求める。茫ぼう然ぜん自失となったバートに向かって、慰なぐさみの拍手が息の根を止める殺虫剤のように降りかかる。

そしてアーロンは「次はDルームの室長、カイエさんに話を聞きましょう」と早々に振る。

突然の出番にカイエは姿勢を正し、ふぅと軽く息を吐いた。

干からびたサボテンの如ごとく萎しなびたバートの横で、ふたりの会話が始まる。

「カイエさんは、弾道飛行の計算を完成させ、コンピューターを駆使し、私の宇宙飛行に多大なる貢献をしてくれた。彼女と、そしてDルームに勤つとめる新血種族の職員たちに、深く感謝します」

アーロンがカイエに敬礼すると、観衆は拍手をする。とくに新血種族の一団は、誇らしげに大きな拍手をして口笛を鳴らす。

カイエは照れ臭そうに一礼すると、会場を真まっ直すぐに見つめて、朗々と話す。

「皆さん初めまして。カイエ・スカーレットです。私は、世界最高峰のコンピューター『ＡＣＥ』を使い、バートや新血種族の仲間とともに、宇宙開発に参加しています」

模範的な挨あい拶さつがよどみなく続く。

カイエとアーロンが並んで話している姿を見て、バートは疎外感を覚える。そして、連合王国を代表してレフとイリナに会うとしたら、やはりこのふたりが相応ふさわしいのではないかと、あらためて思ってしまう。

早くこの時間が過ぎてほしいとバートはうつむき、チラリと客席の様子を窺うかがう。すると一部の人間がカイエに向けて中指を立て、首を切るジェスチャーをするのが目に入った。

「エッ……」

ひどい侮辱だ。

彼らは激励に来たのではない。血税を奪い取る宇宙計画や、自分たちより上に立つカイエが憎いのだ。もしかしたら、客席の何人かは、獲物

を見定めに来た [ソーラーフレア・クラブ] かもしれない。
　そう思ったとたん、人間たちがペストマスクを付けた亡霊に見えてくる。バートは思わず客席から目を逸そらす。亡霊たちが呪うのは新血種族だが、味方をする人間もターゲットになり得るのだ。
　彼らの行為は、カイエの視界にも入っているはずだが、彼女はまるで亡霊が見えていないように、意気揚々とアーロンと会話を続ける。
　やがてカイエの挨あい拶さつは終わり、アーロンに降壇を促される。バートは聴衆への礼もそこそこに、そそくさと舞台を降りた。
「□□ＡＮＳＡ史上最悪の挨拶」
　死んだザリガニを見つめる目つきのジェニファーから厳しく駄だ目め出しされ、心がズンとなる。カイエは「最初だから仕方ないよ」と慰なぐさめてくれるが、「ありがと……」と頷うなずくので精いっぱいだ。初めてなのはカイエも同じで、しかも侮辱までされていたというのに。バートは自分の不ふ甲が斐いなさに絶望し、控ひかえ室の端で落ち込んでいるうちに壮行会は終わった。

　式典後、バートとカイエは水着のピンナップ撮影があるが、『七人の飛行士ヘルメスセブン』は別会場の講演に向かうため、ロビーで別れを告つげる。
「名門ファイフィールド家の一員として、頑張ってくれよ」
　アーロンからプレッシャーをかけられる。バートは早くも広告塔を辞めたくなっているが、そんなことを言える空気ではない。
「初めてで、緊張しちゃって……」
　頭をかきながら苦笑いして誤ご魔ま化かすと、アーロンはかぶりを振る。
「カイエさんだって緊張してたぞ。笑顔は硬かったし、舞台を降りるときに握手をしたが、手のひらに汗をかいてた」

「そうなの……？」
　ロビーの隅にいるカイエに目をやると、飛行士たちに囲まれ、コンピューターについて根掘り葉掘り訊たずねられている。飛行士たちは、自分の命運を預ける未知の機械について不安を払拭したいのだ。
　カイエはバートとアーロンの視線に気づくと、いつもと同じ可か愛わいらしい微ほほ笑えみを浮かべる。
　するとアーロンは声を潜ひそめてバートに言う。
「もっとも、彼女の緊張は別の理由だったのかもしれないがな。客席の連中、見たか？　彼女を侮辱している者たちがいた」
「あれは、ひどいよね……」
「ああいう連中はどこにでもいる。まあ仮に [ソーラーフレア・クラブ] だとしても、公の場で危害を加えてきやしないだろうが……万が一のときは、お前が守ってやれよ」
「あっ……うん」
　守りたいのはやまやまだが、バートはあの不気味な集団がどうにも苦手で、平穏を祈るしかない。
　そしてアーロンはバートを軽くハグして親指を立てると、飛行士たちの方へ去って行く。
　入れ替わるように、質問攻めから解放されたカイエがやってきて、ジェニファーや記者と合流し、駐車場に向かう。これから海岸の撮影ポイントまで移動するのだ。
　すると道中、ロケット発射センターに属する空軍兵という熟年の男性から、バートは声をかけられた。
「バート君、サインをくれないか？」
　最低の挨あい拶さつをしたのにサインを求められるとは、意外だった。
「僕のサインなんかで、いいんですか……？」

「君が元空軍兵というのをプロフィールで見た。空軍の開発したロケットは花火ばかりだったから期待してるよ、アッハッハ」
　ジェニファーに確認すると「ぜひ書いて」と許可されたので、差し出されたチラシの顔写真に、バートはスラスラとサインを入れる。
　その書きっぷりに、カイエがいたく感心する。
「へぇ、上手だね。スターみたい」
「ま、まあね……」
　こういうこともあろうかとサインの練習をしていたとは、大失敗した挨拶のあとでは言えない。
「練習したの？」
　ぎくり。
「まぁ、多少はね……」
　カイエは嘲あざ笑わらうこともなく、「私も練習しようかな……」と呟つぶやく。
　サインを受け取った空軍兵は、バートをまじまじと見ると、どこか懐かしげに言う。
「近くで見ると、ますます戦死したうちの息子に似てる」
「亡くなられたんですか……」
「アイツも初陣のとき、ガチガチに緊張してて……それっきりさ。まあ、もし何かありゃ助けに行ってやるよ。宇宙開発競争も戦争だからな。ただ、もうちょっとピシッとしてくれよ。空軍が情けなく見えてしまうからな」
　サインを上う手まく書いたことが恥ずかしくなってくる。
　空軍兵が去ると、帰途についていた客たちがサインを求めてドヤドヤと集まり、バートの前に大行列ができる。戸と惑まどっていると、ジェニファーに「業務」と囁ささやかれ、対応する。
　一方、カイエには、数名の新血種族が並ぶ程度だ。人間のなかにも、

彼女のサインを物欲しそうに見ている者もいるのだが、分離差別の見えない壁があり、誰も行かない。

そんなとき、人間の少年が「カイエー」と駆け寄ろうとしたが。

「噛かみつかれるよっ！」

親が慌あわてて少年の手を引っ張って、止めた。

少年を見つめるカイエは、複雑な表情をしている。どれほどの哀かなしみや怒りを堪こらえているのか、バートには想像もつかない。ひょっとしたら、慣れているのかもしれない。これは、よくある光景だから。

人間の親は、新血種族と仲良くしようとする子どもを怖がらせる。将来、子どもが吸血鬼と恋愛しないように、嫌悪感を植え付けておくのだ。政府の宣言で『民族融和』が謳うたわれているが、国民には届いていない。いきなり「人間と新血種族は仲良く」と言われてもできるわけがなく、悪あしき州法も廃止されていない。

バートがサインをする人間のなかにも、ポツポツと差別の呪じゆ詛そを吐く者がいる。

「新血種族と同じ部屋なんて、大変でしょう」

「いえ、そんなことないですよ……」

やんわりと否定するが、「──アーナックは人間の国なのに」「──月に存在する吸血菌を持ち込んで、地球を滅ぼすつもりかも？」などの発言が耳に届く。

いい加減に辟へき易えきしてきた頃、延々と連なるサインの列に業を煮やしたジェニファーが、「次の予定があるので、サインはまた今度お願いします！」と列を散らし、駐車場へ引っ張る。

解放されたバートとカイエはほぼ同時にホッと安あん堵どしたが、その意味するところは、おそらく違うだろう。

真っ赤な太陽に白砂は熱く灼やかれ、エメラルドグリーンの海は美しく輝く。

海水浴用の更衣室で、バートは地味な紺こん色の水着に着替える。逞たくましさが礼賛されるこの国で、貧弱で色白な身体からだをさらすのはみじめだ。夏までに鍛えようと毎年思うのだが、いつも三日で挫ざ折せつしていた。

更衣室を出ると、カイエもちょうど出てきたところだ。水玉のワンピース型の水着に、スリムな身体のラインがはっきり出ている。透きとおるように白い肌、くっきり浮き出た鎖骨、以前気にしていた上腕はほっそりしており、スリットの入った胸もとはふっくらと──

「見過ぎっ……！」

カイエは頬ほおを赤らめ、胸もとで両腕を組んだ。

「ご、ごめんっ……！」

慌てて目を逸そらすバート。

　しかし彼女の水着姿は美しく、どこに気にするところがあったのか分からないくらいだ。間違いなく可か愛わいく、どことなく異国風の気品がある。写真が掲載されたら、人間にも人気が出てもおかしくない。
「お待たせー」
　やってきたジェニファーから、ライフジャケットを渡される。
「えっ？　これは……」
　カイエと顔を見合わせるが、彼女も困惑している。
　フフッとジェニファーは小悪魔のように口角を上げる。
「あなたたち、まだ全然お互いを知らないみたいだし、距離がある感じがするのよ。だから、もっと親密になれるように、予定変更してマリンスポーツにしたの」
　そう言って指した先では、モーターボートが二人乗りのゴムボートを猛スピードで引っ張っている。
「ちょ、聞いてないんですけど……」
「何か言った？」
　このお姉さんは怖い。バートは逆らわないほうがいいと直感する。
「あの」
　カイエが言いにくそうに看板を指す。
「ここ、コレ」
　看板には【人間専用施設】と書いてある。
　するとジェニファーはニヤリと笑う。
「国家権力で認めさせた」

　ライフジャケットを着用し、メガネをジェニファーに預けると、バートはゴムボートに乗り、カイエと横並びでうつ伏せになる。なるべく身体からだが触れないように気を遣うが、狭いので、どうしても腕や足がくっついてしまう。

鼻先を潮の匂においが漂う。泳ぐのが苦手なのに。落ちたら最悪だ。
カイエの銀髪がさらさらと風に揺れる。チラと横目に彼女を見ると、綺き麗れいな形をした鎖骨のくぼみに、海水が少し溜たまっている。
「ん？」
カイエと目が合った。
「んっ、んん……いや、僕、泳ぐの苦手で……」
「私も……全然泳げない……」
カイエは重い溜ため息いきを吐つき、細い指で髪をかき上げる。瞬間、潮風に乗って、ふわりと月下美人の甘い香りが舞った。
「おーい！　おふたりさん、笑顔でね！」
岸を見ると、ジェニファーの横にいる記者がカメラを向けている。
危ない。カイエの水着姿に気を取られている写真が雑誌に掲載されたら、一族の恥だ。
気をつけよう。
「笑顔か……」
無理やりニヤニヤしてみる。と、そのとき──
グオォォンッ！
モーターボートが予告もなしに猛スピードで走り出す。
「うわっ！」「キャッ！」
波を乗り越える衝撃が、思いのほか腹にガツンと来る。落ちそうになり、縁の取っ手を強く握にぎりしめる。歯を食いしばり、もう笑顔どころではない。
カイエが足をばたつかせて悲鳴を上げる。
「待って落ちる落ちるーっ！」
ボートがカーブし、強烈な横Ｇがかかる。
「キャアッ！」
カイエが横Ｇを味方にして身体をぶつけてくる。

「いっ!?」
「ひぃ……や、や、や……！」
「体重逆にかけなきゃ落ちるって！」
「なんで!?」
「横Ｇ考えてよ！」
「考えてるもんっ！」
　同乗して分かったのだが、カイエはものすごく運動神経が鈍にぶい。自分からわざわざボートを傾けるように体重をかけるのだ。
　モーターボートは急カーブを描き、スピードをさらに上げる。
「うわっ！」
　飛び散る海水を顔中に浴び、遊園地のジェットコースターなど比ではないほどの恐怖を感じる。カイエは涙目で声を絞り出す。
「ピンナップ撮影って聞いてたのにっ……！」
　モーターボートは蛇行し、ゴムボートも左右に振られる。
　いくらなんでも運転が荒すぎる！
　と、モーターボートの運転手が振り向いて、カイエに意地悪な視線を投げた。
「わざと……!?」
　振り落とされそうになり必死にしがみつくが、カイエの体重移動がめちゃくちゃで、バートはぐいぐい押される。
「押さないで！　落ちるって！」
「だってーッ……ああ、指がしびれて、もう……無理……」
　取っ手を掴つかんでいたカイエの指先が滑った。
「あっ！」
「ひぁあ……!?」
　刹せつ那な、カイエはバートの胴に腕を回して足を絡め、あたふたとしがみついた。

「ちょっ！　む、無茶だよ！」
「助けてっ……泳げないのっ」
　バートの横っ腹に顔を密着させたカイエが「ひぃ」と悲鳴を上げるたび、鼻先と吐息で脇腹をくすぐられる。しがみつかれた腕にギュッと力が入る。柔らかな胸が腰に押し当てられ、太ももで足を挟はさまれる。
「カイエ、だ、だめっ……！」
　落ちそうな恐怖と抱きつかれた刺激が限界を超え、頭と心が爆発する。
　そして。
　バシャン……！
　ゴムボートはひっくり返り、ふたりは海に転落する。ライフジャケットのお陰で溺おぼれはしないが、泳ぐ気力はない。カイエも死んだクラゲのようにプカプカと浮いている。
　バートは天を仰ぎ、あらためて思う。
　研究所のオペレーション部門に配属されたはずが、なぜ、新血種族の女性と海でずぶ濡ぬれになっているんだ……。

　ふたりが岸に戻ると、ジェニファーと記者が渋い顔で出迎えた。
「あなたたち、ずっと顔が引きつってて写真が撮れなかった。だから結局、ふつうに撮ることになったから」
「はい……」
　ライフジャケットを脱いでメガネをかけ、指示されるがまま、バートとカイエは砂の焼けた海岸に座る。ゴムボートのせいで疲労困こん憊ぱいで、ふたりともポワンと呆けている。バートはカイエに抱きつかれた感触が生々しく残っていて、それもまた呆ける一因だった。
　するとジェニファーが檄げきを飛ばしてくる。
「バート！　メガネがズレてるんだけど！　あと理知的な笑顔も！」

「ハ、ハイ……」
　メガネを直して硬い笑顔を作り、バートはカイエにボソッと言う。
「宇宙計画に役立つと信じるしかないね……」
「そうね……」
　ふたりで撮影されていると、どうしてもバートは登壇イベントを思い出してしまう。自分よりも、アーロンとカイエが並んで写真に写るほうが、さぞかし絵になるだろう、と。
　カメラマンがフィルムを交換するあいだ、何気なしに、バートはカイエに訊たずねる。
「人間の代表、兄さんのほうがよかったでしょ……？」
　するとカイエは首を横に振る。
「ううん。私は、バートでよかったって思ってるよ」
「ホントに？」
　認めてもらったみたいで、少し心が弾む。
「だって、アーロンさんは宇宙飛行士で、国家的な英雄で、私とは違うから」
　バートのコンプレックスと同じ気持ちを、カイエも感じているのだろうか。
「それに、宇宙開発は、宙そらに輝く星だけじゃないと思うし」
「ん……？」
「宇宙飛行士は、共和国を合わせても十数名しかいない。でも、彼らが飛ぶ裏には、何万という技術者や科学者がいる。だから、夜空に月が輝く一方で、地上には月の光を浴びて咲く月下美人の花があることも分かってくれたらいいな……なんてね」
　どこか切なげに語っていたカイエだが、撮影が再開されると可か愛わいらしく微ほほ笑えんだ。
　バートはずっと、光り輝く兄に比べて、自分は薄暗い星ほし屑くずだ

と考えていた。けれど、なにも兄と同列に考えなくてもよかったのだと気づかされる。

とはいえ、皆が広告塔に期待するのは、宇宙の英雄に対する地上の英雄だ。そんな立派なものに自分がなれるのかというまた違った重圧を感じつつ、カメラに向けて硬い笑顔を作った。

翌日の日曜日。バートは一日中寝ていたが、身も心も疲れが取れない。ベッドに転がり、氷の溶けきったコーラを飲みながら、テレビをぼんやりと眺める。

頭を占めているのは、広報活動だ。

水着の撮影後、ジェニファーから活動予定表を渡されたのだが、市民との交流イベントが盛りだくさんで頭痛がした。

『そのうち慣れるでしょ。というか慣れてくれなきゃ困る』

ジェニファーに厳しく言われ、心が折れそうになったが、隣にいたカイエが予定表を見て、バートに温かな微笑みを投げかけた。

『大変だけど……これからも頑張ろうねっ！』

両手で可愛らしくガッツポーズをする彼女に勇気づけられ、弱音を吐くのをグッと堪こらえた。人付き合いが苦手とか言っていられない。

テレビでは科学特集が放送され、ＡＮＳＡのクラウス博士が解説者として登場し、皆かい既き月げつ蝕しよくの話をしている。九月三日から四日へと日替わりする夜更けに見られるらしい。クラウス博士は一〇年以上も前から科学の啓けい蒙もう活動をしていて、宇宙旅行をテーマにしたアニメーション映画制作にも関わっており、バートは大きな影響を受けていた。

「博士も広報活動してるし、僕も頑張らなきゃな……」

バートは窓の外に上がった月を見る。

宇宙という新しい荒野を開拓するなら、常に挑戦の文字が立ちはだか

るのは当然だ。ひとつひとつ、乗り越えていかねば。
「チーム・ハイペリオンに参加するために……地上の英雄を目指すぞ」
　カイエのマネをして、両手でガッツポーズをして気合いを入れ直した。

　週末は広報活動に従事するバートだが、月曜日からはＤルームの通常業務に戻る。
「バート、ＡＣＥには慣れた？」
　朝礼後、カイエに問われたバートは、寝癖の残る頭をぽりぽりと掻かく。
「いやぁ、使いこなすというのには全然……」
　少しずつＦＯＲＸフオークスを理解していたが、まだまだ初心者。ミアの傍かたわらでプログラム作りを手伝うこともあるが、業務の多くは、パンチカードの運搬などの雑用だ。室員には「人間の男性に押しつけていいのかしら……」と新血種族らしい心配をする者もいたが、バートはべつに構わず、なんでも引き受けた。頻ひん発ぱつする紙詰まりの対応はもはやエキスパートで、皆から頼られていた。
「手先が器用で羨うらやましいわ……」
　修復作業を見ていたカイエが、しみじみと感嘆する。
「僕の取り柄はこのくらいだから」
　謙けん遜そんではなく素直に答えると、カイエは「ううん」と首を横に振る。
「バートって自分のことで手いっぱいでも、誰かが困ってるのを見たら放っておけなかったりするでしょ？　そういうところ、すごくいいと思う」
「そ、そうかな……」

どれほど役に立てているか分からないが、そう言ってもらえるのは嬉しい。

Ｄルームに派遣された当初は緊張していたものの、わりと慣れてきた。むしろ、室員から必要以上に干渉されないので気楽だった。

そんなバートは、いつしか人間職員の対応窓口になっていた。

時折、技術者や科学者が計算書類の受け渡しにやってくるが、彼らは人間とやり取りしたいようで、バートにばかり話しかけるので、自然と担当者になったのだ。広報活動の件で顔が知られたのも大きかっただろう。皆は雑談ついでに、カイエのことを訊たずねてくる。恐るべき経歴を持つ彼女が、やはり気になるようだった。

「カイエってのは、どんなヤツなんだ？」

「聡そう明めいで優秀ですよ」

彼女の名誉のために、ドジな点には触れない。

実際に、彼女の仕事量はすごかった。

業務の大半は彼女が目をかけ、指導し、休みなく働く。もし彼女が倒れたら業務が立ちゆかなくなるだろう。コンピューター用語を使って彼女を表すならば、彼女自身がＤルームのＣＰＵだとバートは感じていた。

そんな彼女は、世間に知られて賞賛されるべきであり、広告塔として適任だ。隣に立つ自分も頑張らねばと意気込むバートは、日々精進する。

だがコンピューターは一筋縄なわではいかず、何をやるにも手こずる。

苦労してパンチカードを作っても意味不明なエラーメッセージが出力され、検証して修正したはずが、前回とは違うエラーが出る。それがプログラムのミスなのか、キーパンチャーのミスなのか、別の要因なのか、何度も何度もやり直すハメになる。

さらに、出来上がったパンチカードの入れ換え作業は、面倒で危険だった。

たとえば、もしカードの束を落として順番がバラバラになってしまうと、リストと比較しながら直すという不毛な労働が待っている。落とさないように細心の注意を払っていても、何千枚の束を扱っていると、ちょっとした拍ひよう子しに手から滑り落ちたり、雪な崩だれ落ちたりするのだ。

ＡＣＥは確かに計算が速く、労力を費やす価値はあるのだが、神経をすり減らす細かい作業は肉体的にも精神的にもつらく、広報活動の疲れが抜けないバートはじわじわ消耗していく。

ついにはパンチカードが夢にまで現れ、バートはキーパンチャーに穴を開けられ、大量のパンチカードの束に挟はさまれ、ハンバーガーの具のようにペシャリと押し潰つぶされた。

やる気はあるのだが、勤務中に何度も睡魔に襲われ、うつらうつらと船を漕こぐと──

「……痛っ！」

お目付け役のミアに、ペンでチクリと腕を突かれる。

「今度寝たら顔に落書きする」

「先生すみません……」

バートがトイレで顔を洗って戻ってくると、軌道計算プログラムのテスト結果を検証していたカイエが「あれ？」と首を捻ひねった。

「計算エラー？」

不穏な発言をしたカイエの周りに皆が集まる。

「このプログラム、弾はじき出される数値がおかしいの。確認のために、私が自分の頭で依頼書の計算を解いてみたんだけど、合わない」

宇宙開発では誤差だと思われるような違いが大きな失敗に繋つながるため、絶対にミスを見逃してはならない。

エラーが発生したプログラムのパンチカード作成にはバートも関わっており、眠気が一気に覚める。原因究明して対処しなければならないが、納品の期日に間に合わない可能性がある。

そこで、依頼者であるエンジニアリング部門に連絡を入れると──

「だからコンピューターと新血種族は信用ならないんだ」

キツい嫌みを言われてしまった。

にわかに室員たちの雰囲気が重くなるが、カイエが手を叩たいて鼓舞する。

「エラーを解消すれば問題ないよ。たぶんパンチカードのミスだから、探して修正すればオッケーだよ！」

信頼回復に意気込むカイエに引っ張られて、皆の士気も高まる。そして、エラー解析班と日常業務班の二手に分かれることになったのだが、当然、バートはエラー解析を行う。

ＦＯＲＸフオークスの教本を参考にして、計算結果やパンチカードとにらめっこをする。自分の担当箇所にエラーは見つかってほしくないとバートは心から願う。

一行一行確認していると、目がショボショボしてきて、何度もメガネを指で直す。

そして丸一日かけてコードを念入りに再確認していると、バートが担当した箇所に、糸くずと見間違うような差異を見つけた。

「あれ……これ……？」

DO　10　I = 1.10

背筋がスーッと冷える。

「ピリオドじゃなくて、カンマじゃないのか……？」

DO　10　I = 1,10

たった『.』と『,』の違いだが、プログラムでは致命的なミスだ。ピリオドは『データの数値』として認識され、カンマは『命令文の区切り』として認識される。

これがエラーの原因だった。

ケアレスミスを犯してしまい、バートは目の前が真っ暗になる。

「このくらい、コンピューターが自分で『違う』と判断してくれればいいのに……」

だが、コンピューターは指示された計算を忠実にこなすだけだ。

ともかくエラーの原因が判明したので、室内に安あん堵どの空気が流れる。カイエも胸に手を当て、ホッと息をつく。

「良かった！　気づかずに続けていたら、大事故になっていたかもしれない」

良かったのは良かったのだが、余計な作業をさせられた室員たちはバートに冷たい視線を送る。バートは責任を感じて、ひたすら「ごめんなさい」と謝るしかない。

するとカイエが、バートをかばうように皆の前に歩み出る。

「責めないであげて。彼は、土日は広報の仕事があるから休めなくて、疲れが溜たまってるの。それに、まだここに来て一週間足らず。じゅうぶんやってくれてると思うよ。みんなだって、最初の頃、いっぱいミスしてたじゃない」

ミアも皆も、「まあ、そうだよね……」と当時のミスを互いに言い合い、懐かしげに振り返る。そしてカイエはバートに優しく微ほほ笑えみかける。

「バートも次から気をつけてね」

「はい……」

慰なぐさめられて救われたが、その反面、休みがないのはカイエも同

じだと思うと、自分が情けなくなる。彼女は疲れなど微み塵じんも見せず、業務に打ち込んでいるのに。

　夕食後の休憩時間。バートはコーヒーを手に棟の屋上に来た。ひとりになれるトイレと屋上はバートにとっての避難場所だ。
　こんなふうに気持ちが沈んだときは煙草たばこを吸うと落ち着くのかもしれないが、バートは気管支が弱くて煙は苦手だった。
　それよりも、ぼんやりと星を眺めて心を空からっぽにしたい。
　夜空には夏の大三角が輝き、銀色の半月がぽっかりと浮かんでいる。
　昼間の灼やけつく日差しがないとはいえ、蒸し暑い。汽水湖ソルトレイクの湿気を含んだ生温かい風が、肌にまとわりつく。
　誰も来ない場所を求めて給水塔の裏に回る。
　と、鉄てつ柵さくにもたれている人影があってビクッとなった。
「あっ……」
　先客はカイエだった。ガラスの小瓶びんを手に星空をぼんやりと眺めていた彼女は、バートに気づくとハッと目を丸くした。
「え？　バート、休憩？」
「うん。君も、ここで休憩してたんだ？」
「たまに来る。地下にずっといると息が詰まっちゃうし、ここは誰も来なくて静かだから……」
　カイエはそう言って、ガラスの小瓶に入った角砂糖をカランと鳴らした。
　彼女の休憩を邪魔するのは悪いし、バートもひとりで休みたいところだが、ここで引き返すのは気まずいので、カイエと微妙な距離を空けて、鉄柵にもたれる。
　カイエは角砂糖を口に入れ、飴あめを舐なめるように食べる。
　バートはコーヒーを一口すると、エラーの件についてあらためて話

す。あのときはすっかり意気消沈してしまい、カイエに感謝を伝える余裕がなかった。
「迷惑かけたのに、かばってくれて、ありがとう……」
「ううん。疲れてくると見間違えちゃうよね」
　エラーのせいで不要な残業が発生したというのに、カイエはまったく責めない。広告塔のパートナーという事情だけでは説明できない情を感じる。
「でも、ミスが発覚したとき、どうしてあんなに僕を擁護してくれたの？　みんな嫌な顔してたし、君にも厳しく注意されるかと思った……」
　指摘されたカイエは恥ずかしげに、ガラスの小瓶をくるくると回す。
「それはね、えっと……私、高校や大学のとき、人間の男性に混ざってひとりだったから……あなたも同じ気分かなって……」
　彼女の朱あかい瞳ひとみが寂しげに揺れる。おそらく、ひどい差別に遭ったのだろう。それなのに、彼女は人間の男性である自分を気遣ってくれる。
　そしてカイエは目を伏せ、黙りこくってしまった。つらい記憶が蘇よみがえっているのかもしれない。これ以上触れる話ではないとバートは思い、話題を変える。
「『月面写真撮影プロジェクト』の試作一号機が、二週間後に打ち上げられるみたいだね」
「え？」
　カイエは虚をつかれたように顔を上げた。
　ＡＮＳＡでは全国各地にある研究所で、惑星探査などのさまざまな計画が進行している。『月面写真撮影』はそのうちのひとつで、ライカ・クレセントから遠く離れた西部の都市で探査機が開発されている。そこでもＡＣＥ社のコンピューターが使われていると、広報の資料に載って

いた。
　じつのところ、月面の撮影など共和国は二年も前に達成しているのだが、連合王国はようやくスタートを切るところだ。
「楽しみだな。子どもの頃に描いてた空想が、どんどん現実になっていく」
　宇宙旅行を夢想し、バートは月を見上げる。
「いつか『プロジェクト・ハイペリオン』のチームに入れたらなって思う……って、ピリオドとカンマを間違えたヤツが言うことじゃないか。ははっ……」
　苦笑いして、カイエに目をやる。
「君は、きっとハイペリオンに採用されるだろうね」
「ん？　んー……」
　気もそぞろに、ガラスの小瓶びんを手のひらで転がしていたカイエは、一瞬頬ほおを緩ゆるめたかと思うと、汽水湖ソルトレイクの水面に浮かぶ月に目を落とす。
「……どうなんだろう。この国の宇宙計画自体、潰つぶれるかもしれない状況だし……」
「女王陛下に『フライ・ミー・トゥ・ザ・ムーン』って言ってほしいよね。そしたら、宇宙開発に反対している国民も納得しそうじゃない？」
「アハハ……じゃあ私、そろそろ戻るね」
　笑い混じりにカイエは鉄てつ柵さくから身体からだを離すと、すたすたと歩き出す。
「待って。僕も戻る」
「来たばかりなのに？」
　振り向いたカイエは、不思議そうにキョトンとする。
「いや……だって、残業は僕のせいだし……ゆったり休んでる場合じゃないから」

「へぇ。いい心がけだね。それじゃ──」
　カイエはバートに歩み寄ると、小瓶を開けて、角砂糖をひとつ、ふたつ、みっつとバートのコーヒーにドボドボ入れる。
「え、え……？」
「燃料投入。飲み干してね」
　ニーッと笑うカイエ。どうやらこれは彼女なりの罰ばつらしい。
　バートは頭を深く下げ、わざとらしく申し訳なさそうに言う。
「二度と失敗しません。すみませんでした」
「ふふっ、じゃあ戻りましょう」

カイエは大きく伸びをして、歩き出す。夜の闇やみを進む彼女を、頭上に輝く銀色の月が煌こう々こうと照らす。スポットライトを浴びるような彼女の背中を見て、バートは心に誓う。

人としても、職員としても、パートナーとしても、彼女に追いつけるように頑張ろうと。

砂糖の溶けきらない甘々のコーヒーをグイッと飲み干し、コンピューターの待つ戦場へ戻る。

東西冷戦は激化の一途を辿たどっている。

八月一三日。共和国連邦の衛星国が、突如、連合王国側の占領地域を有刺鉄線と警備兵で囲み、四五キロメートルにわたり封鎖し始めた。

この封鎖事件を新聞各紙は連日トップニュースで報じ、宇宙開発計画の情報はほかのニュースに混ざって裏面に掲載された。

ロケット発射センターでの登壇イベントが大きな写真付きで記事になり、そして、水着の写真の載った『リヴィン画報／アーナック・ワン特集号』が発売されると、バートとカイエは【連合王国の科学発展を担う、知性と美徳に溢あふれる男女】として世間に広く知れ渡った。

「こんな大きく載るなんて……」

通常業務後、所内の広報室でジェニファーから誌面を見せられたバートは、不穏な世界情勢に複雑な感情を覚えつつも、自分の写真に照れ臭い気持ちになる。カイエも同様、恥ずかしそうな笑みを浮かべていた。

登壇イベントのバートは表情が硬くて猫背で、凛りんとしているカイエに比べると自信がなさそうで、どこをどう見ても『アーロンとカイエ』がお似合いのパートナーだ。

ジェニファーはバートの顔をまじまじと見て、サラッと言う。

「君って、カイエやお兄さんに比べると華がないわね」

「言われなくても分かってます！」
　水着の写真にしても、女優のようなカイエの横に、貧弱なメガネの男が突っ立っている構図だ。しかもバートの名には『アーロン宇宙飛行士の弟』という冠がもれなく付いている。
「まあ、そんな君にも、ファンレターがたくさん届いてるけど」
　ジェニファーがドサッと、何十通もの手紙をバートの前に置いた。
「うわっ、すご……！」
　思わず声が漏れたが、すごいのはファンレターだけではなかった。街の飲食店で写真やサインをせがまれ、バートは生まれて初めてモテている実感があった。すべては英雄である兄のお陰だが、すっかり人生が変わってしまった。
　人気が沸騰したのはカイエも同じで、全国の新血種族からファンレターやプレゼントが殺到している。その量はバートの倍以上で、人間からも届いている。
「信じられない……」
　カイエは自分の魅力に気づいていないのか、真剣に戸と惑まどっている。
「―ん……これは……」
　バートが手紙を確認していると、新血種族の女性からのファンレターに、キスマーク付きのセクシーな写真が入っていた。「会って食事したい」と書いてある。
「こ、これ……？　ハニートラップかな……引っかかんないけど……」
　冷静を装いながら内心は興奮していると、カイエに冷ややかな目を向けられた。
「トラップじゃなくて、たぶん地位目当てだよ。人間の夫がいると社会の立場が違うから、人間と結婚したがる女が多いの」
「そ、そうなの……？」

　カイエは呆あきれと愁いが混じったように頷うなずく。なんだか、妙に言葉も冷たい。
「そんな理由で結婚するなんて、私は理解できないけど……」
「ウブねえ。純潔の聖女じゃあるまいし」
　ジェニファーが一刀両断すると、カイエはすっと目を逸そらし、黙ってしまった。
「……」
　そんな彼女の反応を見たジェニファーは、悪戯いたずらっぽい眼まな差ざしで言う。
「あっ、カイエは穢けがれなき純潔の聖女なの？」
「んぐっ……」
「聖女？」
「関係ないですよっ……」
　そっぽを向いたカイエの頬ほおが朱しゆに染まる。首もとまで火ほ照てっている。
　ジェニファーはからかうように口笛をヒューと鳴らすと、バートを指す。
「君は絶対に純朴」
「ンなっ……勝手に……っ！」
　からかい飽きたように肩をすくめるジェニファー。
「まあいいわ。じゃあこれからも、浮かれず、自惚うぬぼれず、純朴に『アーナックの科学技術がいかに素晴らしいか』を仲睦まじく宣伝してね。オッケー？」
　問われたふたりは、頬を膨ふくらませながら「オッケー……」と揃そろって言った。
　そして週末。バートとカイエはジェニファーに連れられ、リヴィン画報の記者とともに、人間居住区で開催される夏のイベントを行脚する。

一〇〇人のボーイスカウトを相手に「コンピューターとは何か」と語り、市販乗用車ストツクカーのレースイベントでトークし、慈善バーベキューで宇宙の話をする。さらに、ロデオショーやベースボールパークなど、人の集まる場所ならどこへでも行った。

人前が苦手なバートは挙動不審に右往左往し、明朗快活なカイエにフォローされてばかりだった。しかし、どのイベントも客は人間ばかりで、バートがしどろもどろになっても「変人のナード・天国へヴンらしい」と微ほほ笑えましく応援してくれる。

そんな経験を積むうちに、バートは次第に人前に立つのに慣れて余裕も生まれてきた。広報活動が軌道に乗ったお陰で、Dルームでの作業効率も上がり、ミアにペンで突き刺されることもなくなった。

挫くじけそうになりながらも続けられたのは、カイエの優しいフォローや励ましがあったお陰だった。しばしばカイエは人間から煙けむたがられていたにもかかわらず、つねにバートに気を配ってくれていた。

バートは彼女に深く感謝しているが、口に出して直接伝えるのは気恥ずかしいので、食事の時間にはケチャップを差し出し、ミアの悪戯いたずらを監視して、休憩時には角砂糖を渡すように心がけた。

これまでは人間居住区でのイベントばかりだったが、八月後半に入ると、ジェニファーがついに切り出した。

「今度は、初めて月げつ影えい区くでのイベントに参加するわよ」

カイエはホッとしたような表情を見せた。いつも平気な顔をしていたが、やはり人間ばかりの場所は苦しかったのだろう。逆にバートは恐怖を感じ、目を泳がせていると、ジェニファーがピシッと言う。

「安心して。登壇しての挨あい拶さつはなくて、水着のときみたいに、楽しげな姿を撮るのが目的だから」

ジェニファーの提示した予定表には『ブラッドメロン収穫祭』とあ

る。毎年八月に盛大に催される新血種族の祭りだ。ブラッドメロンはウリ科の植物で、酸味の効いた甘い果実が夏に食べられるのだが、皮も果肉も果汁も血のように真っ赤であることから、新血種族の食べ物というイメージがついている。

生まれて初めて足を踏み入れる月げつ影えい区くで、よりによって、南部の新血種族が集合する一大フェスティバルに参加することになるとは。

バートの腹がキリキリと痛む。

つい先日、国民の不満がさらに高まる失敗があったばかりなのだ。

八月二三日に『月面写真撮影プロジェクト』の試作一号機が打ち上げられたのだが、軌道投入に失敗し、宇宙の藻も屑くずと消えた。

広報活動については、ＡＮＳＡお抱えのリヴィン画報が提灯記事を書き、大衆や各国に対するアピールになっていたが、肝心の宇宙開発が遅れに遅れている。共和国の背中はますます遠のき、連合王国は絶体絶命の危機だった。

ブラッドメロン収穫祭に参加するため、バートは屈強なボディガードの運転する車に乗って月影区へ向かう。ジェニファーと『リヴィン画報』の記者も同行しているが、カイエは現地集合だ。

祭りは憂ゆう鬱うつだが、ひとつだけ楽しみなことがある。祭りのあと、ＡＮＳＡ主催の特別イベントとして、高級天体望遠鏡を使った天体観測が予定されているのだ。その目的は「宇宙計画を快こころよく思っていない新血種族への啓けい蒙もう活動」だが、バートは単純に自分が楽しむつもりでいる。

ミジービ川ブラツド・ラインに架かる橋を渡り、月影区へ入る。

川一本挟はさんだだけだというのに、まるで国境を越えたように異国

の空気が漂っている。未舗装の道路には紙クズやゴミが散乱し、家々は黒く汚れている。

収穫祭に向かっているらしき新血種族の集団は、研究所の職員とは明らかに雰囲気が違う。服装はボロボロで、いかつくて無骨で、鋭するどい目つきでバートたちを見てくる。

街角では、警察風の帽子を被かぶった男たちが旧式のライフル銃を構えていた。

ジェニファーは眉まゆをひそめ、嫌悪を露あらわにする。

「あれ、自警団でしょ。私、ここ苦手。仕事じゃなきゃ来ないわ……」

不安な気持ちは、バートも同じだった。たいていの人間は、都市のダークサイドである月げつ影えい区くについて何も知らない。護身用の銃でも持っていなければ危険だと、皆が皆、そんなふうに思い込んでいる。しかも最近は [ソーラーフレア・クラブ] の活動が活発で、何をしてくるか分からない不穏な空気がある。昨夜も近隣の都市で放火騒ぎがあったところだ。

うんざりとジェニファーは言う。

「政府も [ソーラーフレア・クラブ] には手を焼いていて、州警察が動かない場合、国軍の出動もあるらしいわよ」

「軍ですか？」

「相手は火炎瓶びんに爆弾……立派なテロ組織じゃない」

絶対に巻き込まれたくないと、バートは心の底から祈る。

収穫祭の会場は、かつて要よう塞さいがあった区画で、一八世紀に建てられた石造りの砦とりでが今も残っている。バートたちは砦の裏手にある共同墓地の脇に車を停め、会場の入り口で待つカイエのもとへ向かう。

新血種族には慣れているバートだが、各地から集まった老若男女が大

勢いる光景は非日常で、ものすごい圧迫感がある。いつも強気なジェニファーも小さくなり、ボディガードにくっついて離れない。アウェイ極まる状況に、近づくのを躊ちゆう躇ちよしていると──

「バート、こっちこっち！」

　入場ゲートでカイエが手招きする。美しい銀髪が映える赤色のワンピース姿は、たくさんいる新血種族の女性のなかでも、ひときわ目を惹ひく。

「ミアや、ほかのみんなも来てるよ！」

　いつもより高揚しているカイエに連れられてゲートをくぐる。

　すでに収穫祭は始まっており、溢あふれんばかりの新血種族が会場を埋め尽くしている。

　にぎやかな笑い声や幼児の泣き声が飛び交い、肉を焼いた煙が風に乗り、汗や煙草たばこの匂においと混じる。輪投げや射的などの出店をカラフルな風船が飾り、地面に落ちたブラッドメロンの皮を、野良猫や小鳥が突く。人間居住区ではなかなか味わえない、エネルギッシュな空間だ。

　会場を見渡すと、赤せき眼がんの尖せん耳じばかりで、人間は誰も参加していない。

　異物であるバートたちは、そこかしこから訝いぶかしげな視線を向けられ、指をさされ、卑屈な笑いを投げられる。いつもと真逆の立場だ。だが、カイエの仲間であることは知れ渡っているらしく、拳銃の出番があるような、身の危険は感じなかった。

「あそこで何か食べましょう」

　カイエの向かう先、大きなキャンバステントの下では、ブラッドメロンのアレンジ料理が楽しめる。網焼き、サラダ、皮の部分の炒め物やピクルス。そして当然の如ごとく、ケチャップやハバネロソースが大量に置いてある。

テントの片隅で、ミアが網焼きにハバネロソースをぶちまけている。真紅に染まった恐ろしい食べ物だ。
「美う味まいの……？」
バートが恐る恐る問うと、ミアは「甘辛」とスプーンですくい、平然と食べる。
すると、ジェニファーが強引に、バートとカイエに真紅の激辛網焼きを渡す。
「食べて。文化交流よ」
「エェ……？」
蒸発した辛みが目に染みる。バートはカイエに助けを求め、視線を送る。だが。
「美お味いしいよ」
カイエはそう言うと、ケチャップを塗りたくり、はもはもと食べる。記者にカメラを向けられたバートは覚悟を決め、かじりつく。
「ンゴッ、ゲフッ、ゲフッ！」
口に入れたとたん、むせた。口内や気管が焼けただれそうになる。
「あっ、ハバネロかけすぎちゃったかな？」
ジェニファーがニヤニヤしている。
「み、水っ……」
視界が涙でぼやけるなか、差し出されたコップを口に運び、飲む。
「ぎェッ！」
舌が痺しびれる酸味と、喉のどが焼ける辛味に襲われる。
コップを差し出したのはミアだった。
「ハバネロコーラ」
苦しみ呻うめくバートにミアは冷笑を投げ、会場へ消え去る。
「アハハッ！　バートもミアの洗礼を受けたね！」
口もとにケチャップを付けたカイエが、腹を抱えて笑う。

「ぜんぜん嬉しくない……アァ……絶対、腹が痛くなる……」
　口内は麻ま痺ひし、全身から汗を流しながら、会場を練り歩く。
　会場中央には、五〇キログラムもある巨大果実が神のように鎮座し、その周りではさまざまなコンテストが行われていた。
　早食い競争に種飛ばし、皮を兜かぶとの形にする彫刻。Ｄルームの面々も参加し、最年長の室員は子どもを連れている。トイレでよく出会う男性の新血種族も楽しんでいる。誰もが勤務中には見せない幸せそうな笑顔だ。
　カイエはあらゆる者から声をかけられ、握手やサインをねだられる。そして、そんな彼女を誇らしげに見ている住民たちがいる。
「カイエって、慕われてるんですね」
　バートがジェニファーに問うと、どこか嫉しつ妬と含みに頷うなずかれた。
「性格も顔も頭もオールＡなんだから、嫌われる要素がないでしょ。だから広告塔に選ばれたわけだし。偏差値六三の頭脳しかない宇宙飛行士の弟も見習いなよ」
「最後のは余計です……」
　とはいえ、ジェニファーの言うとおりで、カイエは技術職員として理想的だ。デイモン部門長に「泥ナマズ」ではなく「一流の職員」として認められたければ、作業をこなすだけでなく、彼女のようにチームの皆を引っ張らねばならないだろう。

　二時間ほど会場をうろついていたバートとカイエだが、炎天下に体力を奪われて限界だった。日差しを遮さえぎる大きなヒッコリーの木陰に腰掛け、かき氷を食べる。
「疲れた……天体観測までもたない……ハバネロのせいで腹も痛くなってきた……」

「私も座る暇ひまなかったから、フラフラ……」
　アウェイの空気に精神を削られながら突っ立っていたバートと、サイン攻めに遭っていたカイエとは疲労の質が全然違うのだが、どちらにせよ疲労困こん憊ぱいだった。
　ワァッと会場を大歓声が包む。『ブラッドメロン・レース』が始まったようだ。一〇キログラムはあるブラッドメロンを抱えて競走するという、祭りでも最高に盛り上がるイベントらしく、ジェニファーは記者とボディガードを引き連れて取材に行っている。
　カイエはかき氷をスプーンですくいながら、バートに訊たずねる。
「あなたも見に行く……？　私は休んでる……」
「僕も、暑いからやめとく……」
　バートがぐたーっとなっていると。
「おい！」
　と、何者かに背中を硬いもので突かれた。
「いっ！」
　心臓が口から飛び出るほどびっくりして振り返ると、痩やせ細った新血種族の子どもたちが、木の枝とブラッドメロンの兜かぶとを装備している。
「バート様さぁ、カイエを苛いじめたら、許さないからな！」
「えっ!?　苛めてないよ!?」
　見ず知らずの子どもにバート様と呼ばれた。その小生意気な表情からすると冗談っぽいが、どう対応すべきか困る。
　困った顔をしたカイエが、子どもたちの前にしゃがみ、学校の先生のように話しかける。
「まったく……あなたたち、何してるのよ」
「カイエは苛められてない？　叩たたかれたりしてない？」
「全然そんなことないよ。バートはね、ケチャップや角砂糖を渡してく

れるし、優しいよ」
「エー？」
　それでもバートに疑いの目を向ける子どもたちに、カイエはやれやれと小銭を差し出す。
「これで何か買って食べなさい」
　子どもたちは「ありがとう！」と元気よく叫び、「これ、お礼！」とカイエにブラッドメロンの兜かぶとを手渡すと、嬉しそうに出店に駆けていった。
　嵐のように去った子どもたちに、バートは呆あつ気けに取られる。
「……あの子たちは、誰？」
「うん……」
　カイエは愁うような眼まな差ざしで、子どもたちの背中を見つめる。
「教会に住んでる孤児。あっ、あの子たち、失礼なことしてゴメンね。許してあげて」
　彼らは湿地帯で魚を捕って暮らすような生活をしていて、カイエは時折ご飯を食べさせてあげるのだという。
「へぇ。彼らにとって、カイエは聖女様だね」
「……」
　感心して何気なく言った言葉に、なぜかカイエが頬ほおを染めた。どうしたのだろう。小考したバートは「あっ」とジェニファーがからかった言葉と同じだと思い当たる。
「……いや、僕は聖女って言っただけで、純潔とか、そういう意味じゃないんだけど……」
「っ……」
　カイエはますます恥じらい、ブラッドメロンの兜でそっと顔を隠す。
　沈黙に包まれ、微妙に気まずい空気になっていると、ジェニファーがやってくる。

「カイエ、その兜、ナニ……？　まあいいや。おふたりさん、レースに出て。飛び入り参加の登録してきたから」
「え？」「え？」
　断ろうとしても、時すでに遅し。係員が迎えに来ていた。

　筋骨隆々の新血種族の男たちに混ざり、競走のスタート地点に立つバートとカイエ。バートの抱えるブラッドメロンだけ皆のものより明らかに一回り大きく、カイエの倍くらいある。このハンデはアウェイの洗礼なのだろうか。変えてほしいが、言い出せないままスタートを迎える。学生時代はビリばかりだったバートだが、さすがに女性のカイエには負けられない。
　スターターがフラッグを振る。
「よーい、スタート！」
　反応できず、バートは完全に出遅れる。一方、隣のカイエは、まさかのスタートダッシュを決めた──が、勢いが良すぎて、案の定、三歩目で前のめりにこける。
「キャッ！」
　カイエの手から離れたブラッドメロンが、走り出したバートの足もとに転がる。
「げっ!?」
　避けようとしたバートだが、見事ブラッドメロンの真上に乗っかり、ずっこける。そして顔面から着地し、鼻をしたたかに打つ。
「痛っ──くぁぁ……」
　失笑と大きな拍手、巻き起こる口笛。異常な盛り上がりを見せる。
「痛てて……」
　バートが顔を上げると、ツーッと生温かいものが鼻から唇に伝った。鼻血だ。

慌あわてて拳こぶしでぬぐうと、手の甲が血まみれになる。
瞬間、新血種族たちの目の色が変わった気がして、ゾクッとなる。
バートはレースを途中棄権し、アリゲーターに襲われるアルマジロのように転がり逃げた。

会場の端、共同墓地にほど近いベンチに寝転び、かき氷用の氷で鼻を冷やすバート。膝ひざをすりむいた程度で済んだカイエは、今にも泣きそうな顔で謝る。
「ゴメンなさい、ゴメンなさいっ……」
「大丈夫……メガネも無事だった……」
ジェニファーはコーラを飲みながら、呆あきれたようにふたりを見ている。
「水上ボートも競走も……まあ『変人の天国ナード・ヘヴン』らしいっちゃ、らしいけどね……」
そのあとしばらくすると、カイエはほかの都市から来たという子どもたちに引っ張られていき、再びサインと握手攻めに遭っている。かたやバートは、鼻栓を笑われることはあれども、誰からもサインは求められない。
そんな状況を見ながら、ジェニファーはコーラの氷を噛かみ砕く。
「『アーナック・ワン』ってプロジェクトさぁ……科学技術の宣伝はまだしも、民族融和なんて、簡単にいくわけないんだよね」
「え？」
「『歩み寄る姿勢を見せることが大事』……って、現場を知らない上司は言ってる」
「納得してない感じですね……」
「まあね。やるにしても、もっといいやりかたあるんじゃないかって思うけど」

「たとえば、どんなのですか？」
「君が [ソーラーフレア・クラブ] と決闘する」
「□□」
「冗談よ。そんな死にそうな顔しないでくれる？」
「は、はい……」
　ジェニファーが言うと冗談に感じられず、冷や汗が出る。
「なんていうか、国の指示による形式的なイベントより、切羽詰まった市民によるデモ行進のほうがよっぽどパワーがあるし、共感を得られてると思うんだよね」
「それは、そう思います……」
　人間居住区でのいくつかのイベントに参加して、身を以て感じていた。
「じゃあそのパワーが、人間代表になっちゃった貧弱な鼻血ボーイにあるかというと……」
「うっ……」
　ズバッと斬きられたが、正直に言ってくれるほうがありがたい。言動が自由すぎるジェニファーには振り回されるものの、裏表がなさそうでサバサバしている点は好感が持てた。
　そんなジェニファーは暑そうに胸もとをパタパタさせながら言う。
「私的には、君とカイエと『ＡＣＥ』が有名になってくれればオッケーなの。だからもっと頑張ってよ」
　ビジネスライクな彼女にバートは宇宙への情熱をあまり感じない。そもそも、大学で専攻していたという社会政治学も、まったく宇宙と関係がない。無論、広報部の職員には社会的なスキルが必要なのだろうが。
「ジェニファーさんは、どうしてＡＮＳＡに入ったんですか……？」
　ふと、訊たずねてみたくなった。するとジェニファーは隠すつもりもないという感じで、さらりと答える。

「私、元新聞記者なんだけど、ＡＮＳＡが設立されたときにヘッドハンティングされただけ。理工系の頭でっかちしかいないからって」
「なるほど……」
「ま、やるからには、やるけどね。あと最近目標もできた。もしリュドミラが私の知ってる女なら、あのクソビッチに屈辱を味わわせてハバネロをヒィヒィ涙目になるまで飲ませる」
「何かあったんですか……？」
「君は知らなくていい」
　ジェニファーは怒りを込めて手もとの草を引っこ抜く。理由は不明だが、自尊心を傷つけられた過去があるようだ。恋愛沙ざ汰たではないかとバートは直感するが、深く掘ると逆げき鱗りんに触れそうなので追及しない。
　腹も痛いし、鼻血も洗い流したかったので、ジェニファーにトイレへ行く旨を伝えて立ち上がると、蠢うごめく群衆の合間に、鋭するどい視線で刺してくる新血種族の男がいることに気づいた。
　メガネを直すフリをして、恐る恐る目を向ける。
　スキンヘッドで強こわ面もての男が物言いたげに、バートを品定めするような顔つきで立っている。
　どことなくカイエの面影を感じるが、まじまじと見るのは怖い。視線を逸そらす。
「どうしたの？」
　ジェニファーに問われて、男を横目で窺うかがう。すると男はくるりと背を向け、立ち去った。

　トイレの小屋は不衛生で、ハエが飛び交い、壁板が腐くさって穴が開いている。落ち着くことすらもできず、バートは個室を出ようと扉に手をかける。

　そのとき、新血種族の男たちのしゃがれた声が、扉の外から聞こえてきた。
「──カイエって女、人間に奉仕しやがって」
　カイエに対する非難だ。穴から覗のぞくと、ガラの悪そうな男たちが用を足している。
「──俺たちの戦場は、宇宙じゃない。人間と宇宙なんて目指さなくていいんだよ」
「──こんぴゅーたー？　そんなスゲェものなら、この腐った社会を転覆させてみろ」
　人間を嫌う者からすると、人間社会で成功の階段を上っていくカイエは、気にくわないのだろうか。
「──まあ、水着は良かったけどな。アッハッハ。それだけだ」
　下げ卑びた会話をする輩やからにバートは苛いら立だつが、彼らが去るまで、外に出られなかった。

　ジェニファーのところへ戻ると、サイン会を終えたカイエも戻ってきていた。
「サインと握手のしすぎで腕が疲れちゃった……」
　カイエは手をぷらぷらと振って「サインが上う手まくなったかも」と冗談めかして片目を瞑つむる。こうしてほのぼのしている彼女を見ていると、できることなら、さっきの男たちが放つような悪意に触れずにいてほしいとバートは願う。
　太陽が傾き始め、収穫祭も佳境を迎えたそのとき。
　会場裏の共同墓地から、トランペットの音が重々しく鳴り響いた。
　悲しく美しい賛美歌の演奏が聞こえてくる。
　柵さくの向こうを見ると、悲痛な面持ちの新血種族の行列が雨傘やハンカチを手に、棺かん桶おけを担いでやってくる。賛美歌は、行列に同

行するマーチングバンドが演奏している。
「あれも収穫祭のイベント？」
　バートがカイエに問うと、「違うよ」と首を振る。
「あれは、お葬式」
「……葬式？」
　新血種族たちは足に透明な鉄球でもついているかのように、ゆっくりと不思議な動きで歩いている。演奏も相まって、とても葬式には見えない。するとジェニファーが思い出したように頷うなずく。
「『ジャズ・フューネラル』ってやつね」
　この街に暮らす新血種族に特有の音楽葬があることを、バートは知った。
　儀式が生まれたのは一〇〇年以上も前。新血種族による相互扶助の秘密結社が作られたが、その勧誘文句が「音楽付きの豪華な葬式」だった。
　遺族とマーチングバンドが街角から教会まで演奏しながら歩くうちに、音楽を聞きつけた住民たちがぞくぞくと集まり、ときには何百人もの行列に膨ふくれ上がることもある。
　教会に到着後、葬儀を終えると、出棺の鐘が鳴り響く。そして賛美歌などの悲しい演奏に合わせて、墓場まで棺ひつぎを運ぶ葬送のパレードをする。
　そのパレードがまさに今、到着したということだ。
　独特の風習に興味が湧わいたバートは怖いもの見たさで、共同墓地で行われる葬儀を柵さく越しに覗のぞく。
　墓地には石組みの墓が無数に並んでいる。手入れが行き届いておらず、崩れて内部がむき出しになっている墓もある。
　墓の前に集まった参列者たちは棺を埋葬室に納め、涙を流して花を供え、神に祈る。この流れは、ふつうの葬儀だ。

ところが、埋葬室を閉じると、重く湿っていた空気が一変した。
タンタンタンタタン！
ドラムが軽快なビートを響かせ、トランペットやサックスの奏者たちが大きな音でメロディーを吹き鳴らす。
「え……？」
マーチングバンドは、葬式には似合わない陽気で活気のある曲を演奏し始めた。
ジャズのスタンダードナンバー『太陽と月の行進』だ。
泣いていた者は笑顔になり、踊って飛び跳ねる者もいる。

〈ああ、太陽が沈むとき！〉
〈神よ、私を月へ導いてください！〉
〈ああ、空に星が輝くとき！〉
〈神よ、私を月へ導いてください！〉

迫力と躍動がほとばしり、草陰から蝶ちようやバッタが驚いたように舞い上がる。収穫祭の来場者は墓場になだれ込み、音楽に合わせて歌い踊る。
突然の騒ぎに、バートとジェニファーは唖あ然ぜん。
「な、なんだ……？」
葬儀の参加者たちはマーチングバンドに導かれ、行列を作って楽しげに墓場を去って行く。
カイエは遠ざかってゆく音楽に合わせて、手のひらで太ももを軽く叩たたく。
「このあと、故人の思い出の場所を巡りながら、家に帰るの」
初めて体験する謎なぞの儀式に、バートは疑問ばかり浮かぶ。
「暗い曲で埋葬に来て、明るく帰っていくのは、どうして？」

「埋葬するまでは死を悼むの。帰りは、苦しい現実から魂が解放されて、天へと行進していく歓びを祝う……」
　夕暮れに照らされた墓地をカイエは寂しげに見つめ、つぶやくように歌を口ずさむ。
「太陽が沈むとき、神よ、私を月へ導いてください……」

　太陽が完全に落ちると、昼間の熱気と饗きよう宴えんは嘘うそのように消え去り、収穫祭は閉幕する。そして月が輝き出すとともに、ＡＮＳＡ主催の天体観測が始まる。
　会場近くの砦とりで跡に、一般人ではとても買えない高性能の天体望遠鏡が用意され、バートとカイエは来場者を待つ。
　だが、誰も来ない。閑散としている。トイレにいたガラの悪い男たちと同じで、皆も宇宙開発を快こころよく思っていないのだろうか。
　ふたりに挟はさまれて置かれている望遠鏡にバートは目をやり、もったいないと溜ため息いきを吐つく。
「こんな立派な望遠鏡を覗のぞく機会、そうそうないんだけど。『吸血鬼は月の住民』なんて伝説もあるくらいなのに……。ミアたちは来ないの？」
　バートが問うと、カイエは苦笑いして肩をすくめる。
「とっくに帰っちゃったよ」
　ふたりから少し離れた場所、朽ち果てそうなベンチにダルそうに腰掛けているジェニファーが、記者とボディガードに苛いら立だちをぶつける。
「ホント、うちの上司は現場を知らないんだから。予算の使い方が間違ってるのよ。あぁ、蒸し暑い！　蚊が多い！　シャワー浴びたい……はぁ……」

　腕時計を見たジェニファーは何か決意したように頷うなずくと、荷物を手に立ち上がる。そして、バートとカイエに歩み寄る。
「私、車で待機してる」
「えっ？」
　自由人がまたとんでもないことを言い出したと、バートとカイエは諦あきらめ気味に話を聞く。
「ほら、暗くなってきたでしょ？　車が盗まれたり壊されたりしないか心配なのよ。ふたりはイベントの主役だから、いちおう、あと一時間はここにいてね」
「分かりました……」
　そしてジェニファーは餞せん別べつに瓶びんのコーラを二本置くと、ボディガードを引きずるように連れ去る。取り残された記者は迷った挙げ句、「もし誰か来たら呼んで」とバートに言うと、ジェニファーのあとを追った。
　カイエとふたりきりになってしまった。
　彼女と一日中いっしょにいたせいで雑談のネタは尽き、しゃべることがない。
　ふたりのあいだを生温かい夜風が吹き抜ける。ぼんやりと夜空を見上げているカイエの銀髪がさらさらと風に揺れる。
　沈黙はつらいし、手持ち無ぶ沙さ汰ただ。
「せっかくだし、誰も来ないなら見ようかな……」
　バートは望遠鏡の前に移動する。カイエはチラとバートに目を向けるだけで、とくに何も言わない。
　望遠鏡を月へ向けて、ファインダーを覗のぞく。フレキシブルハンドルで調整して、接眼レンズを覗きながら、ピントを調節する。
　すると、美しい弧を描く三日月がくっきりと見えた。
「……綺き麗れいだ。うちにある市販品とは、やっぱり違うよ」

夜空を観察しながら、バートは子どもの頃を思い出す。
「昔、身体からだが弱くて、あまり外に出られなくて……楽しみは、天体観測と読書くらいだったんだ」
初めて望遠鏡を覗いたときと、宇宙は何ひとつ変わっていない。『フライ・ミー・トゥ・ザ・ムーン』を読んで描いた夢に、少しは近づいただろうか。
レンズの向こうに浮かぶ月は、手を伸ばせば届きそうなほど大きいのに、実際は、遙はるか三八万キロの彼方かなたにある。
胸に秘めた想いが込み上げて、口からぽろぽろと零こぼれ落ちる。
「ＡＮＳＡは失敗続きで、計画の存続が危ぶまれてるけど……最後の最後まで諦めたくない。ジェニファーは『宇宙開発に夢なんてない』と言っていたけどさ、僕は夢を見ていたい。レフとイリナの報告に『神は不在だった』とあったけど、祈りを月に捧ささげ、星に願うんだ」
夢中で天体観測しながら語っていると、遠くでトランペットの音が鳴った。また葬送行進が来たらしい。夜も遅いが、新血種族が月信仰と考えれば不思議ではない。
バートが望遠鏡から目を離すと、物言いたげなカイエにジーッと見つめられていた。
「あっ、ごめん、ひとり占めして。見る？」
「ううん……」
カイエは目を伏せ、ふぅっと息を吐いた。
熱く語りすぎたかもしれないとバートは思い返し、急に恥ずかしくなる。宇宙の話になると、つい、ふだんしゃべらないことまでしゃべってしまう。夢とか神とかどの口が言っているのだと、顔が火ほ照てって、みぞおちのあたりがギュッとなる。
「えーっと……さっき言ったこと、忘れて……。ほら、カイエも見なよ。綺き麗れいな三日月だよ」

「……」
　返事はない。カイエは風に流れる髪を耳にかけ、何か言いたげな顔をしている。
　気まずい空気をどうにかしようと、バートはしきりに話しかける。
「……そうだ。教会の子たちに見させてあげたら、喜ぶんじゃないかな」
「……喜ぶ？」
　ふっとカイエが顔を上げた。
「うん。僕が宇宙を好きになったのって、あの子たちくらいの年齢だったし。カイエ、呼びに行ってきたら？」
　しかし、カイエは首を振り、どこか言いにくそうに答える。
「気持ちは嬉しいけど……」
「そ、そっか……夜も遅いし、門限とかあるのかな……」
「……彼らのこと、気にかけてくれて、ありがとう」
　寂しげな微笑を返された。よけいな提案をしたせいでますます微妙な空気になる。バートはメガネを外して、無意味に弦つるをいじったり、レンズを拭ふいたりしながら、次の会話をひねり出す。
「……あ、ところで、カイエはいつ宇宙に興味を持ったの？　遠くの大学に進んだのも、やっぱり宇宙関連の仕事に就つくため？」
「ん……」
　カイエは困ったように両手を頬ほおに当ててうつむく。ひょっとして過去に触れられたくなかったのではないかとバートは察して、慌あわてて話を変える。
「え、えーっと、よかったら、月軌道の研究について、教えてもらっていい？」
　するとカイエに、真剣な顔で見つめられた。
「バート……あのね。正直に言うね……」

そこまで口にして、彼女は一度息を呑のんだ。思い詰めた表情で、何を告白されるのかとバートが身構えると、カイエはゆっくりと、口を開く。
「私、宇宙なんて、どうでもいいの」
「……え？」
「―月なんて、大嫌い」
聞き間違い、いや冗談かと思った。しかし、カイエは硬い表情で続ける。
「あなたに、私の気持ちは分からないかもしれないけど、聞いて」
彼女の決意を固めた瞳ひとみに射い貫ぬかれ、バートはただ、耳を傾ける。
「ほとんどの新血種族は宇宙開発を嫌ってる。それは私も同じ。政府は国家の意地なんかのために予算を使う前に、社会から虐しいたげられている私たちを救ってほしい。ロケットを一機打ち上げるだけで、どれだけの貧しい子どもが学校に行けると思う？」
痩やせ細った子どもたちの姿が、脳裏をよぎる。
カイエは感情のこもっていない目で、まるで自分に言い聞かせるように淡々と吐露する。
「月げつ影えい区くは屈辱と絶望にまみれたダークサイド。誰もが暗い日々から抜け出したいけど、光は届かない。職業を選ぶ自由はなくて、搾取されるだけ。みんなテレビを持ちたいし、車やバイクに乗りたい。冷房も欲しい。好きなものを食べて、おしゃれな服やアクセサリーで毎日を楽しみたい。でも、そんなの叶わない。今を生き抜くのに必死で、夢なんて見てる余裕はないの」
彼女の言葉ひとつひとつが身に染みて、バートは胸が苦しくなる。すぐ隣にある現実を見ようともせず、甘ったるい夢に耽ふけっていた。
共同墓地から、重々しい葬送曲が風に乗って届く。

「医療だって、最低で劣悪……！」
　怒りを見せたことのないカイエが、初めて、声が震えるほどの感情を露あらわにする。
「助かるはずの者が、死んでいくの……！　吸血鬼症候群の治療法だって、人間にはどうでもいいことだから、誰も研究しないのよ……」
　カイエは唇を噛かみしめると、自分を落ち着かせるように深い溜め息いきを吐つく。彼女の強い想いに差し込まれていたバートは、ようやく声を絞り出す。
「……じゃあ、どうして君はＡＮＳＡにいるの……？　やりたくもない宇宙開発に携たずさわり、広報活動までして……」
　疑問をはねのけるようなきっぱりとした口調で、カイエは言う。
「新血種族が科学者や技術者になれる道を作るため。私が宇宙開発に必要不可欠な存在になることで、新血種族を人間に認めさせる」
「そういうこと、なのか……？」
　彼女の行動の意味が繋つながった。なぜ、コンピューターを教え、なぜ、広報活動に積極的だったのか。今までは、ただ宇宙が好きで、宇宙開発に熱心だからだと思っていた。
　だが、それは大きな誤解だった。
　カイエは髪をかき上げて、憤いきどおりを声に込める。
「この国は、君主は女王でも、社会は人間男性中心に回ってる。ＡＮＳＡも同じ。人間の女性ですら、技術職員になるのは難しい。序列が最下位の新血種族の女性なんて、いくら頑張っても等級は上がらず、最低賃金未満の給料しか与えられない。私が研究所に赴任してきたとき、人事部の人間が『あいつの給料は、豚の血でいい』って馬鹿にしてるのを聞いた。あんなこと二度と言わせない」
　以前、彼女が冗談めかして言ったことが真実だったと知り、バートは言葉を失うほどの衝撃を受けた。

カイエは情熱を秘めた朱あかい瞳ひとみで、砦とりでの向こうに横たわる闇やみを見つめる。
「何百年も続いてきた差別は、簡単には解決しないって分かってる。人間上位の階級社会に、民族分離を正当化する悪しき州法。政府は『民族融和』と言うけど、融和なんて無理よ。だから……私はただ、人間が私たちを認めてくれるようになればいいと思ってる」
目の前にいるのは、いつものドジで朗ほがらかなカイエではない。細い身体からだで新血種族の命運を背負い、未来を切り開かんとする聖女だ。
「だから、私は人間に対して壁を作らないように心がけてるの。こちらが壁を作れば、当然相手も壁を作る。それでは差別は打ち破れないもの」
すると、カイエはバートに目を向け、小首を傾かしげる。
「あなたの場合、最初から、不思議と壁がなかったけど」
返答に困ってしまう。バートの場合、壁を作るような、偉そうな態度を取ることが苦手なだけだった。
カイエは立ち上がって墓地のほうへ一歩進み、松たい明まつの灯火が英霊たちの魂のように揺らめく闇やみに向かって、強く語る。
「私はイリナを見て、世界は変えられると確信した。イリナが私に勇気をくれたように、私も新血種族のみんなに希望を与える。決めたの。この星の最下層に生まれた私にだって、月に手が届くことを見せてやるって」
天に浮かぶ三日月に、まっすぐな視線を送るカイエ。
「だから、月着陸計画が中止になったら困るの。私の夢が叶わなくなるから」
そう言うと、カイエはバートを振り返り、溢あふれそうになる気持ちを押し殺すかのように、哀かなしげな苦笑いを浮かべる。

「あなたに愚ぐ痴ちをぶつけても、意味ないよね。ごめんなさい」
「いや……こっちこそ、何も知らずに、ごめん……」
　彼女の切なる願いに、バートは身を切られる。だが、気がかりなことがあった。トイレで聞いた、ガラの悪い輩やからの非難だ。事実を告つげて傷つけたくないので、婉えん曲きよく的に伝える。
「でも……君の想いを知らない新血種族からすると、人間に媚こびを売ってると見られたりするんじゃないか……？」
　するとカイエは、当然とばかりに頷うなずく。
「嫌う者がいるのは知ってる。そもそも、父がそうだから」
「え……？」
　バートは次の言葉を待つが、それっきり黙り込んでしまった。
　静寂を破るように、トランペットの音が鳴り響く。共同墓地で、陽気な演奏が始まった。
　するとカイエは額にかかった前髪をそっと払い、寂しげに言う。
「……父のことは、なんでもない。ただの親子喧げん嘩か。忘れて」
　カイエはうつむき、唇を噛かみしめる。家庭で何かあるのかもしれないが、バートは彼女とそこまで親しい仲ではないので、触れにくい。そして話しかけられずにしばらく演奏を聴いていると、カイエはふっと顔を上げる。
「あの……今言ったこと、秘密ね。宇宙が嫌いとか、研究所の人に知られたら風当たりが強くなるもの。あなたに教えたのは―そう、パートナーとして誤解されてると困るし……それに、この街で不用意に宇宙について口にして、子どもやみんなに嫌われてほしくないから」
「……分かった。教えてくれて、ありがとう」
「うん……」
　カイエはホッと頬ほおを緩ゆるめた。
　だが、バートは彼女の表情に、そして彼女の語った言葉に、どこか違

和感を覚えた。もちろん、出会って間もない人間に対して正直に心の内を明かしてくれるとは思わない。しかし、本心を教えてくれていたはずの彼女に、言葉と心が乖かい離りしているような印象を抱いた。

けれども、これ以上追及すると今まで築いてきたものが壊れてしまいそうで、かといって気の利いたことも言えず、口をつぐんだ。

「はぁ、お腹なか空いた。もう帰りたいけど……まだここにいなきゃいけないもんね」

うんざりと苦笑するカイエは、望遠鏡を覗のぞき、消え入りそうにつぶやく。

「……どうして、月なんて目指すんだろう……馬鹿じゃないの」

──月なんて、大嫌い。

あの一言が、バートの心を掻かきむしる。

カイエだけではない。ジェニファーも、政府も、そして大衆も、皆、宇宙に夢なんて見ていない。同じ月を見ているのに、まったく想いが違う。

自分は、世間知らずの夢想家なのだろうか。

隣にいるカイエは静かに天体観測をしている。耳にかけた髪がはらりと落ちるが、かけ直さずに宙そらを見続ける。

彼女は何を見て、何を想うのか。

愁いを湛たたえた横顔からは想像もつかない。

バートは外していたメガネをかけて、夜空を見上げる。

目前に迫った軌道飛行が成功しなければ、宇宙開発競争は敗北に終わり、すべては潰ついえる。広告塔は批判の的となり、カイエの夢も、自分の夢も散る。

だが、いくら成功を目指しても、国家規模の宇宙開発は一職員の力でどうにかなるものではない。だが、「豚の血を飲ませればいい」と人事部が言うような、恥ずべき環境は変えたい。教会の子どもたちに、笑顔

で望遠鏡を覗いてほしい。

　──ああ、太陽が沈むとき──神よ、私を月へ導いてください──

　新血種族たちの陽気な歌声が、この星の底辺から、いつまでも響いていた。

朱の瞳　Ｖｅｒｍｉｌｉｏｎ　ｅｙｅｓ

　収穫祭翌日の夜、カイエはひとりで共同墓地に来ていた。
　葬送の歌を聴いているうちに、子どもの頃の記憶がまざまざと蘇よみがえった。そして、つい言わなくていい話をバートに言いそうになってしまった。
　庭で摘んできた月下美人の花を、カイエは墓に供える。
　リベルテ・スカーレット。
　自由Libertéの意味を持つその名は、カイエが子どものときに亡くなった、愛する母の名だ。

　今のカイエがあるのは、誰よりも、母のお陰だった。
　リベルテは人間居住区で清掃員の仕事をしていたが、早くからカイエの記憶能力と数学の才能に気づき、月げつ影えい区くでは手に入らない本をゴミ置き場から秘密で持ち帰っていた。
　教科書、工学書、科学書、古今東西の小説、大量の古新聞。
　カイエはどんどん記憶し、吸収していった。おもしろいものは何度でも読み返し、想像してドキドキした。
　リベルテは口癖のように、「新血種族に足りないものは教育と教養」

と言う。
「この街から大学に行った者はいないわ。でも、前例がないなら、カイエ、あなたがやればいいのよ」
「私が……？」
「そう。あなたには、世界中の誰にも負けない、とても素晴らしい能力があるのだから」
　他者と違う映像記憶の能力を、カイエは嫌だと何度も思った。新血種族というだけで人間から疎うとまれるのに、新血種族の同級生からも特異な存在として距離を置かれ、世界のどこにも居場所がない気がしてしまった。
　だが、母の励ましで、自分を肯定できた。父も、カイエの学費を捻ねん出しゆつするために、睡眠時間を削って必死に働いた。
　眠る前に、リベルテはカイエの頭を撫なでながら、優しく語る。
「あなたが歩いたあとに、歴史は作られるの」
「歴史……？」
「そう。これからの世の中は、知性を武器に闘うのよ。野蛮な暴力は、もう過去の手段。だから、あなたが先頭に立って、この国の歴史を変えてみて。……難しいかな？」
　リベルテは悪戯いたずらっぽく片目を瞑つむる。
「難しいけど、やってみる」
　カイエも真ま似ねして、片目を瞑る。
　そんなリベルテだが、学問の知識はないので、カイエに勉強を教えはしない。教えたことは、おしゃれについてだった。
　毎年夏になると、庭に咲く月下美人を使って、自家製のシャンプーや香水を精製し、ワイヤーとテープを使って生花の髪飾りをいっしょに作った。
　リベルテはカイエの髪に髪飾りを挿さして微ほほ笑えむ。

「月下美人の別名は、『クイーン・オブ・ザ・ナイト』というの。この高貴な花が似合うカイエは、月の女王様かしら？」
「ううん。お母さんが女王様で、私はお姫様よ」
「ふふっ、そうね」
　カイエと同じ銀色の髪をしたリベルテは「私たちは気高き血筋なのよ」とよく語った。代々伝わる指輪の青い宝石、ルーンヌィ・カーミェニは吸血鬼始祖オリジナルズの直系の証あかしだと。
「新血種族であることに誇りを持ち、いつも胸を張って、凛りんと生きなさい。人間からどんなにひどい言葉を投げつけられても、相手をしなくていい」
　いつも勇気づけてくれる母がカイエは大好きだった。
「指輪は、あなたが大人になって似合うようになったら、あげるからね」
　だが、それは叶わなかった。
「今夜はお仕事で遅くなるけど、絶対、外に出ちゃだめよ。おもしろそうな本が有ったら、拾ってくるからね」
　それが、カイエが母の笑顔を見た最後だ。
　その日──皆かい既き月げつ蝕しよくの夜。リベルテは路地裏のゴミ捨て場で心臓を撃ち抜かれた。
　容疑者に接触した州警察は「犬を噛かんでいた女が、いきなり襲いかかってきたから撃った」という証言を信用し、「吸血鬼症候群の発症者に対する正当防衛だった」として真剣に捜査しなかった。
　あの優しい母が人間を襲うわけがない。カイエは嘆いた。正当防衛ではない何よりの証拠は、母の指輪がなくなっていたことだ。父は「強盗殺人じゃないか？」と捜査を疑ったが、州警察は「指輪は落としたんだろう」と相手にしない。差別推進派の知事の支配下にある州警察は、人間の味方だった。諦あきらめきれない父は、独自に人間居住区で事件を

追っていたが、ある夜 [ソーラーフレア・クラブ] に襲われ、ひどい怪け我がを負った。
　カイエは人間を憎んだ。人間の大学を目指すことも迷った。
　しかし、母の言葉を胸に決意した。
　私は歴史を作るんだ、と。野蛮な暴力ではなく、知性を武器に。
　母の期待に応えるため、母の想いを成じよう就じゆさせるため、街の皆から支援を受け、父の反対を押し切って家を飛び出した。

　奨学生として入学した北部の高校では、新血種族はカイエしかおらず、「学校に来るな」と嫌がらせを受けた。試験の点数で負けた人間から、マスタードを振りかけられもした。何度も挫くじけそうになったが、愚かな人間の相手をしても無意味だと自分に言い聞かせ、胸を張った。そして実績を残すうちに、カイエの知性を純粋に認めてくれる人間も出てきた。
　そのとき出会ったのが、コンピューターだった。
　コンピューターなら、新血種族の命令でも聞いてくれる。
　これを武器として使いこなせば、夢はきっと叶う。

　―トランペットの高らかな音が夕闇やみに響く。今日も誰かの葬儀があるのだ。
　感傷に浸っていたカイエは目尻に溜たまった涙を拭ぬぐう。
　そして顔を引き締め、あらためて墓に向き合う。
「お母さん。私は、この国のイリナになるよ」
　失ってしまった青い宝石と同じものが、イリナの首飾りに輝いているのを見て、驚くとともに、自分の運命を強く意識した。
「見ててね……！」
　カイエの瞳ひとみが、鮮やかな夕陽を浴び、朱あかく染まる。

吸血鬼始祖オリジナルズの血を色濃く引いた、血の赤に。

第四章　ハリケーンの夜に

青の瞳　Ｂｌｕｅ　ｅｙｅｓ

九月に入っても灼しやく熱ねつの太陽は衰えず、ギラギラと燃え盛る。

かたや、連合王国と共和国の関係性は凍りつくほどに冷えている。

八月半ばに有刺鉄線で行き来を遮断された旧大陸の都市は、一五〇キロメートルにわたるコンクリート壁の封鎖に増強され、連合王国軍からは大量の護衛兵が派遣された。睨にらみ合いの緊張が続く情勢において、宇宙開発競争は代理戦争の様相を呈ていしている。

その分ぶん水すい嶺れいとなる、連合王国初の有人軌道飛行まで、二週間を切った。

打ち上げ本番に向け、ＡＮＳＡの各部署は宇宙船の軌道や大気圏再突入、そして着水ポイントの詳細を詰めているが、各種数値の算出は困難をきわめた。

質量、重量、速度、時間、距離、摩擦。

データが少しでも変われば、計算はやり直しになる。

過密日程となり、Ｄルームに持ち込まれる書類も激増する。早朝からバスの最終便ぎりぎりまで仕事を続ける。

この切迫した状況を受けて、バートとカイエの広報活動にも変化があった。

これまで週末はイベントに参加してきたが、もし軌道飛行が失敗したら、すべては水の泡となる。そのため、打ち上げまではコンピューターの業務に集中することになり、外部での活動は一時休止と決定。所内で働く姿を『リヴィン画報』のみが特例で撮影する形になる。

収穫祭の夜にカイエの切なる願いを知ったバートは、口には出さないが、これまで以上に張り切っている。

ＦＯＲＸフオークスを使いこなすまでには至らないが、何が記述されているのかは、ある程度は理解できるようになった。ミスを犯すこともなく、連日のパンチカード運搬で、知らぬ間に体力もついた。

カイエはコンピューターからはじき出される膨大なプログラムと計算結果をすべてチェックし、もしもエラーがあれば迅速に対応する。

軌道飛行の成否は、計算結果だけでなく、ロケットの部品ひとつひとつにもかかっているが、Ｄルームが取り扱う業務においては順調に進んでいた。

──そんなときだった。

「おかしい」

計算結果と睨み合っていたカイエが、納得いかぬように髪をもしゃもしゃと掻かき乱す。

「おかしい。おかしい。絶対におかしい。どうしてこんな結果になるの」

何事かと、室員が集まる。

「エラー……？」

ミアが訊たずねると、カイエは依頼書を皆に晒さらすように掲げる。

「エラーじゃない。計算の依頼そのものが間違ってる。これでは、宇宙飛行士は地球に帰還できない」

その依頼は、オペレーション部門の職員が作成した、宇宙船の軌道に関わる重要なものだ。

「依頼が間違ってるって、どういうこと？」

バートの問いに、カイエは憤いきどおりを見せながら答える。

「軌道に関わるすべての計算は、一年前に私が通常業務外で作成した『技術調査報告書テクニカルノート』をもとに算出されるはずなの。で

も、これは違う。式をどう組み合わせても、こんな結果は生まれない」
　二五個の代数記号と七個の符号からなる分厚い報告書は、ロケット開発者のクラウス博士のお墨つきだという。
　カイエは自分のこめかみを指す。
「私は、これまで見てきた数式や計算をしっかり記憶してる。ロケットの質量から、摩擦係数、風洞実験の結果まで。だから、私の報告書をもとにした計算ならば、答えは同じになるはず」
「つまり……？」
「たぶん、私の報告書が……ううん、私を気に入らない人間が、自分の手柄にしようと、勝手にアレンジしたんでしょうね」
　室員たちが呆あきれてざわつく。無論、バートもほとほと嫌気が差す。ＡＮＳＡの職員は志を持って宇宙を目指すべきなのに、打ち上げ目前にして個人の感情を優先して動くなど、馬鹿げている。何よりカイエの想いを踏みにじるような行為は許せない。
「カイエ。デイモン部門長に言いに行こう。僕はその依頼書を作ったオペレーション部門の所属だ」
　申し出ると、カイエは口もとをほころばしたが、わずかに眉まゆをひそめる。
「いっしょに来てくれるのは嬉しいけど、ひとつ先に伝えておくね。もしかしたら、あなたに嫌な思いをさせるかもしれない」
「……ん？」
「私たち新血種族が人間の過誤を指摘すると、たいがい、相手は不愉快な顔で反論する。以前話したけど、アーロンさんの弾道飛行のときもそうだった」
　各部署が宇宙船の仕様を検討していた際、カイエはＤルームに持ち込まれた書類のミスを見つけた。その書類はエンジニア部門に属する著名な科学者が作成したものだったが、使われているデータが違っていた。

カイエがそのことを指摘すると、科学者は「私が間違っているはずはない！」と激げつ昂こうし、周りもカイエを一方的に悪者と決めつけて責め立てた。だが、検証の結果、カイエの指摘が正しいと証明され、打ち上げは無事に成功。当の科学者は謝罪せず、手柄も科学者のものとなった。当時、徴兵中だったバートは、兄の成功の裏にそのような争いがあったなど、まったく知らなかった。

　カイエは胸に手を当て、しみじみと言う。

「どんなに正しくても疑われて、最初から快こころよく受け入れられることは絶対にない。バート、あらかじめ理解しておいて」

「分かった……」

　バートは硬い微ほほ笑えみを返す。デイモン部門長に、泥ナマズと罵ののしられる姿を想像すると、怖おじ気け立つが。

　計算結果を手に、バートとカイエはオペレーション部門のオフィスへ乗り込む。そして、職員たちに訝いぶかしげな視線を向けられながら、冷厳な態度で腰掛けているデイモン部門長に過ちを説明した。

「……なるほど。うちの者が間違っていると言うんだな」

　予想どおり、デイモン部門長は疑いをぶつけてくる。

「では、もし、この数値をもとに打ち上げたら、どうなる？」

　カイエは強く言い切る。

「共和国に負けます」

　デイモン部門長は「ふむ……」と言ったきり、腕組みして瞑めい目もくする。

　計算依頼をＤルームに投げた職員は苛いら立だち露あらわにカイエを睨にらむ。

「部門長、コンピューターの計算が間違っているんですよ」

　彼はおそらく単純にカイエが気にくわないのだろうとバートは感じ

た。
　眉み間けんに皺しわを寄せていたデイモン部門長は深く唸うなると、腕組みを解く。
「この計算結果は、これはこれで、検討する」
　そして、バートとカイエを厳しく見据える。
「何時間あれば再計算し、数値とプログラムを提出できる？」
　しばしカイエは考えたのち、答える。
「四〇時間あれば」
　納得したように頷うなずいたデイモン部門長は、指を三本立てる。
「三〇時間だ。それ以上は待てない。その上で、どちらを採用するか判断する」
　リミットは翌日の夜──九月三日、午後一一時五九分。
　再計算するにしても、カイエの作成した技術調査報告書テクニカルノートの原本は手もとになく、職員から複製を借り受ける。すると、作成者であるカイエの署名を塗りつぶした跡があった。
「っ……」
　一瞬目を見張ったカイエは、キッと顔を上げ、足早に退出する。
　オフィスを出ると、バートはカイエに声をかける。
「ひどいな。ひどすぎるよ……」
　カイエは強がっているのか、くだらないと言わんばかりに髪をサッと払う。
「こんなの、よくあること。それに少なくとも、クラウス博士は私の名前を知ってくれてるから」
　署名の件もひどいが、リミットも気がかりだ。
「間に合うの？　一〇時間も短くされたけど……」
「間に合わせるの。今日は徹夜でお泊まりかな。冷房が効いてるから、家より快適で嬉しいかも？　ふふっ」

平然と笑うカイエだが、はらわたは煮えくり返っているはずだ。
「……僕に手伝えることがあれば、なんでもするから」
べつに、あの職員にバートがコケにされたわけではないのだが、見返してやろうという気持ちが湧わいていた。
Ｄルームに戻り、ミアたちに状況を伝えると、皆にやる気が漲みなぎる。「カイエさんの報告書を差し置いて、意味不明な計算を使うなんて許せない」と。そんな彼女たちには、軌道飛行が成功するか否いなかより、もっと大事なものがあるのだろうと、バートはひしひしと感じる。
「さて、みんな、頑張ろっ！」
そしてカイエはＡＣＥの棺ひつぎ型の筐きよう体たいに触れ、優しく撫なでる。
「酷使しちゃうけど、壊れないでね」
ヴィィン……と返事をするように、ＡＣＥは低い音を鳴らした。

Ｄルームの室員は通常の業務をしながら、軌道計算の修正に挑む。
カイエは無茶な量の作業を一手に引き受ける。山盛りの角砂糖をポリポリかじりながら、右から左へ、計算書類を流していく。休憩は数時間に一度、短く取るだけ。それ以外はひたすら作業をしている。彼女の傍そばで耳をそばだてると、静かな囁ささやきが詠唱のように聞こえる。

$$
\begin{aligned}
&\left\lceil t\left(\theta 2e_{-}\theta 1\right)=54.012\right. \\
&\Delta \lambda 1_{-}2e=-198.808 \\
&\theta 2e=-260.863 \\
&t\left(\theta 2e\right)=66.996 \\
&\left.\psi 1=201.203\right\rfloor
\end{aligned}
$$

彼女の頭には、無限の宇宙が広がっているのだろうか。

室員たちは雑談もせず、ソースコードやパンチカードと格闘し、ＡＣＥがガチャガチャと数値をはじき出す。所内で新血種族しか知らないＦＯＲＸフオークスの魔法が、難解な数式をつぎつぎと解いていく。

皆で食堂に行く余裕もなく、室内でもっともコンピューターに疎うといバートが進んで買い出しに出る。人間が新血種族の使いっ走りをするなど、もし [ソーラーフレア・クラブ] に知られたら殴なぐられるかもしれないような所しよ業ぎようだ。

Ｄルームに送り込まれて一か月。買い出しに雑用、パンチカードの運

搬と、まるで便利屋だが、それでも宇宙計画の一員である歓びを感じる。初日に「アーロンの弟」と連呼されたオフィスよりも、よほど居い心ごこ地ちがいい。

　売店のラジオから、天気予報が流れている。

《──近海で発生したハリケーンは、明日の夕方から深夜にかけて直撃する見込みです。残念ながら、皆かい既き月げつ蝕しよくも雲に覆おおわれるでしょう》

　あまりに忙しくて、皆既月蝕などすっかり忘れていた。

「まあ、今回見られなくても、また見られるしね……」

　バートはハンバーガーやポテト、スナック菓子に加え、店員に怪け訝げんな顔をされるほど大量のケチャップとハバネロソース、そして角砂糖を買い込み、ラウンジに置いておく。

　Ｄルームに戻る途中、バートがトイレに寄ったところ、新血種族の男性にばったり会った。だが、もう以前のようにビクビクしない。どうやら彼も、人間だらけのエンジニア部門で居場所がないらしく、ふたりはいつの間にか互いに親近感を抱いていた。

　手を洗いながら、他愛ない会話を交わす。

「バートさん。収穫祭で打った鼻は、もう大丈夫なんですか？」

「さすがに治りましたよ。ところであなた、共同墓地の葬儀で激しく踊ってましたよね？」

「あっ……見てたんですか。アハハ……」

　微妙な距離感だが、息抜きで話すにはちょうどいい関係だった。

　ガリガリガリ！　夜更けのＤルームに異音がこだまする。この期に及んで、カードリーダーは「かまってくれ」と言わんばかりに紙詰まりを繰り返す。

　不眠不休で作業している室員たちは「あー……」「またぁ……」と漏

もらす。皆の集中力が途切れ、あくびや溜ため息いきがさざ波のように広がる。
「僕に任せて」
　即座にバートが紙詰まりを直すと、カードリーダーはご機嫌な音を立てて動き出す。
　コンピューターは人間を遙はるかに凌しのぐ能力を持っているというのに、ときどき馬鹿みたいにポンコツで、親しみすら湧わいてしまう。
　まるでカイエだな。
　黙々と方程式と闘う彼女の背中を見て、バートはふっと笑う。
　と、その刹せつ那な。カイエは計算書類をめくる手を角砂糖の入った皿に当て、床に落とした。ガシャンと大きな音がしたにもかかわらず、彼女は微動だにせずに、計算を続けている。おそらく脳のすべてを数式の処理に使っているのだろう。
　しかし、見ている方が心配になるほど、カイエは作業に没頭している。最後にしゃべったのは数時間前。「大型ハリケーンかぁ……」と呟つぶやいたきり、数字の海に潜りっぱなしだ。
　バートは角砂糖を拾いながら、カイエの様子を窺うかがう。
　凛りんとした美しい横顔は、疲労を微み塵じんも感じさせない。朱あかい瞳ひとみは数式をつぎつぎと射抜き、手にしたペンで数値を斬きりつける。その姿は、人間や新血種族という括くくりを超越するほどに気高く、そして孤高だ。
　科学者、技術者の理想を、バートは彼女に見る。いつか、この域に達せるのだろうかと。
　建物の地下、宇宙から遠く離れた場所。
　窓もなく、太陽や月の光は届かない。
　時計を見なければ、夜が更けたことも、朝が来たことも分からない。
　接近しているハリケーンも、この部屋には気づかない。

空気は冷え切り、無機質な棺ひつぎが立ち並ぶ。
人間は近寄るのを躊ちゆう躇ちよする、墓穴のような薄暗い空間。
だが、ここには確かに、この世界で正当に生きようと情熱を燃やす者たちがいる。こここそが、宇宙開発の最前線だ。

刻一刻と時間が過ぎ、三日の午後六時となる。ラウンジに行く時間も惜しくなり、バートは出入り口の脇に簡易的な軽食コーナーを作った。糖分補給用にクッキーや角砂糖を置き、眠気覚ましにもなるハバネロソースや、カイエのためのケチャップも用意した。
コンピューターは相も変わらぬ速度で稼働し続けているが、室員たちは疲労困こん憊ぱいだった。バートも例外ではなく、目も腰も肩も限界だ。
そんな中で、カイエだけは疲れを知らぬように、食事もせずに、ひたすら処理を続けている。軌道飛行再計算の進しん捗ちよく状況は彼女だけしか分からず、バートや室員たちは不安だった。
「……大丈夫かな？」
パンチカードを入れ替えながらバートがミアに訊たずねると、ミアは眠そうな目をこすり、フワァとあくびで返事をする。
「カイエさんなら、大丈夫……」
すると。
「はぁー……」
いつ以来か、カイエが声を発して、大きく伸びをした。そのままの姿勢でぼんやりと時計を見て、「午後？　午前？」と首をひねっている。
「午後だけど……」
バートが声をかけると、カイエはハッと振り向き、表情を緩ゆるめる。
「間に合いそうだよ」

　室員の皆に安あん堵どの笑みが広がる。
「ハリケーンが通過する頃には終わるかな？」
「……はりけーん？　なんだっけ……」
　カイエはこめかみを指でくりくりと揉もんでいたが、いきなり
「あっ！　ハリケーン！」と椅い子すをがたつかせた。
「あとは私だけでもできるから、みんなは帰っていいよ」
　カイエの提案に、皆はエッとなる。
「ハリケーンの影響でバスが運休するかもしれない。そうなったら帰れなくて、困るでしょ」
「でも……」
　室員たちは渋るが、カイエは頑かたくなに首を横に振る。
「雨や風で家が壊れたらどうするの？　仕事よりも家庭を大事にして。大切な家族といっしょにいて。これは室長命令です」
　室員たちが黙っているので、バートはカイエや皆に告つげる。
「僕はバイクで帰れるし、残るよ。そもそもオペレーション部門の仕事だし。雑務があれば、なんでもやるから」
　カイエが乗っかる。
「彼がいれば、私は計算に集中できるし、大丈夫。ほら、私の家も洪水が心配だから、誰か気にしてくれたら嬉しいな。ね？」
　説得しても無駄だとミアたちは判断したようで、不ふ承しよう不ぶ承しよう、頷うなずく。
「分かりました。カイエさん、気をつけてくださいね」
「うん。じゃあ、また明日。『労働者の祝日レイバー・デー』だけど、出勤お願いね」
　ミアたちが退室するのを見送ると、カイエは嬉しげに目を細めてバートに言う。
「ありがとう。こんな日に残ってくれて」

「当たり前だよ。デイモン部門長に認めさせなきゃ」
　彼女の努力の結晶を無駄にするわけにはいかない。なにがなんでも、絶対に採用してもらわねば。
「ふぅ……残りちょっと。頑張ろうね、バート……」
　ほかの室員がいなくなって気が緩んだのか、カイエが急に疲れを見せた。それでもいっさい休まずに作業に戻ろうとする彼女はふらふらしていて、バートは心配になる。
「ずっと食べてないでしょ。何か口に入れた方がいいよ」
「……うん……そうする……」
　カイエは軽食コーナーに行くと、角砂糖にケチャップを大量にかけて、口に入れる。
　相乗効果でもあるのだろうか、すごい食べ方だなとバートが目を点にしていると、カイエはしばらくして突如顔を歪ゆがめ、舌をうぇーっと出した。
「うぇぇ……きもちわるい……私、何食べたの……」
「これが終わったら、ゆっくり休もう……」
　居残って正解だったと、バートは心から思った。

　カイエはふたたび集中し、プログラムの確認に入る。バートは雑務の処理など、サポートに徹する。パンチカードの運搬に行ったついでに窓の外を見ると、上陸したハリケーンが猛威を振るい、神の怒りのような暴風と豪雨で窓ガラスが割れそうなほどだ。
「オフィスに行く頃には、弱まっててほしいけど……」
　ともかく、あと数時間だ。
　Ｄルームに戻ると、カイエの作業を手伝う。
　会話はなく、ＡＣＥの稼働音や、ペンで書き記す音だけが静かに響

く。
　角砂糖が減るとこっそり補充し、コーヒーは舌を火傷やけどしないように冷まして、こぼさないように手のぶつからない場所に置く。
　そして、リミット約三〇分前の、午後一一時三〇分──
「……終わったぁ……」
　すべての作業を終えたカイエは、電池が切れたように、ふにゃっと作業机に突っ伏す。
「お疲れ様！」
　傍そばで見守っていたバートが声をかけると、カイエは両りょう頬ほほをペチペチと叩たたいて目を醒さます。
「報告に行きましょう……！」
　ひと息つきたいところだが、早い方がいいだろう。オペレーション部門に電話をかけてデイモン部門長の在席を確認すると、ふらーっと力なく歩くカイエを気にかけつつ、足早に向かう。

　外に出ると、風雨はずいぶん弱まっている。だが夜空はまだ分厚い雲に覆おおわれ、月明かりは地上に届かず、敷地は薄暗い。帰宅した職員も多いらしく、各棟のライトはまばらにしか点ついていない。仕事がなかったとしても、皆かい既き月げつ蝕しよくは見られなかったかもしれないと思った。

　オペレーション部門のオフィスでは、デイモン部門長がひとり、コーヒーと煙草たばこを喫のみ、残業をしていた。
　バートとカイエの姿を見たデイモン部門長は無愛想に頷うなずき、ファイルを受け取る。
「ご苦労。検証し、必要があればまた連絡する」
　ねぎらいの言葉もほどほどに、自分の仕事に戻ろうとする。

　あまりにも素っ気ないので、バートは念押しの確認をする。
「カイエの出した数値を、軌道飛行に採用してもらえるんでしょうか」
「私は、クラウス博士が認めた技術報告書に基づくべきだと判断する」
　つまるところ、カイエの数値を使うが、それはあくまでもクラウス博士の見識を重視するという言い方だ。カイエの反応を窺うかがうと、疲労のピークなのか、少しつらそうに額を押さえている。そんな彼女に代わって、バートはデイモン部門長に意見する。
「彼女は、兄の飛行のときも、過ちを指摘したと聞きました。もっと正当に評価されてもいいのではないでしょうか……」
「正当とは？」
　ジロリと威圧され、バートは声が小さくなる。

「たとえば……カイエを『プロジェクト・ハイペリオン』の科学技術職員として迎え入れて、会議に参加してもらうとか……」
「軌道飛行すら成功していないのに何を言っている？」
「す、すみません……」
　デイモン部門長は煙草たばこに火を点つけ、黒板の上部に書かれたスローガン『ビート・ザ・ブラックドラゴン』を顎あごで指す。
「共和国を倒すためには、カイエ・スカーレットのような駒は必要不可欠だろう。しかし、私はハイペリオンの責任者ではない。彼女の未来は成果と実績で決まる。そしてバート。お前は、他者の未来を語る前に、自分の足もとを見ろ」
　意見は徹底的に撥はねのけられた。
「さあ、行け。私はやることがある」
　追い出されるように、オフィスをあとにする。
　エレベーターが来るのを待つあいだも、カイエはひと言もしゃべらない。
　ふと冷静になって考えると、カイエを推薦したのは独りよがりだったのではないかと、バートは少し胃が痛む。任務を達成したせいで、テンションがおかしくなっていたのかもしれない。
　そしてエレベーターに乗り込むと、ますます気まずい沈黙が満ちる。
「……ねえ、バート」
　カイエが五分ぶりくらいに口を開いた。
「……さっきの、ハイペリオンの件だけど……」
「あ、あ。ごめん、つい……カイエなら、技術者として良いポジションに就ついて当然なのにとか思ったら口が勝手に……その、カイエが望んだみたいに思われたかも、ごめん……」
　しどろもどろに早口で答えると、カイエは口を尖とがらせる。
「ほんと、そうだよ」

　失言で死にたくなる。
「ごめん。ほんと、ごめん。ほんと……」
「でも、すごく嬉しかった。ありがとう」
　牙きばを見せてニーッと微ほほ笑えむカイエ。
　上げられたり下げられたり、胃がどうかなってしまいそうだ。

　Dルームへ戻る途中、夜風に吹かれながら、バートはカイエに問う。
「僕は、バイクで帰るけど……カイエは？」
　もうすぐ日が替わる時間で、バス便はとっくに終わっている。
　カイエは元気のない声で答える。
「帰れないし、床で寝るつもり……。ねえ、食べ物って残ってたっけ？」
「いや、砂糖と調味料しかない……」
「ハァ……そっかァ。もう売店、閉まっちゃったよね……」
　酒場なら開いているが、人間以外を連れて行くのは厳しい。確実に酔っ払いにからまれる。
　ピュウッと風が横なぐりに吹きつけると、カイエはフラッとよろめく。
「おっとと……」
　彼女を残していくのが心配だ。全然眠っていないし、砂糖とコーヒーしか口にしていない。コンピューターならば電気を供給すれば問題ないが、彼女は機械じゃない。ゆっくり休まないと、身体からだがもたないだろう。
　バイクで送って行こうかと、バートは迷う。収穫祭の会場までなら道も分かる。誘って断られたら恥ずかしいが、風に弄もてあそばれている彼女を見ると、いてもたってもいられない。
「途中まで、バイクで送ろうか……？」

「え？」
「……二人乗り。後ろに乗ってく……？」
　目線を逸そらしてモゴモゴしてしまう。
「んー……」
　カイエは人差し指を頬ほおに当てて考えていたが、「うん」と頷うなずく。
「……家も心配だし、お言葉に甘えちゃおっかな……？」
　受け入れてもらえてホッとすると同時に、気恥ずかしさがドッと湧わく。ハリケーン直後の真夜中で人通りも少ないだろうし、誰かに騒がれたりはしないだろうが。

　駐車場に停めたバイクにバートが跨またがると、技師用のヘルメットを被かぶったカイエが後部シートに跨がる。
「乗ったことないんだけど、こんな感じ？」
　バートの脇腹に、カイエの手が撫なでるように置かれる。くすぐったくてビクッとなる。
「ひっ！　ダ、ダメッ！」
　正しい乗り方を指示する。カイエはスカートがまくれ上がらないように座り直し、遠慮気味にバートの腹部に両手を回し、腿ももに力を入れ、落ちない姿勢を取った。
　女性との二人乗りなど初めてで、服の生き地じ越しに彼女の体温を感じ、ドキドキする。
「ちゃんと掴つかまって、ジッとしててよ。水着撮影のゴムボートのときみたいに転んだら最悪だから。それから、眠って落ちないでね……？」
「ううん、なんか緊張しちゃって、眠気が吹き飛んだくらい」

サイドミラー越しに見ると、カイエは頬を染めて、はにかんでいる。
高鳴る鼓動を誤ご魔ま化かすように、エンジンを吹かす。
「じゃ、行くよ」

雨水で濡ぬれた路面がヘッドライトの光を反射する。風はまだ強く、森がざわざわと音を立てる。生温かい空気が頬を撫でる。いつもより涼しいのは、街に溜たまっていた熱気が流されたからだろう。
車通りはまったくない。この夜更けに研究所方面に向かう対向車はなく、遙はるか後方を走る車のヘッドライトがチラリと見えただけだ。
カイエはひと言もしゃべらず、眠ってしまったのではないかと心配になるくらい静かだが、時折、指を組み替え、腿ももがもぞもぞと動くので、起きているのは分かる。
赤信号でブレーキをかけると、バートの肩や背中に、カイエの身体からだがふわっと当たる。首もとを柔らかな髪にくすぐられ、背中に触れたのは胸だろうか、などと考えると顔が火ほ照てって汗がジワジワ出てくる。
落ち着くために、慣性の法則、慣性の法則と頭の中で呪文を唱える。
「ねえ、バート……」
低い声でカイエが囁ささやいた。
「な、なに？」
邪よこしまな気持ちがバレたのかと焦る。
「この先、いつまでDルームにいるか決まってるの？」
違った。
「決まってないけど……どうして？」
「さっきデイモン部門長には、私の将来について言ったのに、あなた自身のこと、何も言わなかったから」
「だって、君みたいな実績はないし、『ハイペリオンに参加したい』な

んて言ったら、どやされるよ」
「……でも、そのうち、オペレーション部門に戻るんだよね」
「んー、どうだろ……」
　先のことは分からないので、言葉を濁にごす。
　信号が青に変わり、バイクを走らせる。
　少し間を空けて、カイエが小さな声で何か言う。
「……私は―」
　だが、バイクの走行音にかき消された。
「ごめん、うるさくて聞こえない」
　するとカイエはバートの耳もと近くに顔を寄せた。
「私は……あなたさえよければ、Ｄルームに残ってほしい」
「え？」
　意外な言葉にドキリとした。だが、運転中で振り向くわけにもいかないので、サイドミラー越しに彼女の言葉を受け止める。
「宇宙と関係ない雑用ばかりさせてしまって、とても申し訳ないと思ってるけど……私も、みんなも、あなたに助けられてるから」
　これまでの人生で誰かに頼られた記憶などないバートは、胸に歓びが満ちる。カイエはバートの肩に顎あごを置く姿勢になり、互いのヘルメットがコツンと当たる。
「あなたのいないところで、みんなとあなたの話をしたときでも、悪い意見はひとつもないの。もちろん、あなたは残るのイヤかもしれないけど……」
　バートは顔を少しだけ彼女の方に傾ける。
「イヤじゃないよ。確かに……男ひとりっていうのは肩身が狭いけど……僕は、君みたいな技術者になりたいと思ってるし」
「私みたいな……？」
　耳もとに柔らかな吐息がかかり、こそばゆい。

「昨日、今日と、君が業務に打ち込んでいる姿をずっと見ていて、本当に感心したんだ」
「そんなに、見てたの？　恥ずかしいよ……」
　照れたようにカイエは顔を離して、うつむく。
　それ以降、彼女は話しかけてこなくなり、バートは運転に集中する。
　涼しい夜風が心ここ地ちよく、カイエを乗せて走っているのもなんとなく気分がよくて、少しだけ遠回りしたくなるが、明日も仕事があるのだからと己を諫いさめて、月げつ影えい区くへの最短ルートを進む。
　以前 [ソーラーフレア・クラブ] を目撃したミジービ川沿いの林道を走り、真まっ直すぐに橋に向かう。道路のそこかしこには水たまりがあり、車輪の跳ね上げる水でカイエのスカートを汚さないように注意して、少しだけスピードを緩ゆるめる。
　橋が遠目に見えたとき、ゴオオと鋭するどい突風が林をくしけずった。
　木々から水滴が降り注そそぎ、闇やみに潜ひそんでいた何百匹ものコウモリがいっせいに飛び立った。天を覆おおう黒雲は、コウモリの大群に浚さらわれるように流れ、そして雲の切れ間から、赤銅色の満月が姿を現す。
　皆かい既き月げつ蝕しよく―血染めの月ブラツド・ムーンだ。
「見て―」
　と、バートは言いかけて、慌あわてて言葉を呑のむ。彼女が月を嫌っていることを失念していた。
　すると、腰に回されていた彼女の手が、いきなりビクッと跳ねた。
「止めてっ！」
「!?」
　鼓膜をつんざく叫びに、バートは慌てて急ブレーキをかける。水飛沫しぶきをあげながら停車した瞬間、カイエは後部シートを飛び降りる。

「どうした……!?」
　何事かとバートが焦ると、カイエはヘルメットの下から怯おびえた顔を覗のぞかせる。
「ちょ、ちょっと……その……」
「なに？」
「お……お腹なか痛い……トイレ……先、帰っていいよ……おやすみ……」
　カイエはヘルメットを置くと、吐き気を我慢するように口に手を当て、よろめきながら、鬱うつ蒼そうとした道の脇の林へ入っていく。
　バートはバイクに跨またがったまま、呆ぼう然ぜんと見送る。
　カイエの去った林の奥には深い闇やみが横たわり、無数の蛍の光がゆらゆらと漂っている。
「トイレって……？」
　確かに、カイエはずっと部屋に籠こもって作業をしていたが。とはいえ、様子がおかしい。だがしかし、トイレと言って去った女性を追いかけるのは、気が引ける。
　小考し、首を横に振る。
「いや……追いかけるべきだろ……」
　恐怖心が身体からだに満ちるが、もし、ガラの悪い連中が林に潜ひそんでいて、無防備なカイエを見つけたらと考えると、ほうっておけない。
「行こう……」
　バイクのヘッドライトで照らして進もうと試みるが、木々が密生し、地面は根や石でごつごつしており、難しい。諦あきらめて、月と蛍の光を頼りにカイエを追う。
　樹上から垂れ下がる灰緑色の葉から、雨水が滴したたり落ちる。暴風に負けたイチジクの果実があちこちに転がっている。足もとはぬかる

み、油断すると滑りそうになる。暗い獣道には蛍の光が小さな星のように瞬またたく。

　細い枝が頬ほおを突く。

「痛っ……」

　彼女が去ってから五分も経っていないので、まだ近くにいるはずだが、気配はない。

「カイエ！」

　かなりふらついていたのに、こんな暗闇を自由に歩けるとなると、彼女には吸血鬼の暗視能力が残っているのだろうか。

「どこに行ったんだ……」

　闇の奥で枝葉の擦こすれる音がするが、カイエか動物かは不明だ。獰どう猛もうな生き物が出てこないことを祈りながら、蛍の儚はかない光に導かれ、先へ進む。あまりにも静かで心細くなってくるが、怯おびえる心を奮い立たせて足を動かす。

　そして数分後。木々のあいだから見える月が、徐々に血色を失い始めた頃。

　森の長老のようなオークの木の根元に、小さくうずくまっている影を見つけた。バートに背を向けているので判別しにくいが、蛍の明かりに照らされる銀髪は彼女に間違いない。

「カイエ？　大丈夫？」

　呼びかけても、振り向かない。

　カイエは顔を隠す体勢で右肘ひじを抱え、泣いているのか、かすかに震えている。バートは訝いぶかしみながら、ゆっくり近づく。

「おーい……」

　回り込んで、カイエの顔をそっと覗のぞき込む。

「っ……!?」

　それを見た瞬間、全身の血が引いた。

悲壮に沈んだ表情のカイエは袖そでをまくり上げ、自分の上腕部に噛かみつき、柔肌に牙きばを突き立てている。白く細い腕に鮮血が流れる。

「な……」

脳が潰つぶれるほどの目め眩まいに襲われ、バートは腰から砕け、尻しり餅もちをついた。

吸血鬼。

「□□」

本能的な恐怖に貫かれ、身動きできない。

襲われるかと一瞬覚悟したバートだったが、カイエはバートが目に入っていない様子で、朱あかい瞳ひとみは暗く揺れている。一筋の涙が頬ほおを伝い、口もとに付いた血をかすめる。

「カイエ……」

どうして、泣いているんだ。

自失しているカイエは、腕に当てていた口を力なく離す。ゆらめく蛍の群れが、深紅に染まった袖そでを、血で汚れた牙きばや唇を、どこか幻想的に照らす。

怖いはずなのに、なぜか、怖くない。震えて縮ちぢこまり、涙をこぼしている彼女は、まるで捨てられた仔犬のようで。

見られたくなくて、逃げたのか。

永遠とも思える時間が過ぎ、木の上に浮かんでいた赤い月が銀の輝きを取り戻す。すると、カイエの瞳ひとみにも、失われていた光が蘇よみがえる。

「……あれ？」

カイエは今の状況が理解できないのか、キョロキョロしてバートに目を合わせる。

「バート……？」

「君は……その、それ……」

努めて冷静にしようとしたが、隠しきれない動揺が声に出てしまう。

「ん……？」とようやく異変に気づいたらしいカイエは、血で汚れた右腕を見て、口もとを拭ぬぐうと、みるみるうちに顔が青ざめる。

「いやっ……！」

カイエは口を手で塞ふさぎ、慌あわてふためいて林の奥へ走り出すが、すぐによろめき、木の根に足をひっかけて転ぶ。その拍ひよう子しに、枝にスカートがひっかかり、裾すそが破れた。

「っ……」

地べたにへたり込んだカイエは、そのまま動かない。

「カイエ……」

バートは立ち上がり、ゆっくりとカイエに近づく。

「君は、もしかして……」

「なんで……！」

カイエは両腕で自分の身体からだを抱きしめ、悲痛な叫びを上げた。

「来ないでって言ったのに、どうして来たの……！」

「い、いや……何かあったら大変だと思って。それに、まさか……」

血を吸っているとは思わなかった。

ふたりのあいだに重苦しい沈黙が流れる。

薄暗くて見にくいが、出血はそれほどでもないようだ。

バートはどんな言葉をかけていいのか迷い、傍そばで立ち尽くしていると、カイエはわずかに振り向き、不安に満ちた横顔を見せる。

「……私が、怖くないの……？　吸血鬼症候群だよ……」

「……怖くないと言ったら、嘘うそになる。でも今は、とにかく君の話を聞きたい……」

正直に伝えると、カイエは物憂げに頷うなずき、身体を支えながら近くの倒木に腰掛ける。

「ちょっと休みたいから……ここで座って話す……」

カイエは噛かんだ右腕とは逆側に、バートに座るように促す。

「もう平気、なのか……？」

「うん。一度、血を口にすれば落ち着くから。まだ頭がくらくらするけど……」

バートが倒木に腰を下ろすと、カイエは夜空を見上げる。

「発作が起きたのは、血染めの月ブラツド・ムーンのせい……」

「聞いたことがある。月げつ蝕しよくの日は吸血事件の発生率が高いって……」

カイエは静かに頷うなずくと、腹部に両手を当てる。

「真紅の月光を浴びると、身体からだの奥から血を渇望する衝動がつきあげるの。いつもは注意して、光を遮さえぎるために、家に閉じこもってるんだけど……今日は作業に集中しすぎて、月蝕を忘れてた。それに寝てないし、空腹で、体調も悪かったから、余計に……」

言葉を切ると、彼女は身体を丸めて、深く息を吐いた。

この細い身体に、新血種族という種族の将来、宇宙開発の重責、そして吸血鬼症候群まで抱えているなんて。

小さくなっている背中をさすってあげたくなるが、手を伸ばす勇気はなかった。

するとカイエは顔を上げ、もじもじする。

「……ごめん。なにか口に入れないと頭が回らなくて。そこに落ちてるイチジク食べながらでいい……？」

泥で汚れていないイチジクを拾い、皮を剥むこうとするカイエ。だが、手が震え、上う手まく剥けない。

「貸して。剥くよ」

カイエから受け取ったイチジクを剥きながら、ふと、バートは、自分の血をあげたらどうなるだろうという危険な思いにとらわれた。噛まれるのは痛そうだが、彼女の牙きばが肌に食い込むところを想像すると、背筋がゾクッとなる。だが、もし提案しても、きっと彼女は断るし、ものすごく悲しむはずだという確信めいたものがある。

突然芽め生ばえた背徳的な気持ちを心の奥にしまい込み、ぬるぬるとした粘り気のあるイチジクの実を、カイエに手渡す。

「ありがとう……」

カイエはイチジクを少しずつ囓かじりながら、話を再開する。

「初めて発作があったのは、七歳のとき。月蝕を見てたら、知らないうちに自分を噛んでた。びっくりした両親に止められて、そのあとも同じことがあって。吸血鬼症候群の一種だと分かったの」

「でも、なんで、自分を噛むんだ……？　ニュースで流れる吸血事件は、家畜や小動物ばかりだけど……」

「理性があるうちに、自分の血を舐なめて、渇望を抑えるの。私たちは『吸血は悪いこと』って幼い頃から躾しつけられるし、倫理的にもダメだと分かってるから。ニュースで扱われる発症者たちは、理性を失ってしまった結果かな……」

カイエはつらそうに目を伏せる。一度は乾いた涙が、再び瞳ひとみを

潤うるませる。嫌な思い出でも蘇よみがえったのだろうか。
「大丈夫……？」
　心配して声をかけると、カイエはハッと目を開いた。
「あっ、ごめんね。ハァ……久々にやっちゃったから、頭も心もぐちゃぐちゃ……」
　傷ついた彼女を見ていると、これ以上詮せん索さくすべきではないとも思うが、今後もいっしょにいることを考えると聞かざるを得ない。
「ふだんの昼間とかは、全然平気なの？」
「ええ。ただ、発作中は記憶が曖あい昧まいで……皆かい既き月げつ蝕しよくじゃないときでも、知らないうちに自分を噛かんでるんじゃないかっていう怖さはあるの。だから、広報活動で『水着撮影』って言われたときはドキッとした。腕に牙きばの傷きず痕あとがあったらどうしようって……」
　カイエは血で汚れた右腕をそっとさする。
　その動作を見て、バートは水着の一件を思い出す。ジェニファーに水着を指示されたとき、カイエは上腕を気にしていた。あれは、太いとか細いとか、そういう問題ではなかったのだと勘違いに気づく。
「ミアたちは、発作について知ってる？」
「ううん、教えてない。人間に気味悪がられるのは当然として、新血種族のあいだでも、好意的に思われるものじゃないから。私みたいな発症者がいるせいで、人間に嫌われている部分もあるし……」
　人間のコミュニティーでも、ふつうと違う性質を持つ人は避けられがちだ。それが差別にかかわるものであれば、なおさら避けられるのだろう。
「私の発作について知ってるのは、子どもの頃に付き合いがあった住民だけ。両親や学校の先生は『頭が良くて変わった子』と肯定的に受け止めてくれたから、救われた……」

　と、カイエはバートに遠慮がちに目を合わせる。ひどく不安そうに、瞳が揺れている。
「……私が、気持ち悪くないの……？」
「もし、初対面だったら、分からなかった。怖くて、こんなふうに話せなかったかもしれない。でも、今は違う。カイエのこと知ってるから」
　カイエはホッと頬ほおを緩ゆるめた。
「ふふっ……あなたはヘンな人間だね」
「『変人の天国ナード・ヘヴン』の住人だからさ」
　するとカイエは、恨めしげにバートを見つめる。
「ねえ、吸血鬼症候群はいっさい記憶から消して……なんて無理だよね」
「それは、さすがに……」
「そうだよね、アハハ……」
　力なくカイエは苦笑すると、胸の前で手を組んで懇願する。
「どうか誰にも言わないで。もし知られたら、研究所にいられなくなる……」
　バートは強くしっかりと頷うなずく。
「言わないよ。だって、僕は君のパートナーだ」
「ありがとう……」
　カイエは心の底から安心したように、安あん堵どの吐息をついた。

　イチジクの実をふたつ食べてカイエが回復するのを待ち、バイクを停めていた場所へ戻る。
「……あっ」
　街灯に照らされたカイエを見て、バートは唖あ然ぜんとなった。
　噛かみついた右腕以外に、口や頬ほおも血まみれだ。さらに服には血けつ痕こんが点々と付き、スカートは泥だらけの上に裾すそが破れ、腿

ももまで見えている。
「まるで暴行されたみたいだよ……」
　カイエはバイクのミラーで自分の惨状を確認すると、ハァァと頭を抱える。
「まずいかな……？　まずいよね……」
「上、一枚脱ぐと……まずい？」
　カイエは恥ずかしそうに頷く。
「下着……」
　車が一台走ってきたので、慌あわててバートはカイエを隠すように立つ。車は素通りしたが、もし血まみれの女性をバイクに乗せて走れば、通報される。
「……しょうがない……」
　バートはＹシャツを脱いでタンクトップになり、カイエにＹシャツを渡す。
「これを上から着たら、ある程度は隠せるから」
「借りていいの？　でも、血が付いちゃうかも……」
「べつに汚れても構わないよ」
　オペレーション部門の初日に着ていった高級シャツだが、今さらどうでもいい。
　カイエが着てみると、スカートとの組み合わせはおかしいが、血痕は隠せた。
「スカートの泥は転んだことにするとして、顔や腕の血は拭ふいた方がいい。水は……」
　カイエは道路の水たまりを指す。
「それでもいいけど……」
「よくないって!?　君が男ならまだしも……。川の水も汚いし、近くに水飲み場もないよな……」

「橋を渡ってすぐのところに、新血種族用の水飲み場ならあるけど……」
「あ、じゃあ、そこに行こう。乗って」
　さっそくバートがバイクに跨またがると、カイエは街灯の下に立ったまま、じっとバートを見つめる。唇をきゅっと引き、瞳ひとみは何か言いたげに揺れていて、バートはどぎまぎしてしまう。
「な、なに……？」
「……ううん。なんでもない」
　カイエはヘルメットを目深に被かぶると、口もとを少しだけほころばせた。

　ミジービ川ブラツド・ラインに架かる橋を渡り、新血種族用の水飲み場でカイエの血を洗い落とす。
　そして家までバイクで送っていこうと道順を聞いたのだが、未舗装の道路はぬかるみ、ドロドロの洪水になっている。泥にハンドルを取られ、タイヤは埋もれ、事故を起こさずに暗くら闇やみを走る自信がない。
　路肩に停車して、カイエに問う。
「どうしよう……べつの道はない？」
「大丈夫。私、歩いて帰るよ」
「体調が悪いのに、三〇分も歩くの、つらくない……？」
「今日は涼しいし。それに、バート……ついてくるの、やめたほうがいいかも……」
　辺りを見ると、暴風で飛ばされた空き瓶びんや板切れが散らかり、粗末な小屋は打撃を受け、壁や屋根が剥はがれている。壊れた家の残ざん骸がいを片づけている者たちがいて、銃を構えた自警団が見回っている。人間の立ち入りを拒こばむ壁を、バートは肌で感じる。

「……なんか、街に入りにくいね……でも、暗いけど、帰り道は平気……？」
「うん。だって私は夜の種族だから」
　カイエは冗談っぽく笑うと、バイクを降りてヘルメットを脱いだ。彼女をひとりで帰らせるのは心配だが、おそらく彼女も、バートの身の安全を気にしてくれているのだろう。ここでしつこく家に送ると言えば、彼女に余計な気を使わせてしまう。
「じゃあ、また明日。シャツはいつでもいいから」
「うん、本当にありがとう。おやすみなさい」
　泥道を歩き去るカイエに手を振り、バートはバイクの向きを変え、橋へ向かう。
　しかし、まさか、カイエが吸血鬼症候群だとは想像もしなかった。ふだんは問題なさそうだが、皆かい既き月げつ蝕しよくのときは忘れていないか、それとなく声をかけよう。
「……って、皆既月蝕なんて、一年に一回あるかないかだ」
　どれだけの期間を彼女と過ごすつもりなのだと、自じ嘲ちようする。
「月なんて、大嫌い……か」
　ミジービ川の水面に映る満月を見て、バートはぼそっと呟つぶやいた。

　嵐の夜が明け、『労働者の祝日レイバー・デー』が始まる。各地では祭りやイベントが開催され、夏の終わりを楽しむ人々で活気づく。
　だが、打ち上げが迫る研究所に祝日はない。バートや室員たちが出勤するのはもちろん、カイエも何事もなかったように朝から顔を出している。カイエは発作の影響など微み塵じんも感じさせず、ハリケーンの直撃を受けた室員たちの家の被害を心配しているほどで、バートは胸のつ

かえが下りた。
　月げつ影えい区くの家々は暴風雨で大打撃を受けたが、室員たちの家も例外ではなかった。
　湿地帯から水が溢あふれ、ミアは「玄関先に、怖いカミツキガメがいた……」と硬直し、ほかの室員の家も、浸水したり、窓ガラスが割れたり、本来なら出勤している場合ではない状況のようだ。
　それでも皆が休まないのは、室長であるカイエの存在が大きい。部下を先に帰して残業していた上司への信頼と尊敬を、バートは強く感じる。
　カイエの頑張りの甲か斐いもあって、デイモン部門長に提出した軌道飛行の各数値はしっかり評価された。彼女は「吸血鬼症候群は、室員のみんなにも秘密」と言ったが、仮に知られたとしても、室員の皆ならば快こころよく受け入れてくれるのではないだろうかと思う。
　無論、言うつもりなんてないが。
　そして、バートがハリケーンの夜に残ったことはミアたちに響いたらしく、以前よりは、ミアの言動が温かくなった気がする。
「バート、褒ほめられたい？」
「いいです」
　相変わらず距離感は掴つかめない。彼女たちはバートのいない場所であれこれ話しているのだとカイエに聞いたが、その話の内容は知りたいような知りたくないような……複雑な気持ちだ。
　また、カイエに貸したシャツは、終業後にこっそり返してくれたのだが――
「ごめんなさい。洗っても洗っても、血が染みていて、取れなくて……」
　シャツの右袖そでには、赤銅色の血の跡が色濃く残っている。
「お詫びに新しいのを買うから、お給料日まで待って……」

落ち込んで一生懸命謝るカイエを、バートは元気づける。
「買わなくていいよ。そんな大事なシャツじゃないし」
「だって私、あなたの服を、いったい何着汚すのよ……」
四月に小型衛星ブルーエンジエルで食べ物をぶちまけたことを、いまだに悪く思っているらしい。どうやら映像記憶能力でばっちり焼き付いてしまっているようで、バートは被害を受けた側だというのに、申し訳ない気持ちになる。せめて楽しい記憶で上書きできれば良いのだが。

有人軌道飛行の打ち上げ予定日まで、残り一週間となった。『プロジェクト・ヘルメス』に関わる各施設、各研究所は、最終シークエンスへ移る。
一時休止中の『アーナック・ワン』だが、軌道飛行が終わればすぐに再開される予定だった。気が早いことに、「軌道飛行の成功パレードにバートとカイエも参加すべし」という通知が届いている。
そのパレードの打ち合わせのため、通常業務を終えたバートとカイエは本棟の会議室でジェニファーが来るのを待つ。
パレードに参加するのは栄誉だが、バートは気持ちが昂たかぶらない。Dルームではカイエの手伝いをしているだけで、彼女と並んで立つような仕事をしていないからだ。
内情を知らない世間からすれば『コンピューターを使いこなした人間』かもしれないが、ミアたちを差し置いて国民から祝福されるなど、心苦しい。何より、カイエはミアたちが表に出られない状況を覆したいのだから。
いったい彼女はどう思っているのか、バートは訊たずねる。
「パレードでDルームの実績をアピールできれば、カイエの『新血種族を人間に認めさせる』っていう夢も、一歩前進するのかな？」

　するとカイエは、やや不満そうに言う。
「もちろんそうだけど……できれば、室員のみんなもいっしょにパレードに出てほしい」
　思ったとおりだった。
　彼女は本当に、自分よりも仲間を第一に考えている。
　そんな立派な聖女の隣に立つのは、やはり気後れする。兄のような真の英雄ではないことが世間にバレたら、自分が恥ずかしいだけでなく、彼女の価値も下げてしまうのではないかと。
「―どうしたの、怖い顔して」
　不安が滲にじみ出ていたのか、カイエに気遣われてしまった。
「あ、いや、パレードの様子を想像してたら、なんか……」
「お腹なかが痛くなっちゃった？」
「ハハッ……かも」
　うだうだと卑屈になってはダメだとバートは割り切る。カイエのような強い使命は持ち合わせていないが、巨大なプロジェクトの一員として、そして宇宙に夢を見る人間の代表として、与えられた役割をきちんとやり抜こう。そして今回の飛行では、技術者を月下美人にたとえたカイエが美しく咲く手助けができればいい。
　と、内線電話が鳴った。受話器を取ると、ジェニファーの切羽詰まった声が飛んでくる。
「ふたりとも、今すぐ所長室に来て！」
　ただごとではない予感に襲われ、会議室を飛び出す。

　所長室にはジェニファー以外に、所長、デイモン部門長、広報室長という『アーナック・ワン』の面子メンツに加え、ビール樽だるのような体型の人事部長も来ている。所長は苛いら立だたしげに煙草たばこを吸い、皆、一様に重い顔つきでテーブルを囲んでいる。

煙の漂う陰いん鬱うつな空気のなか、ジェニファーが、バートとカイエに向けてタブロイド紙を投げ置く。
「明日、街に並ぶものよ」
与党批判で有名なタブロイド紙『アーナックニューズ』。その一面を見たバートは、仰々しいヘッドラインと写真に頭をぶん殴なぐられる。
《恐怖！　カイエ・スカーレットは人間を襲う吸血鬼！》
「□□!?」
カイエは口を両手で塞ふさぎ、硬直する。
一面を飾る写真は、口や腕が血まみれのカイエだ。画質は粗いが、ハリケーンの夜、森から出てきた直後の姿だとはっきり分かる。
それだけではない。バートが自宅近くのゴミ捨て場に捨てたはずの、血で汚れたシャツの写真も小さく載っている。ゴミまで漁あさられたのかと、戦せん慄りつが背筋を這はいのぼる。以前「マスコミに気をつけろ」と警告されたのに、完全に油断していた。なぜもう少し慎重になれなかったのか、悔やんでも悔やみきれない。
青ざめたカイエは口に手を当てたまま、ぴくりとも動かない。
所長がテーブルを指で激しく叩たたく。
「まずは記事の内容を確認してくれ」
怖こわ々ごわと目を落とす。
事実と異なり、カイエがバートの血を吸ったことになっている。そして、匿名の新血種族の証言として、「カイエは幼い頃に吸血鬼症候群を発症していた」「母も吸血鬼症候群だった」と載っている。母が吸血鬼症候群というのは、本当なのだろうか。
所長は鋭するどい口調でバートを詰問する。
「写真の撮影者が共和国のスパイなのか、あるいは『リヴィン画報』の独占契約を恨む者なのかは分からない。だが、問題はそこではない。何があったのか教えろ」

「はい……」
　ハリケーンの夜、研究所を出てからの一部始終を、嘘うそ偽いつわりなく話す。
　所長は歯噛がみし、広報室長は呆あきれ、人事部長は蔑さげすみの視線をカイエに送る。デイモン部門長は目を瞑つむって腕を組み、ジェニファーは頭を抱えて天を仰ぐ。
「カイエは僕を襲っていません」とバートは記事の誤りを強く指摘するが、そこは所長たちにとって些さ細さいな点のようで、反応は薄い。
　バートがしゃべり終えると、所長は顎あごや頬ほおをしきりに触りながら何度か頷うなずき、カイエに厳しい目を向ける。
「彼の言葉を信じるなら、君の行為は自傷であり、誰かを傷つけた犯罪ではない。それはそれとして……君がＡＮＳＡに出した経歴書には、吸血鬼症候群についての記載はなかった。なぜだ？」
「……すみません、隠していました……」
　虚うつろな目をしたカイエは首を深く折り曲げ、事情を話す。
　吸血鬼症候群の発症者はどれだけ成績が良くても、人間の大学に入学を拒否され、奨学生にも選ばれない。だから、月げつ影えい区くの小さなコミュニティーを出て以来、ずっと秘密にしてきた。発症は自己申告制なので、発作さえ起こさなければ隠しとおせると思った―と、彼女は答えた。言い訳はいっさいせず、身を切るように切々と、ただひたすら己の過失を謝る。
「全部、私が悪いんです……」
　彼女の震える声を聞いていると、バートはやりきれない虚無に突き落とされる。
　所長は苛いら立だちを隠さず、煙草たばこを捻ひねり潰つぶして一同を見やる。
「噛かんだという内容が虚偽だろうが、ここは自由の国だ。あの国のよ

うに発行は止められない。この記事が世に出れば大変な騒ぎになり、政府とＡＮＳＡに批判が殺到するだろう」
　カイエは涙をこらえるように、唇をぎゅっと引き結ぶ。
「責任の所在は後回しだ。唯一の救いは、軌道飛行に関する計算業務がほぼ終わっていたこと。そうだな、デイモン君？」
　デイモン部門長は腕組みしたまま、硬い表情で首肯する。
「打ち上げに影響はありません」
「では、懲戒免職はありえるのか？」
　所長の冷酷な言葉に、カイエが息を呑のむ。
　すると人事部長が、額に浮かんだ脂汗を拭ぬぐいながら言う。
「それは得策ではありません。世間体をつくろい、彼女を解雇すれば、新血種族や擁護団体の連中が騒ぐでしょう」
「『アーナック・ワン』はどうなる？」
　所長の問いに、ジェニファーが無感情に答える。
「検討中ですが、おそらく凍結となります」
　つまり、パレードには不参加。すべてが悪い方向に進む。しかし、バートは何も発言できない。
　そして所長は厳粛な面持ちで、カイエに告つげる。
「カイエ・スカーレット。当面のあいだ、自宅謹慎と処す。君は呼び出しがかかるまで、家を出るな。では、今すぐ帰ってくれ」
　言い終えると同時に、ドンと強くテーブルを叩たたいた。
　憔しよう悴すいしきった表情のカイエは唇が震え、何かを言おうとするが、声にならない。
　広報室長が苦々しく頭を掻かきむしり、「私が車で送っていく」とカイエに退出を促す。
「……申し訳ありませんでした……」
　消え入りそうな声で呟つぶやいたカイエは、死刑を宣告された罪人の

ように足を引きずり、ドアへ向かう。その去り際、わずかにバートを振り向き、「ごめんね……」とこぼした。
　かける言葉が見つからず、バートはズボンの端を握にぎりしめ、カイエの孤独な背中を見送る。
　カイエが出て行くと、所長はＤルームの今後について見解を述べる。
「どれほどの騒動になるかは見えないが、この先、謹慎から復帰させるのは厳しいかもしれん。いっそ僻へき地ちの研究所に飛ばし、隔離部屋で作業させることも視野に入れる」
　バートはここまで聞いていて、だんだん腹が立ってきた。カイエを救おうとする意見などひとつもなく、ただ除のけ者にすることしか考えていない。しかし、そうは言っても、良案は思いつかない。
「バート君」
　人事部長が樽たるのような腹をバートに突き出す。
「Ｄルームの室員たちについてですが、状況が読めないので、二、三日様子を見ます。いつでも対応できるように、ＡＣＥ社には人材派遣を打診してあります」
「人材派遣……？」
「今いる室員たちは、カイエの眷族です。場合によっては、総入れ替えせねばなりません。人間のプログラマーは、給料が豚の血というわけにはいかないのがネックですが」
　カイエの給料を「豚の血でいい」と貶けなした張本人かもしれないとバートは思い、奥歯を噛かみしめる。
　所長は立ち上がると、バートに険しい顔を向ける。
「君はＤルームに残り、様子を報告してくれ。今は、記事に対する反響を待つしかない。それからマスコミどもが君に突撃するだろうが、この件についてはいっさいしゃべるな。いずれ本部や政府も動くだろう。とんだ災難だが、耐えてくれ」

災難ではない。被害者はカイエだ。
しかし、どれだけ胸の内で憤いきどおっても、喉のどで詰まって出てこない。新入職員にすぎないバートは、提案ひとつ許されない。

絶望的な会議を終え、所長室を出たバートは、不満で頬ほおを膨ふくらませたジェニファーとエレベーターに乗り込む。
「あーあ。せっかくプロジェクトが軌道に乗りかけてたのに、なによ……」
ジェニファーは階数ボタンを連打して、舌打ちする。
「プロジェクトが頓とん挫ざしたら、私、減給だよ。私のせいじゃないってのに。どうせ上司がまたわけの分かんない文句をつけてくるわ」
腹の底から湧わき上がる怒りを抑えきれず、バートは突っかかる。
「なんですか、それ……」
「なに？」
「カイエに対して何もないんですか？　助けてあげようとか、そういうのは……！」
「はぁ？」
ジェニファーに挑みかかるような顔つきで睨にらまれた。
「あのさぁ、私だって助けてあげたいわよ。彼女のこと、べつに好きじゃないけど、一生懸命やってたのは認めてるし。でも、どうしろって言うの？　っていうか、君こそどうなの？　彼女の血を拭ふいてあげたかもしれないけど、そんなの外面だけでしょ？」
「っ……」
「あー最悪っ！」
ジェニファーはエレベーターのドアをガツンと怒りに任せて蹴け飛ばす。
と、警報のブザーが鳴り響き、エレベーターが止まってしまった。

「なんなのもうっ……！」
　ふて腐くされて壁にドスンともたれたジェニファーの横で、バートは両手を見つめ、拳こぶしを握にぎりしめる。なんとかしなきゃいけないのに、なにもできない。
　自宅に連れ戻されているカイエの気持ちを考えると、胸が引き裂かれそうだった。

　カイエの吸血記事は、大きなスキャンダルとなった。
　ＡＮＳＡ本部は「事実確認中」というコメントを出しただけで否定せず、世間は「吸血鬼」と騒ぎ立てる。人間至上主義者たちは、ここぞとばかりにカイエを叩たたき、「今すぐ国家事業から新血種族を排除せよ」と声を荒らげる。
　騒動の余波は研究所で働く新血種族たちにも及んだ。所内に潜ひそんでいた亡霊が姿を現し、制作者不明の『分離差別を再開せよ』というビラが、食堂やトイレに貼られる。
　所内にマスコミは入ってこられないが、バートは外を出歩くときは警戒し、帽子を目深に被かぶるようになった。マスコミだけではなく、［ソーラーフレア・クラブ］の目も怖かった。

　Ｄルームの室員は人間職員から厳しい視線を向けられ、「カイエ以外も吸血鬼症候群なのではないか？」と疑われた。
　ミアたちはすっかり沈み込んでいる。謂いわれのない中傷を受けるのはつらいが、それ以上に、カイエに隠しごとをされていたのが堪こたえているようだ。
「カイエさん、どうして吸血鬼症候群、教えてくれなかったんだろう……」

「私たちを信用してくれてなかったのかな……」
　カイエは自宅に籠こもっているが、会いにくいので会っていないとミアたちは口々に言う。
　そしてバートだけが知っていたことも、不信に拍車をかける。
「隠してること、まだある？　あるでしょ？」
　心苦しくて仕方ないが、ＡＣＥ社の人材派遣はいずれバレてしまうのだからと、バートは彼女たちにやんわり伝える。
　するとミアは声にならない溜ため息いきを吐つく。
「それ……追い出されるってこと？」
　最年長の室員が、がくりと膝ひざをつく。
「だったら、こっちから辞めてやる……？　人間の宇宙飛行士を飛ばしたって何にもならないし、いくら働いても、ハリケーンで壊れた家の修理代にもならないんだもの……」
　同意が部屋に満ちてゆく。
「待って！」
　思いとどまらせようと、バートは説得する。
「今職務を放棄すれば、この部屋は本当に、人間に奪われる。カイエがどういう想いでここを守っていたのか、よく考えて……」
　だが、ミアは冷たい視線を投げる。
「人間のアナタに、何が分かるっていうのよ」
　小さな口から覗のぞく牙きばに心臓を噛かまれたように、胸がズキンとした。

　騒動は収まるどころか、さらに悪化する。
　バスや路面電車は、新血種族の乗車を拒否。[ソーラーフレア・クラブ] があちこちの都市で暴れ、過激な人権活動家が「カイエを救え！」とデモのネタにして、暴力的な新血種族と人間が小競り合いを起こす。

そんなゴタゴタをよそに、有人軌道飛行への準備は粛々と進んでいた。

ロケット発射センターの正門近くに、報道機関向けの臨時ニュースセンターが開設された。秘密主義の共和国と違い、連合王国は全国民、全世界に広く情報を公開する。ニュースセンターには広報統括責任者が常駐し、ジェニファーも詰める。各国の記者はＡＮＳＡから提供される技術書を読み、ニュースや逸話を求め、航空会社や国防総省の職員にまでインタビューを繰り返す。

そして、打ち上げ前日の九月一二日。

ケイリー研究所は騒動の波に飲み込まれる。

新血種族全員の休職が決定し、Ｄルームに人事部の職員が押しかけて、ミアたちの身分証を半ば無理やり預かる。

「騒動が収まるまで、安全確保のために、自宅待機とする」

臨時でＡＣＥ社の職員に業務委託するという話だが、体ていのいい解雇通告だ。だが、無力な彼女たちは従うしかない。バートだけはＤルームに残り、退去していくミアたちから、恨みがましい目で見られた。

騒動の裏で、ＡＮＳＡの思惑により、バートは室長代理に昇格していた。

広告塔として活動したバートとカイエは世界中に知られてしまい、なかったことにはできない。そこで軌道飛行の成功後、カイエを病気休養として、バートをＤルームの室長＆単独の広報員にするという案を告つげられた。その肩書きは、長年のコンプレックスだった「何もない自分」からの脱却であり、ようやく身内の期待に応えられる。

しかし結局のところ、祭り上げられた操り人形にすぎない。室長となれば人間職員を率いることになるが、バートはカイエのように『ＡＣＥ』と意思疎通できない。

そして、もしDルームを人間が支配すれば、新血種族は宇宙開発から永遠に姿を消すだろう。

「どうしよう……」

誰もいないDルームにバートがぽつんと座っていると、内線電話が鳴り響いた。

「―新血種族のネームプレートを回収するのを忘れました。外して、保管庫にでも置いておいてください」

人事部長から淡々と命じられ、バートはネームプレートの前に立つ。

真っ赤な色をした新血種族のネームプレートを一枚一枚、剥はがしていく。食堂や収穫祭で笑っていた彼女たちの顔が浮かんでは消えていく。互いに壁があり、一度も話していない室員もいる。

「ミア・トリアドール……」

ＦＯＲＸフオークスが理解できるようになったのは、彼女のお陰だ。

手に持ったネームプレートが鉛のように重い。

一枚剥がすたびに、彼女たちの命を歴史から抹殺している気持ちになる。

そして最後に、カイエのネームプレートを剥がす。

「ごめん、カイエ……」

剥がし終えると、バートのネームプレートだけが壁に残った。

やるせない寂しさに滅め入いりながら、パンチカードの保管庫にネームプレートの束を置く。うずたかく積まれた段ボールには何万枚というパンチカードが詰まっている。それは彼女たちの努力の結晶だが、今は、まるで墓ぼ標ひようだ。

保管庫のドアを閉め切ると、彼女たちを埋葬してしまう気がして、わずかに扉を開けて、光が入るようにして立ち去った。

つけ狙ねらうマスコミの目を避けて家に帰ったバートは、夜の湿気に

まとわりつかれながら、飲めないアルコールを無理に飲んで、気持ち悪くなっている。
　気分転換しようと『フライ・ミー・トゥ・ザ・ムーン』を手にしたが、一〇ページも読むと、パタンと閉じる。つらいときに読むと気力が回復するのだが、今はむしろ、つらさが増してしまう。
　窓越しに見えるミジービ川をぼんやり眺めていると、電話が鳴った。
　出ると、アーロンからだ。
　挨あい拶さつもほどほどにアーロンは、明日の午後二時四七分に打ち上げが予定される軌道飛行について、切り出す。
「軌道飛行の数値だが、じつはスティーヴ飛行士の強い希望で、オペレーション部門の職員が出した数値を使おうとしていた」
「え……？　だって、正しいのはカイエのだって……」
　アーロンは呆あきれて言う。
「人間を襲う吸血鬼など信じられないとさ」
　飛行士にまでも疑われているのは、ショックだった。
「……それで、どうなったの」
「俺が説得した。『俺はカイエさんのお陰で英雄になれた。お前も彼女を信じて飛べ』と」
　バートは胸をなで下ろし、話の続きに耳を傾ける。
「まあ、感情論なんかじゃなくて、彼女の数値の正確さを検証した上での説得だけどな。それに何より、お前の兄として、お前の仕事を信じるのが道理だろう」
　兄にはどれほど感謝していいのか分からない。
「ありがとう……」
　すると、アーロンの声が低くなる。
「いい話ばかりじゃないぞ。ＡＮＳＡの上層部には、こんなことを言っている人間がいる。『もし軌道飛行に失敗したら、カイエたち新血種族

のせいにしてしまえ。一般人はコンピューターのことなど分からん』と……」
「なんだよそれ……!?」
「ロケットを組んでいる二〇〇万個の部品は、最低入札額の代物ばかりだ。それが原因で、もし失敗しても、各企業や技術立国としての評判は守りたい。ならば、生いけ贄にえを捧ささげる、と」
　つまり、飛行が成功しても、Ｄルームから外されたカイエの実績にはならず、失敗したときだけカイエのせいにされてしまうということだ。
　胃がむかむかする。
「そんな理不尽な……」
　バートが憤いきどおりをぶつけても、アーロンは割り切った調子で返す。
「国家事業も戦争も理不尽の塊だ。……ところで、カイエさんは、どうしてるんだ？」
　訊きかれたくなかったことを、訊かれてしまった。
「分からない。会ってないし、連絡もまだ取れてなくて……」
　受話器越しに、呆あきれたような溜ため息いきがこぼれた。
「……バート。お前は、苦しんでいる戦友を放置して、何をしているんだ？」
　戦友という言葉に、心が抉えぐられる。
「ごめん……」
「俺に謝ってどうする」
　これほど怒りと憐あわれみに満ちたアーロンの声を、バートは初めて聞いた。
「人事部が言ってたんだが……お前、将来的に室長と広報員になるそうだな。まさか、喜んでないだろうな」
「そんなわけないよ……！」

「何もしなければ、結果的にそう思われるだろう。違うか？」
　正論をぶつけられ、バートは何も言えなくなる。だがいったい、どうしたらいいのか。
　無言のまま受話器を耳に当てていると、諭さとすような声が耳に届く。
「お前は、自分を低く見積もりすぎだ。なぜ堂々と胸を張らない」
「僕は、兄さんと、違うから……」
　弱気を出すと、間髪を容れずにアーロンが強い口調で遮さえぎった。
「俺は、お前を誇りに思っている」
「え……？」
「お前は身体からだが弱くて、ろくに学校にも行けなかったのに、一生懸命に勉強して、小型衛星を誰よりも高く遠くへ飛ばし、優勝した。あのときの記録は、今も破られていない」
「そうなの……？」
　兄か家族か知らないが、誰かが毎年調べていたのだろうか。
「家庭教師も、お前の科学の知識には舌を巻いていたんだぞ」
「全然、知らなかった……」
　フフッと、兄が笑う声が聞こえた。
「つぎは小型衛星ではなく、宇宙船を月へ飛ばすんだろう」
「……飛ばしたい」
「誰とだ？」
「それは……」
　どうしてコンピューターが使えない自分が残っていて、カイエが追放されなければいけないんだ。
　想いが言葉にならずに黙り込んでいると、アーロンに穏やかな口調で問われる。
「なあバート。レフ・レプス飛行士はなぜ、自分を『第二号』と呼び、

イリナ・ルミネスクを世界に紹介したと思う？」
「なぜって……それは……」
　それが、本当のことだから――？
　アーロンはとくに答えず、鼓舞する口ぶりで言う。
「宇宙への道は、己の力で切り拓ひらけ。では、幸運と成功を。バート・ファイフィールド」
　電話を切ったあと、バートはしばらくその場に立ち尽くしていた。
　今のままではいけない。
　それは分かるのだが、解決策が思いつかない。
　延々と思考を巡らせているうちに夜は更け、月は沈んでいった。

朱の瞳　Ｖｅｒｍｉｌｉｏｎ　ｅｙｅｓ

　薄暗い闇やみに覆おおわれた部屋の片隅、抜け殻のようになったカイエはぐったりと座り、壁にもたれかかる。『アーナックニューズ』に載って強制送還されて以来、一日中、何もせず、家に籠こもっている。
　窓から見えていた月下美人はハリケーンの強風で全部傷んで折れてしまった。割れた窓ガラスは応急処置で新聞を貼り付けたままになっており、外の音がそのまま聞こえてくる。
　パンッ――
　聞き慣れた乾いた銃声が、遠くで響く。
　自警団の威い嚇かく射撃であればいいが、［ソーラーフレア・クラブ］だったらと思うと、身の毛がよだつ。「連中はカイエの顔写真を燃やしているようだ」と、親切な隣人から知りたくもない情報を教えてもらった。
　あの記事が出てからというもの、月げつ影えい区くの浅い場所を、話

題の吸血鬼を取材する人間がうろつくようになり、父の働く港湾工場にも三流紙の記者が詰めかけた。迷惑な人間を追い払う者もいるが、金銭目的でカイエのネタをあることないことしゃべる者もいる。

だから、カイエは外に出ない。

こうして家にいる時間が増えた分、父と会話を交わす回数が増えた。

父は以前にも増して密造酒ムーンシャインを飲み、人間への憎しみを吐き、深い悲しみに落ちる。

そんな父から、カイエは嫌な噂うわさを聞いた。

Ｄルームの室員が、全員人間に取り替えられたらしいと。

ミアたちが今どうしているのか気になるが、もし、自分のせいで業務を外されたのだとしたら、申し訳なくて顔を合わせられない。記事が出たあとも彼女たちが家にやってくることはなく、吸血鬼症候群を隠していたせいで嫌われたのではないかと感じていた。

カイエは右腕の噛かみ跡にできた瘡かさ蓋ぶたを、忌ま忌ましげに撫なでる。

「人間の宇宙飛行士が飛ぶために、頑張ったのに……」

溜ため息いきは哀かなしみを帯おび、心がすり切れるような痛みが身体からだ中に満ちていく。

「私はイリナにならなきゃいけないのに……なりたかったのに……こんなの、共和国に亡命したほうがマシじゃない……」

今にも朽ちそうな書棚に並んでいる本に目をやると、カイエは胸のうちで呟つぶやく。

もう、全部必要ないよね……と。

第五章　太陽と月の葬送

青の瞳　Ｂｌｕｅ　ｅｙｅｓ

連合王国初の有人軌道飛行。打ち上げ、当日。

天気は快晴で風も穏やか。絶好の打ち上げ日和だ。

午後二時四七分に予定されている打ち上げに向けて、ラジオやテレビは朝から盛り上がる。歴史的な挑戦を肌で感じようと、ライカ・クレセントには各地から大勢の人々が詰めかけ、湾岸地区には屋台が列をなす。ニュースセンターは全世界から集まったマスコミで溢あふれ、広報部員が忙しく対応する。

街や大衆が熱気に包まれる一方で、ＡＮＳＡや政府は「失敗は許されない」という異常な緊張に満ちている。

世界各地ではレーダーが稼働し、一五〇〇〇の人員を乗せた二四の艦船、六〇機の航空機が、着水する宇宙船の回収に備えて待機している。軍隊の派遣に関しては、軍部は消極的だった。軍隊を軌道飛行に集中させれば防衛が手薄になり、共和国に急襲されるのではないかという懸け念ねんもあったからだ。

デイモン部門長ら、プロジェクト主任クラスはロケット発射センターの管制室に入り、綿密な最終確認を繰り返す。しかし、そこにはバートもカイエもいない。コンピューターの担当者はＡＣＥ社の社章を誇らしげに付けた人間のプログラマーたちだ。

国家の威信を賭かけた戦いが始まろうとするなか、バートは研究所のＤルームの片隅でうなだれている。

昨夜は悩み続けて一睡もできなかった。

結局、解決策は見つかっていない。所長からは「君が管制室に来ても

役目はなく、マスコミがカイエの件で騒ぐだけだ。所内でコンピューターを扱っているフリをしていてくれ」と命じられ、素直に応じた。
　Ｄルームでは、臨時で派遣されたＡＣＥ社員たちが、ロケット発射センターからの要請に対応できるように控ひかえている。だが、今のところ打ち上げの準備は順調で、緊急の要件が来る気配はなく、テレビで打ち上げ中継を流して雑談している。
　ＤルームはＡＣＥ社に占拠され、バートは居場所がない。若い社員からは「なぜ、ＦＯＲＸフオークスをロクに扱えないアイツが室長なんだ？」という責める視線すらも感じた。
「―いやぁ、たいしたもんだ」
　外から、年配の社員が戻ってきた。今後の勤務のために、パンチカードの保管庫を確認してきたのだ。なんのことか分からないバートに、年配の社員は感心した様子で声をかける。
「プログラムをひととおり眺めたが、独学により短期間で習得したとは思えないな。さすがカイエ・スカーレットだよ」
　年配の社員はカイエを知っていた。四年前の一九五七年、月の軌道計算プロジェクトでカイエとともに作業し、同僚として働いたのだという。
　年配の社員は懐かしそうに語る。
「彼女には開発部に残ってほしくて引き留めたんだが、地元の研究所で働きたいと言って去ってしまったんだよ。高い年俸を蹴けってまで、宇宙の仕事をやりたかったようだね」
「え？　でも、月は大嫌いって……」
　吸血鬼症候群の元凶と言われる月を、そして、新血種族を救うことのない宇宙開発をカイエは嫌っているはずだ。
「ああ、最初は嫌いと言っていた。コンピューター技術を習得するためにイヤイヤやってたみたいだけど、天体物理観測所に出入りするうちに

魅せられたみたいだね。彼女は自分のことをあまり語らなかったから、事情は分からないが……少なくとも、『変人の天国ナード・ヘヴン』での勤務が決まったときは、目を輝かせてたよ」

「……」

どういうことだろうか。混乱する。

「おい！　カウントダウンが始まるぞ！」

テレビの近くにいた社員が大声を出すと、年配の社員も慌あわてて中継を見に行く。

時刻は、午後二時四七分。

フライトディレクターを務めるデイモン部門長の声が、画面越しに聞こえてくる。

《──成功と幸運を、スティーヴ・ハワード飛行士。一〇、九、八、七、イグニッション、五、四、三、二、一、〇、全エンジン稼働、リフトオフ！　科学の発展と宇宙の平和ために、全力で飛行を──》

無事にロケットが空高く飛翔すると、社員から歓声があがる。

まだ宇宙に達しておらず、盛大な打ち上げ花火に終わる可能性もある状況だが、ニュースキャスターは興奮を抑え切れぬ様子で、ＡＮＳＡから提供された情報を読み上げる。

《このあと、スティーヴ・ハワード飛行士の乗った宇宙船『グロリアスVII』は、予定では地球を三周し、大気圏再突入後、海への着水は、午後七時四〇分前後とのことです》

バートはしばらく中継を見ていたが、ロケットがぐんぐんと上昇するのに反比例して、気分は落ちていく。ＡＣＥ社員に嫌悪感はないが、彼らの輪に入る気にはなれない。いっしょに見るならば、カイエたちとがよかった。

息苦しくなり、こっそり部屋を出る。

入り口脇のネームプレートは人間ばかり。室長のポジションにはバー

トの名前がある。その光景は違和感しかない。
　行く当てもなく、鉄球をつけられたような重い足を引きずって廊下を歩く。トイレの個室にでも籠こももろうかと彷徨さまよっていると、地上へつながる階段へ辿たどり着いた。
　配属初日、カイエが転落してきた階段だ。
「……びっくりしたな、あのときは……」
　彼女の身体からだの重みと、後頭部を打った激痛が蘇よみがえる。たった一か月前なのに、彼女とはずっと前から開発現場で戦ってきた気分だ。
「カイエ……」
　彼女と過ごした夏が、断片的ながら鮮明に思い出される。
　ラウンジで苦いコーヒーを飲んだこと。熱くて辛いスープで舌を火傷やけどしていた彼女。
　ゴムボートの上で抱きつかれたときの感触。天体望遠鏡を覗のぞいていた寂しげな横顔。
　数式と闘っていた凛々しい姿。バイクで背中に感じた温かな体温。
　そして蛍の森で、血に染まった彼女がこぼした涙。
　映像記憶の能力などないのに、彼女のいた情景が、つぎつぎと浮かんでくる。
　兄の言葉がリフレインする。
　苦しんでいる戦友を放置して、何をしているんだ。
　彼女に会おうともしないで、逃げているだけじゃないのか。彼女の手助けをしようと決めていたのに、何もしないのは、見捨てるのと同じだ。
　レフがなぜ、イリナを史上初の宇宙飛行士として世界に紹介したのか。
　それは―

「立場を捨ててでも、彼女を救いたかったからだ」
　気づいたら、バートは地上への階段を駆け上がっていた。
　会いに行ってどうにかなるわけではない。会ってくれないかもしれない。
　だが、彼女を救わなければいけない。
　バイクに跨またがって研究所を抜け出し、月げつ影えい区くへ向けて街を駆る。
　空をヘリコプターが飛び交い、街頭テレビに人々が群がり、騎馬警官が交通誘導をしている。
　現在の飛行状況をバートは知らないが、人々の興奮を見る限り、順調だというのが伝わってくる。
「カイエのお陰なんだ……」
　皆が応援する宇宙船は、カイエが精魂込めて弾はじきだした数値を元に飛んでいるのに、そんなことは誰も気にしていない。それどころか、人間を噛かむ吸血鬼だという誤解が広まっている。
「彼女の想いは消させない……」
　ミジービ川に架かる橋を渡り、月影区に入る。
　ハリケーンの爪つめ跡がいまだに残る未舗装の道を、砂埃ぼこりを上げながらバイクで突っ切る。カイエの家への道順はくわしく知らないが、とにかくひたすら南へ向かう。
　共同墓地を過ぎたところで、重々しい葬送曲が天に轟とどろいた。道いっぱいに広がっている『ジャズ・フューネラル』の葬列と鉢合わせる。
　徐行すると、バートは参列者から険しい目を向けられた。人間が予算を宇宙開発に使わず、新血種族に回せば死ななかったのだと訴えるような厳しい顔つきで。
　軌道飛行にぶつけるのは、皮肉や当て付けなのだろう。

バートはグッと唇を噛かみしめ、葬列の脇をすり抜ける。

賑にぎわっている商店街へ入ると、軌道飛行を中継する街頭テレビに住民が群がっている。
《──午後三時三〇分。ＡＮＳＡの情報によりますと、『グロリアスVII』は、宇宙を順調に航行中。現在、地球の裏側を飛んでいるようです》
街頭テレビの周囲には、ジュース売りの台車やブラッドメロンの屋台があり、一見お祭りだ。しかし、人間居住区とはまったく雰囲気が違う。興奮している者はおらず、眼まな差ざしは冷めている。ひょっとしたら、失敗を待ち望んでいるのかもしれない。
バートはバイクを停めて、群衆のなかにカイエの特徴的な銀髪を探す。
しかし見つからず、少しずつ移動していくと、教会の前にＤルームの室員たちが集まってラジオ中継を聴いていた。
目が合い、互いにアッとなる。
険悪な別れ方をしたので気まずいが、心を奮い立たせて、ミアに話しかける。
「カイエは、ここにいないの……？」
ミアは意外だという顔をした。
「捜しに来たの？」
「どうしているのか、気になって……」
「たぶん、家」
くわしく訊きくと、ミアたちはカイエを誘うことも考えたが、公衆の面前に引っ張り出したら騒がれそうで、結局誰も連絡していないという。彼女たちとカイエは、まだ関係の修復ができていない。
ミアたちと話していると、周りにいた者がバートに気づき、「カイエ

のパートナーだ」と低い声でざわつく。スーパーマーケットの店頭から、老店主が睨にらみつける。

ここに長居してもしょうがない。

カイエの家までの道順をミアから聞くと、バートはバイクのエンジンを吹かす。

商店街を離れ、農道を南進し、鬱うつ蒼そうとしたヒッコリーの森を過ぎる。

すると、スイレンの浮かぶ沼のほとりに出る。

その一角にぽつんと、柵さくに囲まれた木造の小さな家がある。

「あれかな？」

バートはバイクから降りて柵さくに近づく。庭のあちこちに、萎しおれた月下美人の花が落ちている。元気をなくした白い花弁には乾いた泥が付着していて、見るも無惨だ。

庭の裏手から、細い煙が立ちのぼっている。

なんだろうと回り込むと、小川の傍そばの倒木にカイエが腰掛けて、寂しげに頬ほお杖づえをついている。

煙の出所は、燃やされている本だ。

「カイエ……」

意を決して近づくと、カイエは気配に気づいたのか、ふっと顔を上げる。そして、バートを見るとビクッと身体からだを揺らした。

「バート……!?」

狼ろう狽ばいを露あらわに顔を伏せたカイエは目尻を慌あわてて指で拭ぬぐったが、涙がきらりと光ったのを、バートは見逃さなかった。

「あなた、どうしてここに……？　今、打ち上げ、やってるんじゃないの……」

視線を落としたままカイエは木の枝を手にして、燃やしている本を突く。

バートは歩み寄り、深く頭を下げる。
「その、いろいろ、ごめん……」
謝らなければいけないことが多くて、何から伝えればいいのか迷ってしまい、言葉が上う手まく継げない。
「……ここは、あなたのいる場所じゃないよ。お父さんに見つかったら怒られるし……」
「君をひとりにしちゃいけない気がして、来たんだ……」
素直な気持ちを伝えた。
カイエは答えずに目を伏せ、炎のなかで灰になってゆく本を静かに見つめる。傍かたわらには、これから燃やされるであろう本が何十冊も乱雑に置いてある。理数系の書物や、工学書、ＦＯＲＸフオークスの技術書。論文もある。
「どうして、燃やしているの……？」
バートの問いに、カイエはぽつりと答える。
「もう、いらないから……」
そう言ってＦＯＲＸの技術書を取ると、名残惜しそうに、炎に放り込む。
本の内容を記憶できる彼女にとって、本を手もとに置いておくことにどういう意味があるのかバートには分からないが、ここに積まれている本には、きっと少なからず思い入れがあるのだろう。
しかし、カイエはただ捨てるのではなく、灰にしている。その意味や覚悟を、彼女の悲壮な表情からひしひしと感じる。
もし仕事を辞めるというのなら、思いとどまらせたい。
「君のこと、研究所に来たＡＣＥの社員さんが褒ほめてたよ……」
「……Ｄルーム、乗っ取られたって聞いたけど……」
ドキッとした。
「知ってたんだ……」

彼女はどこまで知っているのだろうか。

自分が室長になりそうだとは苦しくて言えない。そして、もし飛行が失敗に終われば、カイエにすべての罪がなすりつけられることなど、言えるわけがない。

考えもなしに来たバートは思い悩み、首の後ろを掻かきながら、どうしたらいいのかとカイエの周りをうろうろ歩く。しかし解答は導き出せず、草むらに散らばっている本を何気なく見ていると、一冊だけ離れた場所に置いてあった本の表紙が目に飛び込んできた。

月と宇宙船が描かれた印象的な装丁は──

『フライ・ミー・トゥ・ザ・ムーン』だ。

紙はボロボロで、背は割れ、破れたページは補修され、何度も読み返されたあとがある。

「君が小型衛星に名づけたブルーエンジェル……やっぱりこれだったんだね」

バートが本を拾い上げると、カイエは「あっ……」とバツの悪そうな表情を見せた。

「僕は、この本を子どもの頃に読んで、宇宙の仕事に就つこうと決めたんだ。僕も、今でも持ってるよ。プロローグを読むだけで、月着陸に挑戦するブルーエンジェルの勇姿が思い出されて、胸が熱くなる……」

「ふぅん……」

カイエは無関心な調子で相づちを打つだけで、話に乗ってこない。

この本を捨てずにいたのに宇宙に興味がないのだろうかと、バートは疑問に思う。『フライ・ミー・トゥ・ザ・ムーン』は最高におもしろいが、あくまでも空想科学だ。今の科学技術で考えるとおかしな点が多く、ＡＮＳＡの業務には役に立たない。ＡＣＥ社の社員が語った彼女の過去も相まって、疑念が高まる。

「カイエ。君は本当に、月が嫌いなの……？」

「大嫌いって言ったでしょ。全部、月のせいなんだから……」
　目を合わせようともしないカイエの隣にバートは腰を下ろし、真剣に問いかける。
「君は宇宙なんてどうでもいいと言ってたけど……違うんじゃないかな」
「何を言っているの……」
「前に、休憩時間に屋上に行ったとき、君はひとりで星空を見上げてた。そのとき、まるでその姿を見られたくなかったみたいに驚いてた」
「え……？　ううん、覚えてないわ……」
　一瞬狼狽うろたえたカイエはうつむき、灰になっていく本を見つめながら、目にかかる髪を何度も払う。
　彼女を問い詰めたいわけではないが、バートは彼女の本心が知りたい。
「きっと君は……宇宙計画に批判的な新血種族の気持ちを汲んでるんだ」
「そんなわけ、ないでしょ……」
「夢を見られない街で、自分だけが夢を追うのはダメだと、自分に言い聞かせてる」
「な、なにを根拠に、そんな……」
　カイエの声が揺れる。やはり、そうに違いない。
「根拠があるとすれば……自分より他者のことを考える君の優しさだよ」
「私、優しくなんてないから……」
　頑かたくなに否定するけれど、目は泳ぎ、動揺が顔に出ている。嘘うそを吐つくのが苦手なのだろう。
「小型衛星ブルーエンジエルの件もそうだ。『趣味じゃない』『絶対に秘密』と何度も念押ししたのも、ドジなのがバレたくなかったからじゃ

なくて、宇宙に興味があることをミアたちに隠していたから……？」
「……」
　反論もなく、黙り込んでしまった。彼女に対する疑念が、確信に変わる。
「収穫祭の夜。君は望遠鏡で月を見たとき、こう言ってた。『どうして、月なんて目指すんだろう。馬鹿じゃないの』って。あのときは、僕たちＡＮＳＡの人間に向けた言葉だと思ったけど、違う……君は自分に向けて言ったんだ……」
　バートは『フライ・ミー・トゥ・ザ・ムーン』をカイエに差し出す。
「君はこの本も記憶しているんでしょ。それなら、この本を燃やしたって、君の身体からだに刻まれた夢は消えない」
　カイエは本を受け取らず、スカートの裾すそをぎゅっと握にぎる。
「僕も周りの目を気にして、ずっと生きてきた。名門一族の落ちこぼれで、アーロンの弟と言われて……そんな人生で、たったひとつの自分らしさが、宇宙への夢だった。でも、君は、僕と逆だ。君はひとりで抱えすぎて、苦しんでる」
「私は、べつに……」
　消え入りそうな声はそこで途切れた。炎が弾はじけて、灰になった本が崩れていく。
　バートは快晴の空を仰ぎ見て、カイエに語りかける。
「この星は、暴動、戦争、差別……憂ゆう鬱うつで、息が詰まることばかりだ。そんな暗い世界で、君が新血種族の夢と希望になるなら、君自身が夢を失ったらいけない」
　ゆらめく炎を無言で見つめる彼女の腿ももの上に、バートは本をそっと置く。
「君も僕と同じ、ブルーエンジェル号に夢を見て、宇宙を目指した仲間だ。……付け加えるなら、運動ができないから、宇宙飛行士になるのは

すぐに断念した」
「……ふふっ。そこまで分かっちゃうんだ」
　表情を崩して自じ嘲ちようしたカイエは本を手に取る。
「もちろん、内容は全部覚えてる。でも、こんなに何回も繰り返し読んだ本はほかにない。文字を目で追うと、初めて読んだときの気持ちが蘇よみがえるの……」
　そう言って、我が子を抱きしめるように、ぎゅっと胸に押し当てる。
「この本、お母さんが拾ってきたんだけど、読む前は『人間の書いた本……』って、穿うがって見てたの。でも、悔しいくらいにおもしろくて、宇宙や月に夢を見た。でも……」
　本を握にぎりしめる手に、力がこもる。
「吸血鬼症候群を発症して、お母さんを亡くして、一度、月が大嫌いになった……」
　哀かなしみを堪こらえるように、カイエは唇を震わせる。
「けどね……月の軌道計算に携たずさわったら、やっぱり宇宙が大好きだって気づいたの。それで、この街に戻ってきたんだけど、みんな宇宙開発を憎んでいて、それが本当につらくて。私が進学するためにお金を出してもらったのに裏切れないでしょ。だから『種族のため』という気持ちだけ表に出して、夢を隠すしかなかった」
「そのこと……正直に、Ｄルームのみんなに話してみない？」
　バートの提案に、カイエは頭を振る。
「え、無理だよ。だって、ますます避けられるに決まってる……」
「ミアたちは吸血鬼症候群を隠されてたのがショックだったらしい。信じてもらえてなかったのかな……って。だから、君が心配だけど会いづらいって言ってた。避けてなんかいないよ」
「そうなの……？」
　バートは頷うなずくと、指を一本立てる。

「僕が一か月いっしょにいただけで、君の宇宙に対する気持ちに気づいたんだ。毎日いっしょにいた彼女たちなら、うすうす感づいててもおかしくない」
　カイエは目を瞑つむると顔を手で覆おおい「そうかな……」と不安そうに漏もらす。
「とにかく、会いに行こう。人間と新血種族のあいだに壁があるのはしょうがないけど、同じ種族同士で壁を作ってても、いいことないよ」
「うん、でも……」
　踏ん切りがつかないのか、カイエは本を抱えたままうつむいている。
「僕もいっしょに行くから。言いにくければ、僕が言うし」
　バートは立ち上がり、カイエに手を差し伸べる。すると、カイエはその手をじっと見つめてから、ゆっくりと顔を上げた。
「大丈夫。私から話す」
　カイエはバートの手を取り、すっくと立ち上がると、バートに微ほほ笑えみかける。
「いつもありがとう」
　なんだか照れ臭くて、バートはメガネを直して「ああ」と曖あい昧まいな返事をした。

　本を燃やしていた火に、バートが小川の水をかけて消し、カイエが本を家に片づける。そしてバイクを押して、商店街へ向かう。
「お父さんに見つからなくてよかったね。絶対に怒鳴られてたよ」
　真顔で言うカイエに、バートは今さら戦々恐々となる。
「人間嫌いって言ってたもんね……」
　今回の騒動でますます険悪になってしまったのではないかと、少々気がかりだった。だが、家庭の事情にはあまり踏み込みたくない。それこそ、よけいなお節介だとバートは思う。

そして、ヒッコリーの森を抜けたところで──

「ん……？」

街の方から、ミアたち室員の一団がやってきた。

「宇宙飛行なんかより、カイエさんが気になって……」

ミアたちは皆、バツの悪そうな顔だ。

するとカイエが、深く頭を下げて謝罪する。

「みんな……吸血鬼症候群のことを隠していて、ごめんなさい」

よけいな不安を与えたくなかったからだと、カイエは何度も重ねて謝る。

「カイエさん……」

ミアがカイエの手をそっと握にぎった。

「ミア……？」

「今のワタシたちがあるのは、カイエさんのお陰。ワタシたちも、すぐに会いに行けばよかったんです。すみません」
　ミアに続いて、ほかの室員もカイエの手を取り、背中をさすり、肩を抱く。カイエに笑顔が戻り、彼女たちのわだかまりが解けていくのを、バートは遠目に眺める。
　室員に囲まれているカイエはあらためて申し訳なさそうに言う。
「それから、もうひとつ、黙っていたことがあるの。私、じつは宇宙が好きで、このプロジェクトに参加してた……」
　深刻な声に反して、ミアたちはあまり驚かない。
「そういう気持ちもあると分かってました」
　エッと口を開くカイエに、ミアは意地悪な顔で告つげる。
「いっしょにバスで帰るとき、ぼんやり夜空を眺めていて、よく乗り過ごしそうになってましたよね」
「アレ？　アハハ……」
　カイエはバートを振り向き、舌をペロッと出して苦笑を浮かべる。
まったく困ったもんだと、バートは肩をすくめて苦笑いを返す。
　そんなふうにカイエが隙すきを見せていると、ミアがカイエの両脇腹をツンと指で突く。
「ひっ！」
　飛び上がって驚くカイエに、ミアは柔らかな口調で告げる。
「べつにカイエさんが宇宙を好きでも、何の問題もないです。ワタシは全然興味ないですけど、ハイペリオンに参加したい室員もいますし」
　室員の数名が、誤ご魔ま化かすように首もとを掻かき、軽く頭を下げる。
　バートは思う。『新血種族は宇宙開発を許さない』という考えは、人間の『新血種族は差別すべき』という同調圧力と同じではないかと。
　ともかく、彼女たちの仲が修復されてよかったと、バートはホッとす

る。
「ところで軌道飛行は、今どんな感じなの……？」
　まったく状況を知らないカイエがミアに訊たずねる。バートも気になるので、話の輪に入る。
「宇宙空間を順調に航行中だとラジオで聴きました」とミアは言った。
「無事に着水までいってくれたらいいけど……」
　カイエは自分の計算が役立つことを純粋に祈る。だが成功しても、彼女は僻へき地ちの研究所に隔離されるのだ。その暗あん澹たんたる未来を彼女は知らない。
　最年長の新血種族が深刻な顔でバートに問う。
「もし成功しても……私たちが戻る場所は、もうないのよね？」
「ああ……」
　戻れないどころか、もし失敗すれば生いけ贄にえにされ、避難の矢や面おもてに立たされる。
　このひどい仕打ちを伝えるべきか迷うが、事後に不意打ちを食らうより、先に共有しておいた方がいいだろう。
「ちょっと話したいことがあるんだ――」
　バートはつらさを押し殺し、ＡＮＳＡ上層部の考えを冷静に伝える。話をするにつれて、皆の表情がどんよりと淀よどみ、憤いきどおり、沈んでいく。
　ミアがギリリと歯を噛かみしめる。
「ワタシたちの実績、全部なし？　搾しぼり取られただけ？」
　ショックのあまり地べたに座り込む者もいる。
　カイエからも笑みが消え、力なく肩を落とす。
　虚脱していく彼女たちを目の当たりにして、バートはやり場のない怒りを覚える。ＡＮＳＡの上層部にも、そして己の不ふ甲が斐いなさにも、ただ苛いら立だつ。

彼女たちを救うには、どうすればいいんだ。レフがイリナを世界に向けて公表したように、今こそ広告塔である自分が彼女たちの実績を宣伝すべきなのに。

解決策を昨晩から考え続けているが、名案は浮かばない。レフのような演説の舞台を与えられることはないだろうし、兄に頼むのは間違っている。

誰も口を開かず、動かない。

森から響いてくる虫や鳥の合奏に包まれ、光り輝く太陽にじりじりと灼やかれる。地表に飛び出したミミズが干からびるように、ここで朽ち果てるのだろうか。

己の無力さを恨んだそのとき、遠くでトランペットが高らかに鳴り響いた。『ジャズ・フューネラル』だ。バートがすれ違ったときは暗い葬送曲だったが、今は明るい『太陽と月の行進』に変わっている。この風変わりな儀式について、カイエは以前言っていた。苦しい現実から解放された魂が天へと行進する歓びを祝うのだと。

耳をかたむけていると、吹き鳴らされる金管楽器の音色やドラムの激しいビートに沈んだ心が揺り動かされ、無理やり高揚させられる。葬儀の参列者たちもこんな気分なのだろうか。

収穫祭で見たエネルギッシュなお祭り騒ぎがバートの脳裏に浮かぶ。生まれて初めて体験した新血種族の儀式は衝撃的で、心に深く焼きついている。この新血種族の儀式こそ、広報活動でジェニファーが望んでいた強い訴求力を持つものだったのだろう。

今さら、もう遅いけれど。

「……ん？」

遅くなんてない。

人間の知らないこの方法ならば、必ずや世界の目を引くはずだ。

演説の舞台が用意されないならば作ってしまえばいい。カイエだけで

なく、室員の皆を世に知らしめることも叶えられる。
「―行進だ」
　バートの呟つぶやきに、カイエたちが「行進？」と首をかしげる。
「今から、ロケット発射センターまで行進をしよう」
　キョトンとするカイエたちに、バートは自信をもって提案する。
「湾岸地区は見物客で溢あふれていて、各国のマスコミも来てる。そこで派手に騒いで宣伝するんだ。宇宙飛行の軌道計算や着水ポイントを弾はじきだしたのはみんなだと」
「本気で、言ってるの……？」
「本気だよ。このまま何もせず、指をくわえて見ているだけなんて、絶対に後悔する。ここから二時間も歩けば着くはずだ」
　ミアが、バートを射抜くように見つめる。
「アナタ、研究所をクビになるよ」
「っ……」
　率直な物言いに心臓を貫かれたが、バートは耐える。
「うん……たぶん解雇されると思う。兄さんや家族にも迷惑をかけるかもしれない」
「ワタシたちの味方をする人間は、［ソーラーフレア・クラブ］に殺されるかも」
　覚悟を計っているのか、ミアは冷酷に追及してくる。
　だが、退ひいてはいけない。
「……これは、僕なりの覚悟だ。僕がみんなのために何かしたからって、人間の犯した罪が消えるわけじゃないし、赦ゆるされるわけじゃない。自己満足かもしれないけど……みんなの実績を世間に伝えたい。僕は四月から研究所の各部署でいろいろな研修を受けたし、空軍の技術部にも居たけど、そのなかでもDルームは間違いなく最先端だ。みんなといっしょに仕事をして、コンピューターを操る技術がいかにすごいか思

い知らされた」
「ふーん……」
　色のない返事をしたミアは、カイエに目を移す。
「カイエさんはどうなんですか？　人間居住区を歩いたら、確実に騒がれますよ？」
　指摘されたカイエは「うん……」と頷うなずいただけで、行進について肯定も否定もしない。
　彼女の恐怖心は痛いほど分かる。
　けれど、葬ほうむられる前に、道を切り拓ひらく手助けをしたい。
　バートは想いを込めて、強くカイエに訴えかける。
「君は誰にも迷惑をかけてない。カイエは悪くないんだ。それどころか、君の力があったからこそ、兄さんの弾道飛行は成功して、今日がある。その事実が、どうして隠されなきゃいけないんだ。僕は、悔しい……」
　爪つめの跡がつくほど、拳こぶしを強く握にぎりしめる。
「バート……そんなふうに思ってくれているの……？」
　カイエに切なげに見られて胸が痛む。
「もっと早く思って、動かなきゃ駄だ目めだった……」
　バートは顔を上げ、室員たちと向き合う。
「人間の僕が言うのはおかしいかもしれない。ふざけるなって思うかもしれない。でも、僕は、みんなと月への道を歩きたい。宇宙への道は、僕たちが切り拓ひらくんだ」
「ワタシたちと……？」
「他に誰がいる？」
　真剣な眼まな差ざしを向けるミアたちにバートは強く頷うなずく。
　そしてカイエの前に立ち、切々と語りかける。
「今日の軌道飛行は連合王国と共和国の戦いじゃない。新血種族とこの

国の、悪あしき歴史を巡る戦いだ」
「歴史……？」
　彼女の揺れる瞳ひとみを、バートはまっすぐに見つめる。
「君が先頭に立ち、歴史を変えるんだ。コンピューターが科学の歴史を変えたように、新血種族の、人類の歴史を変える。素晴らしい能力を持つ君なら、きっとできる」
「素晴らしい、能力……」
　懐かしい言葉を聞いたかのように繰り返し、カイエは、そっと胸に手を当てる。
「歴史を、変える……」
　朱あかい瞳はじんわりと潤うるんでいき、そして彼女は唇を震わすと、目を伏せて、大粒の涙をぽろぽろと零こぼす。
「ん……んっ……」
　とめどなく溢あふれる涙にバートは戸と惑まどい、声をかけられない。ミアたちも互いに顔を見合わせて、どうしたのだろうと困っている。
「カイエ……？」
　バートが呼びかけると、カイエは涙を拭ぬぐって顔を上げる。
「大丈夫……ちょっと思い出しちゃっただけ……」
　カイエは光る涙を睫まつ毛げに宿したまま微ほほ笑えむ。
「バートは、いいお母さんになれるかもしれないね」
　聞き違いかと思った。
「僕が、お母さん……？」
「なんでもないよ」
　そしてカイエは、ミアたちに呼びかける。
「私、行進することに決めた。これからの歴史を作るために歩く」
「はい、カイエさん」

ミアはわずかに笑みを見せ、皆も覚悟を固めたように、しっかり頷く。
カイエは凛りんとして首を上げる。
「私は、月なんて大嫌い」
そして、哀かなしみを吹っ切るように髪をかきあげると、人差し指を天に突き立てる。
「だから、私たちのブルーエンジェルを飛ばして、誰も悪さできないように征服してやるの」
ふふっとカイエは笑うと、悪戯いたずらっぽく片目を瞑つむった。

Dルームの面々は商店街の一角にある公園に集まり、行進の準備をする。誰もデモ行進に参加したことはないが、見よう見まねで、手先の器用なバートを中心に実績をアピールするための道具を作る。
ハリケーンの被害で捨てられた物品や廃材を利用して、ボロ布やカーテンを棒に巻きつけて旗に、シーツを横断幕に仕立て上げる。急ごしらえなので見栄えが悪いが、それが逆に新血種族の窮状を表していて、異様な凄すごみを帯おびる。
「んぐぅ……ど、どうして……？」
不器用なカイエはボロ布をさらにボロボロにしてしまい、室員たちから「見学していてください」と止められる。
中継を聞いていた住民たちが野次馬に来る。興味深そうに覗のぞく者はいても、邪魔する者はいない。
作られていく横断幕を見ていたカイエが、皆に提案をする。
「世間に覚えてもらうために、『七人の飛行士ヘルメスセブン』みたいな名前あったほうがいいのかな？」
皆々が同意して『チームDルーム』『新血種族革命団』『プロジェク

ト・コンピューター』などの意見を出すが、どれもピンと来ない。
　ふとバートは思いつき、カイエに紙とペンを渡す。
「カイエのお母さんの名前、教えて」
「リベルテだけど……どうして？」
　これまでカイエからいろいろな話を聞いて、彼女にとって母の存在がすごく大きいのだとバートは感じていた。だから──
「ブルーエンジェルと合わせて『リベルテ・エンジェル』はどうかな」
　母の名を紙に綴つづっていたカイエは「えっ」と手を止めた。
「もちろん、カイエが迷惑じゃなければだけど。リベルテは自由という意味でしょ？　『自由の天使』なら意味も悪くないし」
「……私は嬉しいけど……でも」
　カイエが室員を見回すと、各々、賛成の意思表示をする。
「じゃあ、決定かな」
　バートが確認すると、カイエは少し声を震わせる。
「みんながいいなら、バートの案で……私のお母さんの名前で……」
　そこまで言うとすっと立ち上がり、泣きそうな顔を誤ご魔ま化かすように微ほほ笑えむ。
「マーチングバンドに演奏を頼みにいきましょう、バート」
　バートとカイエはミアたちに道具作りを任せると、先ほどの葬列の演奏を終えて教会の前でたむろしているマーチングバンドに声をかける。
「ロケット発射センターまで？　何を言っているんだ？」
　四〇歳前後の一〇名の奏者に訝いぶかしげな顔で対応されるが、バートとカイエは事情を話し、真剣に頼み込む。
「暗い歴史を葬ほうむって未来へ進む……そのための葬送行進です」
「ふむ……」
　最初は乗り気でなかった奏者たちはふたりの話に聞き入り、ついにリーダー格のドラマーが鼻息荒くスネアドラムをバシッと叩たたいた。

「いいね、おもしろい。正直、俺は宇宙開発なんてクソだと思ってる。あんなもの人間のための計画だからだ。でも君たちは、新血種族のものにしようと闘うんだろ？　だったら進軍のマーチを演奏してやる」
「ありがとうございます！」
「けど、鼻血のあんちゃん、見かけによらず根性あるな」
「鼻血……」
　収穫祭で転んだときの失態で、バートの顔は覚えられてしまったようだ。まあ、悪事で覚えられるよりはマシだろう。
　野次馬の数が数十名に膨ふくれ上がったところで、行進の準備はあらかた整い、最後に、大きな旗にスローガンを書く段になる。
　しかしDルームには、オペレーション部門の『ビート・ザ・ブラックドラゴン』のような主張はなく、カイエは無地の旗を前に唸うなる。
「何を書いたらいいの？　数式？　ＦＯＲＸフオークス？」
「それだと誰も分からないし……たとえば、『フライ・ミー・トゥ・ザ・ムーン』にかけるとか──」
　提案したバートは宙そらを仰ぎ見て、ハッと気づく。
「月へ飛ぶのは宇宙飛行士で、僕たちは飛ぶ側じゃない。だから『フライ・ミー』じゃなくて『フライ・ユー・トゥ・ザ・ムーン』とかどう？」
　迷う間もなく、カイエはポンと手を叩いた。
「それがいいわ。私たちが月へ導いてあげましょう」
　黄色のペンキと刷は毛けを手に、カイエが力を込めて書きつける。下書きせずに描いたせいで生き地じからはみ出しそうになったが、それもまた彼女の想いの強さだ。
　書き終えたところに、野次馬を割って、スキンヘッドの新血種族が現れる。紙袋を手にしたその男は不愉快そうに顔を歪ゆがめ、カイエの前に立つ。

顔を上げたカイエは男を見てギョッとする。
「お父さん……!?」
バートをはじめとした室員たちが戸と惑まどう横で、カイエの父は娘に厳しい目を向け、酒焼けした声で言う。
「また馬鹿な真ま似ねをするようだな」
「ごめんなさい。でも、私はやります」
父と娘の視線が、真っ正面からぶつかる。バートがハラハラしていると、カイエの父はぶっきらぼうに、紙袋をカイエに差し出す。
「どうせ止めても行くんだろ。俺は行かないが、こいつを連れてけ」
紙袋を受け取ったカイエは袋を開いて、目をぱちくりさせる。
「これ……」
宝物を扱うように袋から取り出したものは、月下美人の髪飾りだ。茎がワイヤーとテープで綺き麗れいに補強されている。
驚いているカイエとは対照的に、父は表情ひとつ変えない。
「軒下に一輪だけ咲いてた。昼と夜を勘違いしてやがんだな」
そう言った父はカイエから視線を外すとバートをジロリと睨にらみ、歩み寄る。
「えっ……？」
ただならぬ恐怖を感じてバートが硬直すると、カイエの父はいきなり腕を振り上げて、バートの肩をバシッと平手で叩たたく。
「痛っ！」
肩が外れそうな重い衝撃が身体からだを走る。
「今度カイエに何かあったら、ただじゃすまねえぞ」
「は、はい……すみません、気をつけます……」
カイエの父は、肩をさするバートを一いち瞥べつすると、振り向かずに去って行く。
ほとほと困った様子のカイエはコソッとバートにささやく。

「極度の人間嫌いだから。乱暴でごめんね」
「いや……」
　叩かれた肩がビリビリと痛むが、それは受け止めねばならない痛みだと、バートは心に留める。
「でも、わざわざ、髪飾りを届けに来たの……？」
　肩をすくめて苦笑するカイエ。
「口下べ手たなのよ。帰ったふりして、そのへんで見てるかもね。収穫祭にもこっそり来てたし」
　祭りのときに睨にらみつけてきた男がカイエの父だったのだと、今さら気づいた。外見は怖いが娘思いなのだなと、バートは少しおかしな気持ちになる。
　カイエは手にした髪飾りに優しく口づけすると、髪に挿さす。宗教画に描かれる聖女のような美しさに、バートの胸が高鳴る。
　彼女はまさに、自由の天使だ。

「みんな、そろそろ行きましょう」
　カイエが皆を促し、隊列を決める。
　デモ行進のようなことをするなど、生まれてこのかた、バートは考えもしなかった。できるだけトラブルを避け続けてきた人生だったが、今ここに過去の自分は葬ほうむる。
「言い出した僕は責任を持って先頭を歩く」
　きっぱりと宣言したバートは、カイエに決断を委ねる。
「君はどうする？」
　彼女が人間居住区を歩けば、悪意をぶつけられるのは間違いない。それを考えると、列の真ん中で皆に守るべきかもしれないとバートは思うが―
「私も先頭に行く。Ｄルームを率いてきた責務があるし、それに、バー

トの隣には自分がいないといけないから」
　カイエはバートの隣に堂々と立つ。そしてふたりの後ろにミアたちが並び、マーチングバンドが楽器を構える。
　公園の入り口に、総勢三〇名の勇士が揃そろう。
　いよいよ、出発のときだ。
　電器屋の主人が「宇宙船が気になるだろ？」と貸してくれたラジオにスイッチを入れる。
　ノイズに混じって、生中継が流れる。
《──午後四時を回りました。『グロリアスVII』は、あと一〇分ほどでアーナック大陸の西端に差しかかります。軌道飛行一周目、現在、順調に航行中》
　今は順調でも、安価な材料の寄せ集めである宇宙船がどこまで持つかは、誰にも分からない。実験飛行をやらずに強行軍の打ち上げとなったため、不安要素しかなかった。とくに、大気圏の再突入と着水は難関だ。もし行進中に失敗のニュースが流れれば、バートたちは針のむしろだろう。
　だが、進むしかない。
　バートは、自分の背丈ほどもある旗を持ち上げる。
　そして、いつもの成功の魔法をつぶやく。
「さあ」
　行こう──と、レフの言葉を唱えかけて、バートは口を閉ざす。
　違う、自分はレフではない。
　宇宙飛行士の弟でもない。
　自分は自分だ。
　バートは皆を振り向き、呼びかける。
「これまで何万枚と作ってきたパンチカードのプログラムを、今、実行しよう」

月の影から光を目指し、世界へ手を振って行進する。
「プログラム、『ハロー・ワールド』」
いざ、ロケット発射センターへ。
宇宙飛行士が時速二八〇〇〇キロで飛ぶ宙そらの下、時速五キロの行軍だ。
バートが旗を天に突き上げると、それを合図に演奏が始まる。
ドラムが威勢良く叩たたかれ、トランペットやトロンボーンが青空に鳴り響く。心躍る音楽に誘われて群衆が集まってくる。
陽気な『太陽と月の行進』に背中を押され、一歩、また一歩と前に進む。
カイエは音楽に合わせて手拍びよう子しし、室員たちは幾本もの旗を掲げ、横断幕を広げ、高い空に響く声で歌う。

〈ああ、太陽が沈むとき……〉
〈神よ、私を月へ導いてください！〉

合唱に替え歌で答える。

〈おお、太陽が沈むとき……〉
〈私たちが、月へ導いてあげましょう！〉

人前で歌うことは苦手なバートだが、皆に合わせて歌う。
街頭テレビに群がる住民には首をひねる者もいるが、拍手で見送る者のほうが圧倒的に多い。『ジャズ・フューネラル』同様に、後ろについてくる者たちもいる。
痩やせ細った子どもたちがカイエに駆け寄る。
「俺たちも行く！」

「あなたたち……」
「行くったら行く。なあ、バート様、いいだろ？」
「いいけど……『様』は、やめてくれないかな……？」
「オッケー、バート！」
　さんくらいは付けろよと笑いそうになる。
　スーパーマーケットの老店主と店員が、大量のジュースの瓶びんを台車に載せて現れる。
「持ってけ。ワシも行きたいが、途中でぶっ倒れちまうからな」
「ありがとうございます」
　バートが頭を下げると、老店主は舌打ちして指を横に振る。
「人間のお前に、タダでやるとは言ってないぞ」
「あっ、すいません……」
　金を払いたくても、財さい布ふは研究所だ。すると老店主は、額に皺しわを寄せて苦笑する。
「ツケといてやるよ。カイエちゃんに免じて」
　困ったように笑うカイエに、老店主は言う。
「いつも老いぼれの愚ぐ痴ちに付き合ってくれてありがとうな。国もＡＮＳＡも気に食わないが、子どもの頃から応援してるカイエちゃんが認められるのは、本当に嬉しいんだよ」
　老店主はポケットからストロベリーキャンディを二粒取り出し、カイエに渡す。
「ほら、月までのエネルギーだ。家より遠いから倍やろう」
「あっ……ありがとう」
　カイエはストロベリーキャンディを一粒、懐かしそうに口に入れると、赦ゆるされてホッとするような微ほほ笑えみを浮かべる。

〈ああ、太陽が沈むとき……〉

〈神よ、私を月へ導いてください！〉

金管楽器の音色に合わせて、高らかに歌い上げる。
ドラムが正確なビートを刻み、雀や野良猫も踊る。
おもしろがって列に加わる住民も続々と増えている。
収穫祭を開催した砦とりで跡と、共同墓地の区画に到達する。
「どうも、バートさん」
声をかけられて振り向くと、研究所のトイレでよく顔を合わせる新血種族の男性だった。
「俺もついていっていいかい？」
その真剣な眼まな差ざしは、虐しいたげられている毎日を変えたいと訴えている。
「もちろん。……その前に、トイレは済ませた？」
「ハハッ、あなたこそ」
軽口を叩たたき合う横で、カイエは共同墓地に向けて、胸の前で両手を合わせる。
「見ててね、お母さん」
カイエの祈りに応えるように、墓地から柔らかな風が吹き、月下美人の花びらを揺らした。

一ブロック、二ブロック、三ブロック。進めば進むほど参加者が増え、一〇〇名を超える大所帯に膨ふくれ上がる。意味も分からず行列についてきている者もいるようだ。
燃え盛る太陽は容赦なく照りつけ、汗が滴したたり落ちる。しかし、まだ始まったばかりだ。
行進はミジービ川に架かる橋を渡り、ブラッド・ラインを超える。
ラジオから宇宙船の経過報告が流れる。

《―現在、『グロリアスVII』はアーナック上空を通過中。見事、一週目を終えて、二週目に入ります》
　バートは空を見上げる。
　宇宙船は見えないが、自分の携たずさわった宇宙計画が確かにそこにある。
「成功してくれよ……」
　切なる祈りを天に投げる。

〈おお、太陽が沈むとき！〉
〈私たちが、月へ導いてあげましょう！〉

　橋を渡りきり、人間居住区へ踏み入ると、がらりと風景が近代的に変わる。道は舗装され、ボロボロの小屋は見当たらない。
　敵地に萎縮しそうになる室員たちをバートが鼓舞する。
「遠慮はいらない！　歌って進もう！」
　行進は勢いを弱めるどころか堂々と胸を張り、聖地を目指して進軍する。
　マーチングバンドのリーダーが大声で叫ぶ。
「さて、景気づけに一発、人間にもお馴な染じみのヒット曲をやってやるぞ！」
　ダダダッとドラムが軽快なリズムを叩たたき、金管楽器の音色もウキウキと弾む。

〈どこの国の言葉でも、愛いとしいと言いたい！〉

『愛しのあなた』だ。テンポが速く、スウィングして、原曲よりも陽気にアレンジされている。

カイエが曲に合わせて手拍びよう子ししながら、バートに話しかける。
「イリナが好きな曲だね」
共和国の新聞紙『真実』の特別インタビューで「人間文化で好きなものは？」と問われたイリナは「ジャズが好き。とくに『愛しのあなた』」と答えていた。「愛しのあなたは、レフでないか？」という野暮な質問には「レフなんかより炭酸水が愛しい。世界中の炭酸水が飲みたい」と突き放した回答をしていたが、誌面には、イリナがどんな表情でそう答えたのか書いていなかった。
新血種族の行進は繁華街へ突入する。
街頭テレビで宇宙飛行の生中継に耳をかたむけていた人々は、騒がしい大行列に目を見張る。
「デモ行進？」と最初は差別撤廃を訴える活動家と勘違いされるが、旗が風になびいて『フライ・ユー・トゥ・ザ・ムーン』のメッセージが広がると、「リベルテ・エンジェル？」「『変人の天国ナード・ヘヴン』の連中か？」と気づかれる。
路面電車やバスから人々が身を乗り出して見る。
ここまではいい感じだ。
街頭テレビが飛行情報を伝え、群衆が沸く。
《―スティーヴ・ハワード飛行士の声が宇宙から届きました。『世界はとても美しい。神が創造したとしか思えない』》
レフの「神はいない」発言への対抗心だろうか。だが、宇宙飛行士がどんな光景を目にしているのか、地上からは想像するしかない。写真で見るのと体験するのとでは、全然違うのだろう。
〈ああ、太陽が沈むとき……〉
〈神よ、私を月へ導いてください！〉
神がいてもいなくても関係ない。導くのはリベルテ・エンジェルだ。

音楽に釣られて現れる人間もいるが、新血種族の大群に眉まゆをひそめる者がほとんどで、行列についてくる人間はいない。

そして注目が集まるほど、カイエに差別的な視線が投げられる。

「噂うわさの吸血鬼だ。噛かまれるぞ」「怪物は病院にぶち込んでおけよ……」

数々の心ない中傷に口もとを歪ゆがめるカイエに、バートは声をかける。

「耳を貸さなくていい。何を言われようと君の価値は傷つかない」

「そうね……」

カイエの表情に明るさが戻り、かすかに笑みも浮かべる。

「私や吸血鬼症候群のことがもっと世の中に知られれば、治療法を研究したいっていう変人が現れるかもって……思うようにした」

しかし、繁華街の中心部に入るほど【人間専用】の看板が目立ち、誹ひ謗ぼう中傷は増える。

酒場の前にいるガラの悪い一団が、嫌悪を露あらわに嘲笑し、罵ば声せいを浴びせてくる。

「そのまま刑務所に行進していけ！」「ダークサイドに帰れ！」

その叫びは新血種族に対する憎悪ではない。単なる憂さ晴らしだ。しかし、くだらない野次でも子どもたちにとっては身を震わせるほどの恐怖で、びくびくと怯おびえる。

人間の悪意を甘く見ていた。バートは子どもの同行を許可したことを悔やむ。

「しまったな……」

野次は容赦なく機銃掃射のように子どもを撃つ。「血を抜いて殺すぞ！」「棺かん桶おけで永遠に寝てろ！」

「可か哀わい想そうでしょ……！」

耐えかねたカイエは行進に同行していた屈強な大人に頼み、子どもた

ちを月げつ影えい区くへ連れ帰らせる。別れ際、カイエは泣きそうな顔の子どもたちを抱き締める。
「ごめんね。こんな世界、絶対に変えてみせるから」
「うん……俺たちカイエを信じてる」
　想いをぶち壊すような心ない罵ば声せいはバートにも飛ぶ。
「新血種族に味方しやがって」「コウモリ野郎」「女に血を吸われる気分はどうだった？」
　あまりの低俗さに、バートは吐き気をもよおす。
　だが相手にしない。相手をしたら負けだ。
　今日の目的はべつにある。
　旗を掲げ、胸を張って行進を続ける。
　それでも、いくら進んでも悪意は衰えず、ミアの持っている横断幕にどこかからトマトが投げつけられた。ミアはビクッと足を止めて、落ちて潰つぶれたトマトを静かに見つめる。
「ミア……！」
　カイエに心配されたミアは顔を上げ、平然と振る舞う。
「トマトがもったいないですね。罰が当たりますよ」
　顔や言葉は強がっていても、横断幕を持つ指先に力が入っている。
　投げられるものがトマト程度ならいいが、傷つける物が飛んできたらと思うと、バートは全身の汗が一気に冷えた。とくに先頭を歩く自分は［ソーラーフレア・クラブ］からすると、新血種族を擁護する人権活動家に見えるだろう。
　身の危険を感じた。
　だが、覚悟して先頭に立ったのだ。言い出した者が、足を止めるわけにはいかない。宇宙飛行士が命がけで宙そらを飛ぶなら、技術者も命がけで宇宙への道を進んだっていい。それぞれがそれぞれの思いで、今日の打ち上げを迎えたんだ。

騒がしく歌い踊る行進は軌道飛行並みに注目を集め、市民のあいだでは確実に話題になっている。「コンピューター？」「ヤツらが宇宙船を飛ばすのに一役買ってるらしい」という声が聞こえる。所長に知られたら大目玉を食らうとしても、広報活動の手応えはある。「警察に通報しよう」と騒ぐ連中がいたのは気に掛かったが、今のところ大きなトラブルはない。

繁華街を抜けたところで、午後五時を告つげる大聖堂の鐘が鳴り響く。【ロケット発射センターまで三キロメートル】という標識に到達した。

ここから湾岸地区までは未開拓の地で、住居がめっきり少なくなり、原生林や草むらに沿った寂しい街道となる。罵ば声せいを浴びせていた人間たちもここにはいない。

意気揚々と進みたいところだが、さすがに皆、疲れてくる。暑さに体力は削られ、見える敵を失って張り合いをなくし、マーチングバンドや合唱も勢いを失い始める。スーパーマーケットで貰もらった飲料も残り僅わずか。ミジービ川を渡ったときには一〇〇名を超えていた大所帯も、いつのまにか数を減らしている。

旗を掲げて歩き続けたバートは腕が限界に近い。パンチカード運びで鍛えたとはいえ、元来、虚弱体質なのだ。それでも我慢して、息を上げながら歩いていると、カイエが旗の柄に手を伸ばす。

「私が持つよ。手拍びよう子ししてただけだから余裕あるし」

「ごめん……少しのあいだ、よろしく」

旗を受け取ったカイエは天高く掲げる。

「行きましょう」

陽は傾き始め、野原にそびえる巨大な鉄塔が長い影を伸ばす。

《□□ＡＮＳＡより緊急情報が入りました》

ラジオから流れた不穏な言葉に、バートもカイエもハッと足を止める。演奏を中止し、ボリュームをあげて、皆で聴く。
《―軌道飛行は地球を三周する予定でしたが、二周で終えると変更されたようです》
理由は発表されない。何らかの異変が発生した結果、フライトディレクターのデイモン部門長が判断を下したのだろう。
この先に起こりえる事態を推測する。
「飛行中の変更ということは、おそらく船内の不具合だろうけど……」
トラブルの原因は予算不足による粗悪な部品かもしれないが、もし帰還や着水時に失敗すれば、カイエたちに責任がなすりつけられる。
カイエも同じ懸け念ねんを抱いているようで、旗の柄を握にぎる手に力が入る。
「ＡＣＥの計算では、何週目で終わっても対処できるように数値は出てる。けど……」
宇宙船からも管制室からも離れた自分たちにできることはない。
《―『グロリアスVII』は、これよりアーナック大陸上空を通過し、大気圏に再突入後、東の海へ着水する予定です》
皆、沈ちん鬱うつに空を見上げて飛行の無事を祈る。
不安に苛さいなまれて暗くなりかけるが、バートは手を叩たたいて元気づける。
「とにかく進もう。飛行の結果がどうあれ、みんなの果たした役割をマスコミにきちんと説明するしかない」
「ええ、そうね！」
カイエが皆と向き合い、明るい顔で声をかける。
「休憩は終わりよ！　行きましょう！」
号令に合わせて陽気な『太陽と月の葬送』がスタートし、背中を押されるように行進を再開する。

歌と手拍びよう子しに合わせて歩を進め、軍事車両の墓場へ到達する。

この区画を超えれば、海に出る。【宇宙への道】という看板が立ち並ぶ湾岸地区だ。

不気味なほどに大きな夕陽が頭上で輝く。

荒野に積み上げられた軍事車輌が、暗く赤い血の色に染まる。

《──『グロリアスVII』はアーナック上空を通過、間も////大気圏//再//////////し》

ラジオの音声にノイズが混じったかと思うと、唐突に、ブツリと電源が落ちた。電池切れか故障か分からない。

「大事なところなのに……」

軍事車両の墓場から、生温かい風が吹く。

バートは旗を振り、鼓舞する。

「先へ進もう……！」

靴くつ擦ずれで足が痛み、旗を握にぎる手も疲れてくるが、前に踏み出す。

道路の果て、夕陽の落ちる向こうに、黄金にきらめく海が姿を現した。

「もうすぐだ！」

ロケット発射センターへの看板が見えた。海沿いの街道は人々で賑にぎわっている。

湾岸道路へあと一歩──

すると目の前で、夕陽よりも赤いライトが不気味に輝いた。

パトランプを光らせる一台の護送車と、一〇名の騎馬警官が湾岸道路に現れ、バートたちに向かってくる。

「あれは……州警察？」

交通誘導ではない。カイエの表情が曇る。

騎馬隊は広がって道を塞ふさぎ、行く手を遮さえぎる。
バートは前を見据えたまま声を絞り出す。
「……気をつけたほうがいい」
カイエも旗の柄を地面につけ、警戒する。
「阻止するつもりね……」
後列を歩いていた者たちが、行進が止まったことを不思議に思って前に来て「あっ」と短い悲鳴を上げる。
騎馬警官二名が高圧的な態度で近づいてくるが、どちらも憎々しげに口を歪ゆがめている。
「貴様ら、何をしている」
バートが前に出て、話をつけにいく。
「バスに乗車拒否されてるので、ロケット発射センターへ歩いているだけです」
だが騎馬警官たちは聞く耳を持たない。
「吸血女と、血を吸われた男か……解散しろ」
「続ければ煽せん動どう罪ざいで逮捕する」
脅されるが、バートは引かない。
「これはデモ行進じゃなくて、ＡＮＳＡの広報活動です」
「無許可だろう。市民から通報があった」
カイエも一歩前に出て、騎馬警官と対たい峙じする。
「『新血種族が人間居住区を演奏しながら歩いてはいけない』という州法はありません」
「煽動罪に公務執行妨害」
騎馬警官はカイエを見下ろし、犯罪者に対する冷酷さで、腰に提げた拳銃を揺らす。
だがカイエは引かない。
「殺害事件を放置する警察など、私は警察と認めない。だから従わな

い」
　騎馬警官二名は顔を見合わせて頷うなずくと、カイエに接近する。
「まずい……」
　バートが止めに入ろうとしたとき、騎馬警官の一名が馬に乗ったままカイエに体当たりを仕掛ける。
「危ない！」
「きゃっ！」
　カイエは馬の巨体をぶつけられ、もんどり打って倒れる。手にしていた旗が地面に投げ出される。
「カイエ！」
　バートはカイエの前に飛び込み、抱え起こす。
「大丈夫!?」
「平気……」
　痛そうに呻うめくカイエは腕や膝ひざを擦すりむき、血が滲にじんでいる。
　バートは馬上の警官をキッと睨にらむ。
「どうして、こんなことするんですか……」
　警官は蔑さげすむように舌打ちする。
「邪魔をするならお前も同罪だ」
「悪いことはしてません」
　歯向かうと、非情な顔をした騎馬警官が猛然と詰めてくる。またぶつかる気だ。バートは身を挺ていしてカイエをかばう。
「痛ッ！」
　腰にガツンと衝撃と激痛が走り、突き飛ばされたバートは顔から地面にぶつかる。転げ落ちたメガネを馬がぐしゃりと踏み潰つぶした。
「バート！」
　カイエが身を起こして叫ぶ。

「くうっ……」
　唾つばに血の味が混じる。腰が痺しびれて立ち上がれない。
　ミアたちは動けずに立ちすくむ。
　湾岸にいる見物客たちの一部が遠目に覗のぞいている。
　控ひかえていた騎馬警官が手て錠じようを出して、ぞろぞろとカイエを取り囲む。
「カイエ・スカーレット。煽せん動どう罪ざいに公務執行妨害、およびバート・ファイフィールドを吸血した傷害罪で逮捕する」
「ふざけるな……！」
　バートは込み上げる怒りを噛かみ殺し、旗の柄で身体からだを支えて立ち上がり、警官隊にあらためて対たい峙じする。

「カイエが何をした……」
　バートは一歩前に出る。
「彼女は夢を追っているだけだ……」
　蹴けられた腰も、額も腕も足も、全身が痛む。
　だが、カイエの受けた痛みは、こんなものではない。
「あなたたちに、彼女を逮捕する権利なんてない」
　バートはカイエの隣に立ち、旗を警官に突き出す。
「僕たちが切り拓ひらく宇宙への道を邪魔しないでくれ！」
　必死に訴えるが、警官隊は無表情で、今にも銃を抜かんばかりに殺気を放つ。こちらが退ひかないことには無事では済まない。
　こんな場所で、悪意に敗れ、朽ちるのか。
　絶望に落ちかけたとき──
　ワアアッ！
　突如、湾岸道路が湧わいた。「万歳！」「グロリアス！」という叫びが聞こえる。
　警官も含めた皆が驚き戸と惑まどう。
「まさか……？」
　バートはカイエと目を合わせる。
「成功した……!?」
　警官隊は無線で成功を確認し、無表情を徹しているが、感情を抑え切れぬように唇をわなわなと震わせている。
　バートは溢あふれそうになる歓びを飲み込み、動揺している室員の皆を振り返る。
「みんな、このままじゃ手柄を持っていかれて終わりだ！」
　カイエもバートに追随して呼びかける。
「成功したんだから、実績を誇り、胸を張って歩きましょう」
　バートとカイエは頷うなずき合う。

「さあ、行こう！」
　言ってから、レフと同じ言葉だったなと気づき、内心で苦笑いする。
　いや、もう細かいことはいいんだ。
　バートは旗を天高くかざす。萎しおれていた旗が海風に翻り、夕空になびく。
　カイエがマーチングバンドに向けて手を挙げる。
「音楽を鳴らして！」
　ドラマーが「オッケー！」とドラムスティックを打ち鳴らす。
「一、二、三！」
　タンタンタンタタン！
　息を吹き返したマーチングバンドが『太陽と月の行進』の陽気な演奏を始める。
　〈おお、太陽が沈むとき！〉
　〈私たちが、月へ導いてあげましょう！〉
　隊列の後ろからぞくぞくと新血種族が前に押し寄せる。怯おびえていたミアたちも一歩、そしてまた一歩進む。
　音楽と歌の猛烈なエネルギーが警官隊に襲いかかる。
　驚いた馬たちがいななき、警官の言うことを聞かなくなって右往左往し、ずるずると後退する。
「進め！」
　バートは旗を振り、行進を鼓舞する。
「この先に宇宙が……僕たちの未来がある！」
　新血種族の大群が騎馬隊を押し流していく。
　〈おお、太陽が沈むとき！〉
　〈私たちが、月へ導いてあげましょう！〉
　湾岸にいた見物客がバートたちに注目し、「彼らはＡＮＳＡらしいぞ！」と声を上げ、浮かれ気分で祝いの歌を返す。

〈私たちを月へ導いてください！〉と。
　怒ど涛とうの行進は護送車ものみ込み、騎馬警官たちは舌打ちして撤退する。
「よし！」
　ついに宇宙への道へ辿たどり着いた。ロケット発射センターまで一キロ。
「あと少しだ！」
　そこへ、クラクションを鳴らして空軍のトラックが走ってきて、バートに併走する。
　まさか、また止められるのかと身構える。
　運転席から顔を覗のぞかせたのは、かつてイベント会場でサインをした熟年の空軍兵だ。
「聖地まで先導してやろう。また面倒な輩やからが出たらコトだろう」
「え？」
「助けてやると言ったはずだぜ？」
　熟年の空軍兵は親指をグッと立てると、ラジオのボリュームを最大に上げる。
《──予定よりも一周短い飛行とはなりましたが、我が国初の有人軌道飛行の栄光を祝福しましょう！》
　疲れが吹き飛ぶ。
　バートたちは合唱しながら威風堂々と行進し、ロケット発射センターへと真まっ直すぐに向かう。
　赤く燃えるような美しい夕空に、薄汚れた手作りの旗が広がる。
　沿道で打ち上げ成功を祝っていた大勢の見物客は、いきなり現れた新血種族の行進に驚くが、お祭り気分で、老若男女、種族を問わずつぎつぎ行列に参加してくる。カメラマンたちが行進にカメラを向け、何十枚も写真を撮る。

ハロー、ワールド。
見てくれ、彼女たちが地上の英雄だ。
「リベルテ・エンジェル！」
人々は連呼し、誇らしげに合唱する。

〈太陽が沈むとき！〉
〈自由の天使よ、私を月へ導いてください！〉

バートたちが自信を持って歌を返す。

〈私たちが、月へ導いてあげましょう！〉

見物客に受け入れられ、確かな手応えをバートは感じる。
カイエは牙きばを隠すことなく、大きな口を開けて歌う。月下美人が風に揺れ、尖とがった耳が出ても、まったく気にしない。宝石のような綺き麗れいな瞳ひとみは、夕陽に照らされていっそう朱あかく、きらきらと輝く。
バートは歌いながら、隣で歌うカイエと笑顔を交わす。
以前は、人前で大きな声で歌うのは恥ずかしかったが、今は胸を張り、誇らしく歌える。
誇れるものができたからだ。

太陽は水平線の果てに落ち、深い藍あい色いろの空には、綺麗な半月が浮かんでいる。
ロケット発射センターの正門近く、ニュースセンターの前は報道陣で溢あふれ、防波堤から人々がこぼれ落ちそうになっている。
何百人に膨ふくれ上がった大行列を率いてバートたちが到着するや否

いなや、真っ先に、ジェニファーと『リヴィン画報』の記者が心底慌あわてた様子で駆けてくる。
「あなたたち、何してくれたのよ!?」
「ご覧のとおり広報活動です」
　バートが大行列に向けて旗を振ると、コールが巻き起こる。
　―リベルテ・エンジェル！　リベルテ・エンジェル！　リベルテ・エンジェル！
　さらにカイエがマーチングバンドに向けて両手を大きく広げて、煽あおるような指揮をする。激しい稲妻のようなパワーに満ちた演奏が轟とどろき、集まっていた報道陣が注目する。
　ジェニファーはうんざりと髪を掻かきむしる。
「―ハァ、もういいわよ。好きにしたら。うちの上司が考える退屈なイベントより、よっぽど話題になってるみたいだし」
　ぼやきつつ、楽しげに肩をすくめるジェニファー。
　報道陣がバタバタと集まり、取り囲んでいっせいにフラッシュを焚たく。そしてマイクを突きつけ、不ぶ躾しつけな質問を飛ばしてくる。
「今日の成功は、ＡＣＥ社の助力が大きかったと資料にありますが!?」
「カイエさん、吸血事件についてひと言！」
「バートさん、コンピューター室の室長になるそうですが、抱負を！」
　ニュースのネタを求め、獰どう猛もうなファイヤーアントのように群がる報道陣にバートは我慢ならず、ありったけの大声で叫ぶ。
「静かにしてください！」
　報道陣はバートの怒声に驚き、固まる。
「伝えたいことがあります。聞いて下さい」
　バートは、腹の底に溜たまっていた想いを切々と説く。
「あなたたちが記事にすべき内容は『新血種族を貶おとしめること』ではなく、将来『月へ到達した偉大な一歩』を書くことではないのです

か？」
　ムッとした顔をする者もいるが、バートは無視して続ける。
「『グロリアスVII』の計算を担当したのは、ＡＣＥ社の社員ではありません。彼女たち新血種族、月げつ影えい区くに住むプログラマーです。そして──」
　カイエに目をやると、彼女の手首を握にぎり、高々と天に掲げる。
「室長は僕ではない。隣にいるカイエ・スカーレットです」
　いきなり手を掲げられて狼狽うろたえたカイエだが、すぐに表情を引き締める。
　バートは彼女の手を握ったまま、報道陣に訴える。
「彼女のお陰で、弾道飛行も軌道飛行も、成功したんです。だが、あなたたちは、それを記事にせず、ありもしない事件で大騒ぎする。ここではっきりさせておきたいのは、僕は彼女に噛かまれていないということです」
　バートはカイエの手を下ろし、報道陣に向けて両手を広げる。
「彼女の優しさを知らないのに、あることないことを書き立てないでください。何も罪を犯していない彼女より、断罪すべき人間はたくさんいるんじゃないですか」
　報道陣は、ただバートの話に耳を傾ける。
「最後に。彼女が新血種族であろうと、吸血鬼症候群であろうと、それは問題じゃない。月へ到達する夢を叶えるためには、手を取り合い、一丸にならなければいけないと思います」
　行進に参加していた者たちや、一部の人間の記者からも喝かつ采さいが上がる。
　バートはカイエに発言を促す。
「カイエ、君も伝えたいことがあるはずだ」
　するとカイエは、凛々しい視線を報道陣に向け、真しん摯しに語りか

ける。
「人間の皆さん。有人軌道飛行を達成した今日という日から、この国の新しい歴史が始まります。きっと今夜は、祝賀会などをして楽しく過ごすのでしょう。そのとき、ただお祝いをするのではなく……」
　カイエは月下美人の髪飾りをそっと外して、大切な宝物を扱うように、手のひらに載せる。
「歴史の裏に、たくさんの犠牲があったことを、どうか忘れないでください」
　彼女の重い言葉の前に、報道陣は絶句する。
　ミアたち新血種族は唇を噛かみしめ、涙をこぼす者もいる。
　そして、カイエが再び髪飾りを挿さしたとき、ロケット発射センターの正門の方で、ざわめきが立った。
「なんだ……？」
　見ると、人混みを割ってやってくるのは、デイモン部門長だ。
　飛行が成功したというのに、デイモン部門長はいつもより難しい顔で、真まっ直すぐにバートたちのもとへ向かってくる。
　何を言われるのかと、バートは身構える。カイエの顔にも緊張が走る。
　沈黙が伝染して、祝祭の場が、異様な空気を帯おびる。
　デイモン部門長はバートとカイエに対たい峙じし、腕組みする。そして眉み間けんにシワを寄せ、低く渋い声でバートたちの名前を呼ぶ。
「バート・ファイフィールド」
「はい……」
「カイエ・スカーレット」
「はい」
　デイモン部門長の鋭するどい目は、成功の喜びなど微み塵じんも感じさせない。

バートは覚悟を決める。研究所を抜け出して、勝手な行動を取ったのだ。ミアに言われたように、クビを宣告されてもおかしくない。

背中を嫌な汗が伝う。

デイモン部門長は腕組みを解くと、バートとカイエの肩を同時に叩たたく。

「よくやった」

ドキッと心臓が跳ねる。

「今回の成功は、君たちが弾はじき出した数値のおかげだ。『プロジェクト・ヘルメス』を代表して、礼を言う」

胸の底に生まれた幸福がじわじわと膨ふくらみ、全身に満ちていく。

「ありがとうございます……！」

バートは込み上げる感情を抑えて、努めて冷静に振る舞う。

カイエはホッとしたように、胸に手を当てている。

すると、硬い表情を崩すことのなかったデイモン部門長が、少し頬ほおをほころばせ、バートに訊たずねる。

「ところで、君たちは私も月へ導いてくれるのか？」

一瞬理解できずに、バートは口が開いたままになる。

「……え？」

デイモン部門長は片眉まゆを上げ、旗のスローガンを指す。

「『あなたを月へ連れて行く』と書いてあるぞ」

「あっ……！」

バートとカイエは顔を見合わせ、ともに笑う。

そしてデイモン部門長はバートとカイエだけでなく、ミアたちや報道陣も含めた全員に向けて言う。

「リベルテ・エンジェルの諸君。私個人としては、人間だろうと新血種族だろうと関係なく、実績で評価されるべきだと考える。君たちはこれまで不遇な扱いを受けてきたと思うが、今日の成功で、晴れて『チー

ム・ハイペリオン』に推薦することができる」
　あの厳しいデイモン部門長に認められた。俄にわかに信じがたく、バートはまるで夢か幻でも見ているような心ここ地ちになる。カイエもミアたちも、歓びと疑問が入り混じったような顔になる。
「『チーム・ハイペリオン』への参加を希望する者は来なさい。私が所長を説得しよう」
　再び難しい顔つきになったデイモン部門長は、ロケット発射センターに向かって歩き出す。
　バートは、どうしていいのか分からず、呆ぼう然ぜんとしてしまう。
「バート、行かないの？」
　カイエは振り向き、満面の笑みを浮かべる。
「私は行くよ」
　バートはようやく実感が湧わき、胸に熱いものがこみ上げる。泣きそうになる気持ちを堪こらえ、平静を装う。
「もちろん、行くさ」
　ロケット発射センターの正門が、新血種族を迎え入れるために開かれる。
　マーチングバンドが奏でる祝福の音楽に乗り、星々の輝きのようにフラッシュが焚たかれる道をカイエと並んで進む。
「ねえ、バート。部門長がああ言ってくれたの……きっとあなたが、ハリケーンの夜に私を推薦してくれたからだね」
「ハハッ、そうだといいな……」
　バートはメガネを直そうと手を鼻に持っていって、メガネをかけていないことを思い出した。
　どうりで視界がぼやけるわけだ。
　誤ご魔ま化かすように前髪を払い、目頭を押さえた。

後奏　Ｐｏｓｔｌｕｄｅ

青の瞳　Ｂｌｕｅ　ｅｙｅｓ

軌道飛行の成功から三日後。連合王国の首都エリクソン特別区では、有人軌道飛行の凱がい旋せんパレードが盛大に行われていた。

英雄である七人の飛行士ヘルメスセブンや、デイモン部門長、ヴィル・クラウス博士らＡＮＳＡの重鎮とともにバートとカイエも式典に参加し、歓声と紙かみ吹雪ふぶきのなか、挨あい拶さつの会場へと車でゆっくりと走る。リベルテ・エンジェルの面々も招待され、沿道から喝かつ采さいを送る。

以前は『宇宙飛行士の弟』と皆から呼ばれたバートも、今では一人前の技術者として見られている。吸血写真のスキャンダル報道をされたカイエも、再び新血種族たちの夢と希望になった。

継続が危ぶまれた宇宙開発も、軌道飛行の成功によって国民の支持が上がり、また、カイエの登場で新血種族からも一定の理解を得たため、『プロジェクト・ハイペリオン』の予算増額が決まった。競争ではいまだに共和国に後おくれを取っているが、月へのレースは始まったばかりだ。

セントラルパークに用意された特設ステージの裏、バートとカイエは挨拶の舞台へ向かって歩く。

壊れたメガネは、青色のフレームに新調した。話を合わせたわけではないが、カイエも今日は青いドレスを纏まとっている。きっとブルーエンジェルをイメージしたのだろうと思うが、敢あえて触れない。

舞台が近づく。

壇上では、連合王国の若き女王・サンダンシア二世と言葉を交わす予定だ。

今回は挨拶を失敗しないようにしなければと緊張が高まり、心臓がバクバクする。

と、ぼんやりと空を見ながら歩いていたカイエが、段差に足を引っかけて転びそうになる。

「きゃ！」

「危ない！」

バートがとっさにカイエの腕を掴つかみ、なんとか転倒は防いだ。

「気をつけなよ……」

小声で注意すると、カイエは恥ずかしそうに舌を出す。

「アハハッ、ごめん」

「で……今は、何の数式を考えてたのさ？」

呆あきれて訊たずねると、カイエは首を横に振る。

「数式じゃないよ」

カイエは空を見上げ、瞳ひとみを閉じる。

「月への飛行」

バートもカイエを真ま似ねて、目を瞑つむる。

眩まぶしい光の向こうに、子どものときに見た夢の続きを描く。

当時は想像もしなかったコンピューターを武器にして、ブルーエンジェルを月へ飛ばす。

その日には、教会の子どもたちもいっしょに月を見られるといい。

カイエが小型衛星を墜落させた丘陵に、天体望遠鏡を置いて。

宇宙飛行士の瞳　Очи　космонавт

共和国の隣国にある高級レストランで、レフとイリナはディナーを楽しんでいる。
「くりーむそーだ……？　へぇ。バニラの香りが素敵ね。人間の飲み物も奥が深いわ」
気取って言うイリナだが、口の周りにクリームの泡をつけている。
イリナは周遊する国々の炭酸飲料を飲んでは、舌した鼓つづみを打っている。どこへ行っても警護がくっついてくるのは気に入らず、写真をたくさん撮られるのには辟へき易えきしているようだが、初めての旅を満喫しているようだった。
「ねえ、レフ。連合王国には、どんな炭酸があるのかしら？」
「炭酸より、カイエに会える日が楽しみじゃないの？」
テレビのニュースでパレードを見たイリナは「カイエと会って話したい」と心を躍らせているようだった。宇宙開発の現場で活躍する新血種族が現れて嬉しいのだろう。吸血騒動で責められているときは「かわいそう」と心配していたが、世間の誤解も今や解けた。
にもかかわらず、レフのかけた言葉にイリナはムッと頬ほおを膨ふくらませた。
「……銀髪が好きなんだ？」
「……なんのことだよ？」
さらにイリナは探るような目をレフに向ける。
「カイエとバート、どっちと会いたいの？」
「両方と会いたいけど……」
「ふーん……」

黙り込んでクリームソーダを飲むイリナを横目に、レフは窓の向こうに上がった月を見上げる。

この国は夜だが、連合王国はまだ太陽の時間だろう。

同じ月を目指し、同じ夢を持つ同志なのに、距離も関係性も果てしなく遠い。

競争相手がいることで技術力が磨かれ、開発者の士気が高まるのは事実だが、国境など関係なく、手を取り合って協力できればと思う。

「またリュドミラに『甘い』とか言われるんだろうな……」

自じ嘲ちようするとレフは蒸留酒をグラスに注そそぎ、連合王国の同志に乾杯する。

何年後でもいい。

いつの日か笑顔で語り明かし、一機のロケットで月へ飛び立とう。

宙そらは自由なのだから。

あとがき

今巻は舞台が連合王国に移り、役職も技術者側でした。
いかがでしたでしょうか？

じつは、今巻の発売日である二月二〇日は、一九六二年、アメリカで初めて有人軌道飛行が成功した日でもあるのです。そして一〇か月前、二巻の発売した四月は人類初の宇宙飛行が成功した月でした。ちなみに一巻の作中時期は一二月で、発売も一二月。
このリアルタイム進行感。
というわけで一九六〇年代前半の話なのですが、秘密主義の某国に比べれば資料もあるだろうと考えていたものの、蓋ふたを開けてみれば、アポロ計画以外は翻訳されたものがとにかく少ない。
ちょうど『Ｈｉｄｄｅｎ　Ｆｉｇｕｒｅｓ』（邦題『ドリーム』）という宇宙開発初期を描いた映画が公開されたので参考にしつつ（時代や設定が被かぶってて驚いたほど）、海外の英語サイトをグー○ル翻訳で読み漁あさるという苦行となりました。しかし今の機械翻訳はすごくて、普通に読める。
そんなふうに、今でこそ便利に使っているコンピューターが、たった半世紀前は謎なぞの機械と思われていた。そんな史実をベースにしてます（史実は『Ｈｉｄｄｅｎ』でしたが、レフとイリナの活躍の影響で『Ｏｐｅｎ』になってます）。
ちなみに本文中に出てくる数式は、実際に当時の宇宙飛行に使われた技術書からの抜粋です。
ところで最近は月面探査レースがあるなど宇宙開発が熱を帯びてる気がしますが（ＨＡＫＵＴＯというプロジェクトに、コローヴィンの名でごく少額ですが支援しました）、さて、現実世界を含めて、誰が月面に

着陸するでしょうか？

謝辞を。

担当の田た端ばた様。いつも軌道修正ありがとうございます。今回も無事に着水できました。

かれい様。新編ということで大量の新キャラ……眼福に次ぐ眼福で、宇宙的感謝です。

そして、サイエンスライターの秋あき山やま文あや野の様、ＴＥＬＳＴＡＲ宇宙情報を担当していらした土つち谷や純じゆん一いち様には取材などで大変お世話になりました。

最後に、今巻も読んでくださった皆様、本当にありがとうございます。応援していただいたお陰でコミカライズも決定するなど、昨年は良いことがたくさんありました。今年も良いご報告ができるように頑張ります。

牧まき野の圭けい祐すけ

牧野圭祐
Keisuke Makino

ライトノベル以外にもゲームやドラマなど執筆。前巻まではロシア料理でしたが、今巻では激辛ケイジャン料理が食べたくなりました。炭酸水は備蓄しています。

小学館ｅＢｏｏｋｓ
月とライカと吸血姫　3

２０１８年２月23日　電子書籍版発行

者　牧野圭祐

人　立川義剛

人　野村敦司

集　田端聡司

所　株式会社　小学館

〒１０１-８００１

東京都千代田区一ツ橋２-３-１

s-ebook@shogakukan.co.jp

本　２０１８年２月25日　初版第１刷発行

©KEISUKE MAKINO 2018 ISBN978-4-09-451720-0

※製品版の巻末についている『ガ報』の情報は底本発行日時点のものです。

※ご注意
本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償にかかわらず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。
個人利用の目的以外での複製など違法行為、もしくは第三者への譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。

GAGAGA BUNKO
FEBRUARY
2018
No.130

ガガガ文庫

10th Anniversary GAGAGA
ガガガがやらなきゃ誰がやる!!!!!!!!!!

ガガガ文庫
2月刊
絶賛発売中
!!!

チョコよりもあま〜い青春をめしあがれ！

寒さを吹き飛ばす絶好調♡粒ぞろいのラインナップ

裏面にも情報満載!

定価:本体574円+税

著者コメント

アニメのブルーレイボックスもよろしくお願いします!

新人たちが続々とデビューを果たし、
いよいよ「妹のすべて」の
アニメの放送が近づくなか、
伊月や千尋遷の関係にも変化が訪れる。
大人気青春ラブコメ群像劇、
新たな妹キャラも登場して
ますます波乱の第9弾登場!

[妹さえいればいい。9]

著:平坂読 イラスト:カントク

5TH CAR

クリミアとヴィクターの絆が試される――。
クリミアとヴィクターの旅は、最終地へと向かっていた。
そして、クリミアと悪魔化を止められないヴィクターが終着の地で目にするものとは？
魔法医学史に名を刻む、医療ファンタジー堂々完結。
定価：本体667円＋税
魔法医師の診療記録
7
著者コメント
さあさあ、怪奇、魅惑、戦慄に胸躍る大冒険物語はいよいよ千秋楽とあいなりました！ 快筆！ 熱筆！ 作者も工夫工夫を凝らして万事を擲って執筆いたしましたので、是非ともご近所様にも御吹聴！ 読むも涙、書くも涙の大感動の大団円！ これにて魔法医師の診療記録全巻の終わりにございます！
［魔法医師の診療記録7］
著：手代木正太郎　イラスト：ニリツ

コミックDAYS（講談社）にて
コミカライズ決定!!!
宙と青春の物語、
連合王国編始動！
定価：本体630円＋税
人類史上初をかけた有人宇宙飛行計画で、
共和国に惨敗した連合王国。
――起死回生の一手は、共和国より先に
月に到達することのみ。宙を夢見る新人技術者の
青年と月を嫌う新血種族の
才媛が紡ぐ新たな物語がここに。
著者コメント
新章なのでキャラも舞台も違いますが、もちろん共和国の面々も絡んできます。楽しんでいただけましたら。
［月とライカと吸血姫3］
著：牧野圭祐　イラスト：かれい

出逢いと別れの異世界修学旅行、最終日！

定価：本体611円＋税

著者コメント

これにて最終巻。異世界から帰るまでが修学旅行、彼らの旅の終わりまでお付き合いいただければ幸いです。

最後のクラスメート山田は、
魔王を倒し異世界を救った
勇者となっていたが、
日本へ還りたくないと言い出す。
浩介たちは山田の説得を試みながら、
プリシラとの別れの日が
近付いていることを意識する――。

『異世界修学旅行7』

著：岡本タクヤ　イラスト：しらび

※イラストは制作中のものです。

ガガガブックス
GAGAGA BOOKS

死してなお国を想った英雄の再・英雄譚。

定価：本体1,200円＋税

乱世の英雄が、二百年後の世界に
アンデッドとして蘇る！
だが、戦乱の世を生き抜いた彼にとって、
蘇った時代はあまりにぬるい世界で？
小説家になろう発、血風吹き荒れる
王道ファンタジー開幕！

著者コメント

熱く、クールに、そして圧倒的にをモットーに書きました！ 一読すれば、興奮すること間違いなしです！

［元将軍のアンデッドナイト］

著：猫子　イラスト：晩杯あきら

名探偵ガガガくんが徹底検証！「妹さえいればいい。9」発売記念

CAGACA

アニメ化で人気急上昇!?のヒロイン

俺たちは、白川 京さえいればいい。

昨年アニメ化されたことでさらに盛り上がりを見せた本作!! そんななか、とあるヒロインの魅力に目覚めたという声もちらほら…！ それはなぜなのか?! 彼女の名は白川 京。ガガガくんが、京の魅力をじっくり検証してみたヨ!

CAGACA

白川 京とは?

主人公・伊月の大学時代の同期で、伊月が大学を中退したあとも交友を続ける。伊月を通してライトノベルの世界に触れ、那由多や春斗、香ら他のクリエイターたちとの親交も深めている。恋に迷い友情に迷い夢に迷う、青春三冠王ダヨ!

検証1 明るくてノリがいい

真冬に沖縄旅行に行くハメになったうえに、那由多に「泳ぎましょうこと翔引に誘われ、海に飛び込む京（しかも全裸）。お調いをなかなか断れない彼女は「流されやすい」とも言えるかもしれないが、恥じらいつつもいつのまにか全力で楽しんでしまう。その姿に胸キュン!!

検証2 人並みはずれた思いやりと包容力

▼恋と友情の板挟みで泣いてしまった那由多を、そっと抱きしめる京（ただし全裸）。一番辛いのが自分でも、目の前にいる大切な人を優先する。人の気持ちを察して献身してくれる京は、皆の精神的な拠り所にもなっている。

検証3 イマドキ女子大生に見えて… 実は超ウブ

▲伊月原作の「妹のすべて」コミカライズに向けて、ヒロインを描くための全裸モデルにされる京。よりリアルなヒロイン描写のため、と赤面しつつしぶしぶ協力。羞やかな容姿から「ビッチ」呼ばわりされる京だが、実際は超まじめで純情。仕事でも恋愛でも一途で真摯な姿勢がいじらしい。

CAGACA

おおお… これは京の幸せを願わずにはいられないネ! 今回は名探偵ポアロになりきってリサーチしたガガガくんだったケド、結局京の魅力はかわいいし、優しいし、まじめだし… そしてなんたって全裸だしってことでナゾは解けたネ! 全裸京、スバラシイ!!

イラストカントク

ここガ知りたい! ガガガ特捜部

今回は先生方への「ずっと勘違いしていたこと」についての質問。「あるある」から「とんでもない」ものまで…… ホント、勘違いってコワい。

質問 僕は「多機能トイレ」をずっと「滝のおトイレ」だと思っており、先日恥ずかしい思いをしました。先生方の「勘違い」エピソードがあれば教えてください。

(空耳ヤマー・埼玉県・22歳)

●どうしてそうなった!?……今慈ムジナ先生☞最近まで枝豆がブドウみたいに木になる物と思っていました。知人に爆笑されました。
宮野美嘉先生☞子供の頃、「あわてんぼうのサンタクロース」を「暴れん坊のサンタクロース」だと思ってました。

●え、違うの…?……牧野圭祐先生☞一姫二太郎って女1人に男2人だと思ってましたね……。
田尾典丈先生☞昔、出師の表を「しゅっしのひょう」とか読んでました。一度思い込むと修正するのが大変です。読み方が多い漢字は嫌いだ……。

●気づきたくなかった(汗)……天津 向先生☞天津というコンビを引っ張っていっているのは俺だと思ってました。しかし、相方の木村くんがエロ詩吟で大ブレイクして、むちゃくちゃ引っ張ってもらった時に「あ、勘違いしてた」と気付きました。
オキシタケヒコ先生☞勘違いを口にするだけならいいじゃないですか。文章に残して本になってしまうという恥ずかしさをご想像くださいまし(編集さんも校正さんも気付かなかった勘違い単語が一巻にあるので探してみましょう)。

質問募集! 郵便ハガキ、Twitterで先生方に訊いてみたいことを書いて送って下さい。あなたの質問を特捜部が徹底調査致します。

その他の先生方からの回答は、編集部ログ(GAGAGAWIRE)で見られます。

疑問質問なんでもござれ! ガガガくん通信!!!

GAGAGA

Twitterやハガキでボクへの質問を大募集ダヨ!

Q:最近、ミステリー小説にはまっています! が、自分はついオチが気になってしまい巻末から読んでしまうんです。ちなみに最近映画化もされたあの本の犯人は……。 (カズマ・19歳)

A:ワワワ! ネタバレストーップ! ボクはちゃんと自分で推理しながら読む派だヨ。犯人を当てたことないケド……。そんなキミには、オチから読んでも楽しめる『ジャナ研の憂鬱な事件簿』がオススメ! キャラもとっても魅力的で、青春ミステリーの醍醐味が味わえる一冊ダヨ!

著:酒井田寛太郎
イラスト:白身魚

GAGAGA headline

ガガガ文庫作品は「本」を飛び出し
原作とは異なる魅力を発信中!!
のコーナーはガガガのメディアミックスニュースを毎月ご紹介!

コミカライズ 月とライカと吸血姫

大躍進のコスモノーツグラフィティがついにコミカライズ!

「このライトノベルがすごい!2018」文庫部門4位、新作部門3位にランクインした話題作が、漫画アプリ&WEB「コミックDAYS」(講談社)にてコミカライズ連載、3/8開始!

漫画:掃除朋具　原作:牧野圭祐　キャラクター原案:かれい

コミカライズ 妹さえいればいい。

コミック同時発売!

「妹さえいればいい。@comic」第5集&『妹さえいればいい。外伝 妹にさえなればいい!』(スクウェア・エニックス刊)第3巻が発売中!

作画:い~どう~

漫画:コバシコ

TVアニメ Blu-ray BOX下巻、3月23日発売!

キャラクター原案・カントク先生描き下ろしBOXイラストや、原作者・平坂 読先生書き下ろしシナリオによるオーディオドラマ「大野アシュリールート」「三国山蛮ルート」など豪華すぎる特典が満載! Blu-ray BOX上巻も好評発売中!

※特典・仕様は予告なく変更になる場合がございます。
※特装限定版は予告なく生産を終了する場合がございます。

©平坂読・小学館／妹さえいれば愛員会

「白川 京」フィギュア予約受付中!

コトブキヤオンラインでは予約限定特典として表情替えパーツ「泣き顔」を付属! こちらも要チェック!

https://www.kotobukiya.co.jp/product/product-0000002805/

実写映画 二度めの夏、二度と会えない君

Blu-ray&DVDが2018年2月23日に発売決定!!

■Blu-ray特装限定版:5800円(税抜)　■DVD:3800円(税抜)
※特装限定版は予告なく生産を終了する場合がございます。

©2017赤城大空・小学館/「二度めの夏、二度と会えない君」パートナーズ

GAGAGA BUNKO & GAGAGA BOOKS LINE UP!

3月刊 3月20日ごろ発売!!

[クズと天使の二周目生活2]
著:天津 向 イラスト:うかみ
萌香が声優業界にいない世界線が生まれてしまった。「たらればノート」からその原因を探ろうとする桃也だったが……。

[クロハルメイカーズ! 恋と黒歴史と青春の作り方]
著:砂義出雲 イラスト:冬烏来彩
器用さも、協調性もない。でも何かを作りたいという衝動が、ある!まだ、何者にもなれない俺達、創造部の「青春の作り方」。

[されど罪人は竜と踊る㉑]
著:浅井ラボ イラスト:ざいん
エリダナへの帰途につくガユスとギギナ。事務所ではく虎目>探しが行われ、世界はついに戦禍の時代へと入る。

[ジャナ研の憂鬱な事件簿3]
著:酒井田寛太郎 イラスト:白身魚
奇妙な絵画に秘められた謎を解き明かす「自画像・メロス」など3篇を収録。啓介と真冬の関係が大きく動く、3巻!

[出会ってひと突きで絶頂除霊!2]
著:赤城大空 イラスト:鹿太郎
退魔師としての仮免許を得た晴久と美咲たち。サキュバス王の性遺物を巡って新しい事件が幕を空ける。

[物理的に孤立している俺の高校生活4]
著:森田季節 イラスト:Mika Pikazo
修学旅行が近づき焦りが募る業平。そんな中、いかにもリア充な後輩女子が人研を訪れて……? 青春未満ラブコメ第4弾!

ガガガブックス **[最下位職から最強まで成り上がる3 ～地道な努力はチートでした～]**
著:上谷 圭 イラスト:桑島黎音
ついに端を発した大陸戦争。二つの国に引き裂かれるルークとリリの運命は如何に。Web発王道ファンタジー、第3弾!

4月刊 4月18日ごろ発売!!

[年下寮母に甘えていいですよ?2] ―著:今慈ムジナ イラスト:はねこと

[弱キャラ友崎くんLv.6] ―著:屋久ユウキ イラスト:フライ

[青春絶対つぶすマンな俺に救いはいらない。2] ――著:境田吉孝 イラスト:U35

[漂海のレクキール2] ―著:秋目 人 イラスト:柴乃櫂人

[編集長殺し2] ――著:川岸殴魚 イラスト:クロ

ガガガブックス **[レイロアの司祭さま3 ～はぐれ司祭のコツコツ冒険譚～]** ――著:鷹丸 イラスト:野崎つばた

発売タイトル及び刊行予定は変更になることがあります。

ガタログ2018全員プレゼント!!

今年もやります! 作家先生のインタビューからガガガ文庫全タイトルがのった目録、そして注目作の特集まで、ファン必携の1冊です! ガガガ文庫1月刊、2月刊の帯に付いている応募券を2枚集めてご応募ください!

ガタログのココがスゴイ!!

1. 創刊からのガガガ文庫全タイトル情報を網羅!
2. ココでしか読めない特集、企画が満載!
3. どこにも売っていない非売品!

※応募方法はガガガ文庫1月刊、2月刊の帯、ガガガ文庫公式サイト「GAGAGAWIRE」にてご確認ください。

※書影は前年のものです。

第13回 小学館ライトノベル大賞

早くも、第13回ライトノベル大賞の応募がスタート! デビューを目指す皆さまに向けて、先輩受賞者からメッセージをいただきました。

第11回小学館ライトノベル大賞・ガガガ大賞受賞者!

遍 柳一先生から応援のメッセージ!!!!!

[平浦ファミリズム]
著:遍 柳一
イラスト:さかもと侑

初めて小説を書いたのは、大学生の頃でした。好きな小説に感化され、「自分もこんな物語を!」と意気込んでいた訳ですが、いざ書いてみると、これがワード一枚で挫折。それから数年、社会人となり月並みな人生を送る中、ふと昔の創作意欲が戻ってきました。

「……もう一回、書いてみよう」。すると、今度はすらすら書ける。平凡と思われた生活も、どうやら創作の上での礎となっていたようです。タイミングに『遅い』はありません。皆さんもぜひ、あと一歩を踏み出してみてください。

ゲスト審査員は渡井ラボ先生

大賞	ガガガ賞	優秀賞	審査員特別賞
賞金200万円	賞金100万円	賞金50万円	賞金50万円
&デビュー確約!!!	&デビュー確約!!!	&デビュー確約!!!	&デビュー確約!!!

締め切り 2018年9月末日(当日消印有効)

詳しくはガガガ文庫公式HP、GAGAGAWIREをご覧下さい。▶ http://gagagabunko.jp/

書店員さんとガガガくん

GAGAGA

ガガガくん

今月の書店員さん

まだまだ寒い日が続くけど… みんなは風邪ひいてないカナ？
万が一寝込んでも、ガガガ文庫がお供なら退屈しないカモ…？

GAGAGA SUPPORTER SHOP

アニメイト横浜 佐藤淳一さん

住所:〒220-0011 神奈川県横浜市西区高島2-12-12 ヨコハマプラザホテル1F/2F/3F 電話番号:045-453-6990
営業時間:午前10時～午後9時 定休日:なし URL:https://www.animate.co.jp/shop/yokohama/

お客様に楽しんでいただける空間がここにあります。横浜へ来た際は是非、アニメイト横浜にお立ち寄り下さい。

佐藤さんのオススメ本

物理的に孤立している俺の高校生活

異能力者!? ラブコメ!? と聞いたら読まずにはいられない。異能力×青春ラブコメのタッグは最強です!

▶ガガガの作品がズラリ！こんなにたくさん並んでいても、それぞれの書籍を思わず手に取ってみたくなる工夫と仕掛けがすごいネ！

編集後記

・久々に猫を飼おうと思っているんですが、
脱走防止対策を練っているうちに時は過ぎ……。(野)
・花粉症はイヤだけど、寒い季節は早く終わって欲しい。日本の四季め～!(☆)
・帰省先の福岡で毎日のようにうどんを食べてたらさらに太った。(濱)
・はじめてのおつかい、何度見ても泣ける。(岩)
・PSVRを買うか、最近ずっと悩んでる。(小)
・「一生幸せでいたかったら、釣りを覚えなさい」に倣って最近アングラーな感じです。(田)
・筋トレ始めました。プロテイン難民なので、おいしいのを見つけたいところ。(林)

編集部への質問もこちら!!

作家・イラストレーターへのファンレター、感想などは以下の宛先に、作者名を明記のうえ、お送りください。

〒101-8001 東京都千代田区一ツ橋2-3-1 小学館ガガガ文庫編集部○○○(作者名)宛

ガガガ10周年電子特典　カバーイラスト

10
th Anniversary
GAGAGA
ガガガがやらなきゃ誰がやる!!!!!!!!!

10
th Anniversary
GAGAGA
ガガガがやらなきゃ誰がやる!!!!!!!!!

10
th Anniversary
GAGAGA
ガガガがやらなきゃ誰がやる!!!!!!!!